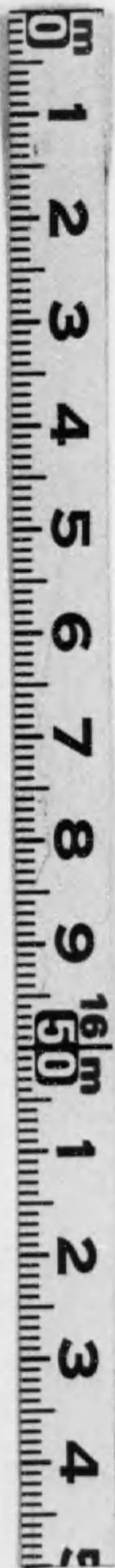


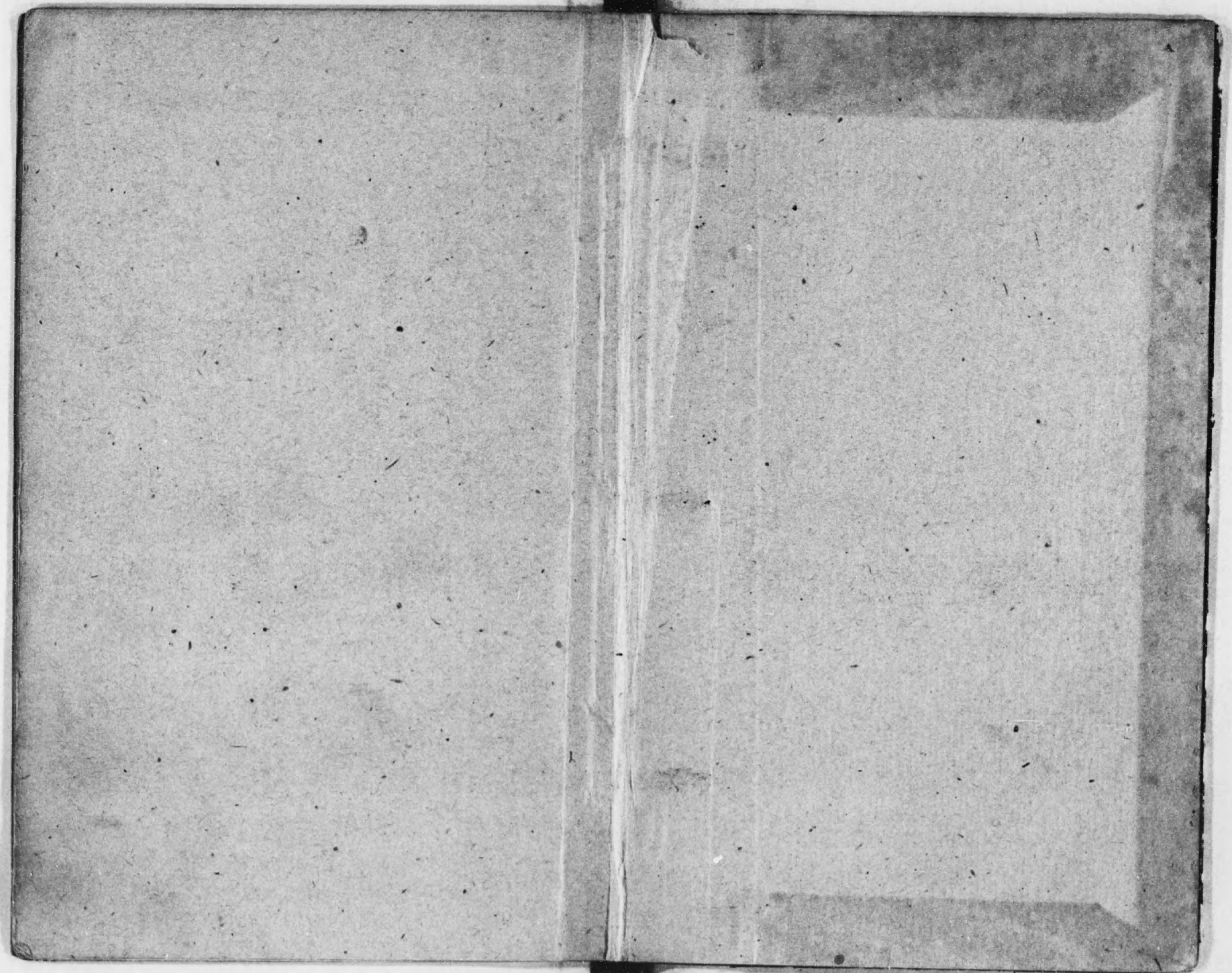
502

289



始





福田德三著

社會運動と勞銀制度

第十版



502-289

に就て考察したものであります。

斯く、本書は其全體を通じて、「社會政策と階級闘争」の通俗的解説並に補論たる性質を有つものであります。但し、何れも、極めて限られた時間に於て、成る可く多くの内容に涉つて説明しようと思つた爲めに、粗雑に流れた點や、説いて盡さざる點が甚だ多いのであります。殊に勞銀制度に就ては、私はモット詳しく論述したいと切望して居るので、何れ他日此問題を更らに詳述したものを公けにしたいと存じて居ります。本書に於ては、兎に角一應大體を見て頂けば宜しいと云ふ積りで、社會運動、勞働爭議の二概論と共に一書に收めました。其故は、本書を初めから順に通讀して頂けば、各問題の所在、殊に其の前後の連絡が粗ぼ明瞭になり得るかと思つたからであります。

終りに、勞銀形態調査に就て、私の發信に對して豊富な材料を提供し

て下さつた全國百六十四の工場會社、鑛山、商店、并びに百七十六通の綿
 密な直接調査報告を與へられた友人、學生諸君、殊に、大阪市社會部勞働
 調査課長山口正君、及同課員各位、神戸高商の坂西教授、大阪高商の寺尾
 教授、上田蠶絲専門學校の早川教授、東京商大助手井藤商學士諸彦に、此
 機會を以て、厚く御禮を申述べて置きます。

大正十一年六月十日

福田 徳三

謹 識

社會運動と勞銀制度

目次

第一篇 社會運動の理論的根據

第一章 社會觀念の發達

個人、國家、社會(3) 個人思想と國家思想(4) 勞働對資本(5) 個人意識の發達の(6) 日本の家族制度(7) 社
 會原始の單位(8) 大家族制の遺物(9) 西洋にもあり(10) 個人の發達後、處國家、社會の發達亦後(11)
 露西亞とマ那(12) 背後の大なる力(13) 社會の發見(14) より狭い社會の概念(15) 例を以て説く(16) 社會問題
 の發見(17) 第三の發見(18) 今日未だ其途中(19)

第二章 人類生活共同化の行程

無限の進歩と有限の人力(20) 共同生活による其調和(21) 自然と文化(22) 自ら目的を有する手段(23) 不足
 の征服と其組織(24) 體性上の不足の征服(25) 社會主義の謬見(26) 婚姻は普通の結合形式(27) 社會も國家
 も家族より起る(28) 社會結合の爲めの格段なる力(30) 殆んど國家に盡く(31)

第三章 經濟生活と人格生活

三一五

有限の生活と無限の生活⁽³³⁾ 物の所有と支配⁽³⁴⁾ 質より来る制限、束縛⁽³⁵⁾ 二個の相反する見解⁽³⁶⁾ 量より来る制限と束縛⁽³⁸⁾ 職業の分立による不具化⁽³⁹⁾ 人格の格付と其解放⁽⁴¹⁾ 耐へ難き矛盾⁽⁴²⁾ 社会に於ける上下關係と其破壊⁽⁴³⁾ 絶えざる内在的變遷⁽⁴⁴⁾ 運動の最も著しきは經濟生活⁽⁴⁶⁾ 經濟生活特有の人格的束縛⁽⁴⁶⁾ 人格の支配者起る⁽⁴⁷⁾ 支配階級と被支配階級⁽⁴⁹⁾ 流通經濟と支配の増進⁽⁵⁰⁾ 所有の種類と支配の種類⁽⁵²⁾ 三者を兼ねるもの⁽⁵⁵⁾ 以上を要言すれば⁽⁵⁵⁾

第四章 共同生活による人格の解放と制限

五七一—一〇一

共同生活の作り出す新人格⁽⁶⁷⁾ 孤立生活の自決と束縛⁽⁶⁵⁾ 共同生活による經濟生活からの解放と束縛⁽⁶⁶⁾ 新なる矛盾⁽⁶⁸⁾ 共同化の形は人格の創成⁽⁶¹⁾ 個人人格と國家人格⁽⁶²⁾ 國家人格に於ける一矛盾⁽⁶³⁾ 國家なければ個人は滅ぶ⁽⁶⁵⁾ 國家人格の完成⁽⁶⁴⁾ 國家以外の共同生活⁽⁶⁶⁾ 所謂國家と社会との衝突⁽⁶⁷⁾ 國家に關する謬見⁽⁶⁷⁾ 國家真正の本質⁽⁶⁸⁾ 國家人格は未だ個人人格と同一ならず⁽⁶⁸⁾ 人格としての株式會社⁽⁷²⁾ 凡て社会の中に在り⁽⁷⁰⁾ 社會主義、共產主義の異見⁽⁷⁵⁾ 社會主義と國家主義⁽⁸⁰⁾ 無政府主義と社會主義⁽⁸²⁾ 國家と社会とは兩立す⁽⁸³⁾ 國家の充實は英吉利が第一⁽⁸⁴⁾ 國家の充實は先づ經濟上から⁽⁸⁸⁾ 財の生活の非人格性、自然性⁽⁸⁶⁾ 共同生活に於ける人格と非人格の衝突⁽⁸⁹⁾ 國民經濟の計劃化、統一化⁽⁹¹⁾ 國民經濟と國家との衝突⁽⁹¹⁾ 簡易保險の一例⁽⁹³⁾ 所謂民衆の階級⁽⁹⁶⁾ 一切の社會化は非なり⁽⁹⁶⁾ 之を要するに⁽⁹⁶⁾

第五章 人格闘争としての社會運動

一〇一—一四九

所有の保護は國家の任務⁽¹⁰¹⁾ 平面的差別と上下的差別⁽¹⁰²⁾ 他人決定労働と從屬關係⁽¹⁰⁴⁾ 労働問題とは他決労働問題の謂⁽¹⁰⁶⁾ 要は自決要素を多くすること⁽¹⁰⁷⁾ 自決は能率を増進す⁽¹⁰⁹⁾ 獨逸の大學⁽¹¹¹⁾ 國家亦然り⁽¹¹²⁾ 國家意思の自決と國民の参加。其一 憲法のこと⁽¹¹³⁾ 國家意思の自決と國民の参加。其二 行政のこと⁽¹¹⁵⁾ 國家意思發動の機關⁽¹¹⁹⁾ 人格の充實と國民人格の充實⁽¹²⁰⁾ 行政の第一義⁽¹²¹⁾ 利己的行政は國を滅ぼす⁽¹²²⁾ 人格充實の爲めの第一の任務⁽¹²⁴⁾ 社会に於ける非人格性⁽¹²⁵⁾ 非國家的の力⁽¹²⁸⁾ 經濟上の利害關係に現はる⁽¹²⁹⁾ 所有が非國家的の力となる⁽¹³¹⁾ 所有慾、支配慾、權力慾⁽³²⁾ 産業上の支配に對する反抗⁽¹³¹⁾ 滑稽な支配慾⁽¹³⁵⁾ 反抗漸く加はる⁽¹³⁵⁾ 人格の尊貴を損ず⁽¹³⁸⁾ 「社會的」てふ考の對見と其意義⁽¹³⁾ 社會運動と階級運動⁽¹¹¹⁾ ブルヂオアとプロレタリア⁽¹⁴³⁾ 支配關係の擴張⁽¹⁴⁵⁾ 社會政策の意義と社會運動の考究⁽¹⁴⁷⁾

第二篇 労働争議の意義及種類

一五一—二五六

階級闘争としての労働争議⁽¹⁵³⁾ 徒弟制度⁽¹⁵³⁾ 温情主義は時代錯誤⁽¹⁵⁶⁾ 今日の労働争議⁽¹⁵⁵⁾ 労働保護の三要點⁽¹⁵⁵⁾ 労働契約の特質⁽¹⁵⁸⁾ 住宅の貸主と借主⁽¹⁵⁹⁾ 労働者人格の支配⁽¹⁶¹⁾ 綜合給付と特定給付⁽¹⁶³⁾ 確定保險と豫定保險⁽¹⁶⁴⁾ 綜合給付による人的勤勞⁽¹⁶⁵⁾ 労働は綜合給付⁽¹⁶⁷⁾ 給付特定權雇主に在り⁽¹⁶⁸⁾ 労働争議は他人決定労働に起る⁽¹⁶⁹⁾ 請負労働は然らず⁽¹⁷¹⁾ 雇傭労働の人格壓迫⁽¹⁷²⁾ 労働供給の調節難⁽¹⁷³⁾ 労働者は多く

は其日暮し⁽¹⁷⁴⁾ 労働の給付は人格と不可離⁽¹⁷⁵⁾ 自己決定労働は壓迫を感じる勢し⁽¹⁷⁶⁾ 契約の名實相反す⁽¹⁸⁰⁾
製絲工場の實例⁽¹⁸²⁾ 労働協約の必要⁽¹⁸³⁾ 價格開争としての労働争議⁽¹⁸⁵⁾ 財成争議の手厚き保護⁽¹⁸⁷⁾ 労働争
議も亦同様たる可し⁽¹⁸⁸⁾ 生産要具の説明⁽¹⁹⁰⁾ 生産要具高き所先づ労働運動起る⁽¹⁹¹⁾ 賃銀争議と待遇争議⁽¹⁹²⁾
権限争議の發生⁽¹⁹⁴⁾ 更らに細別すれば⁽¹⁹⁵⁾ 告知期限の嚴守⁽¹⁹⁹⁾ 賃銀の差引⁽²⁰⁰⁾ 罰金の濫用⁽²⁰¹⁾ 時間争議⁽²⁰³⁾
時間給と出来高給⁽²⁰⁴⁾ 権限争議の三種⁽²⁰⁵⁾ 「クロロスト・ショップ」のこと⁽²⁰⁷⁾ 経営参加権限争議⁽²¹¹⁾ 企業
参加と現業参加⁽²¹²⁾ 工場管理と工場委員制度⁽²¹³⁾ 嚴別は不可能⁽²¹⁵⁾ 神戸争議の實例⁽²¹⁶⁾ 争議當事者の資
格より見た分類⁽²¹⁸⁾ 獨立性大小の四の場合⁽²¹⁹⁾ 實際は區々たり⁽²²²⁾ 争議の合理性による分類⁽²²⁴⁾ 滑稽な一
例⁽²²⁵⁾ 公平なる賃銀⁽²²⁷⁾ 市價標準滑尺率賃銀⁽²²⁹⁾ 價格の決定⁽²²⁹⁾ 賃銀も一の價格⁽²³¹⁾ 簡單なる説明⁽²³²⁾ 極端
者價格を定む⁽²³⁴⁾ 最強者と最弱者によつて定まる⁽²³⁶⁾ 優秀労働者餘剰の占領⁽²³⁷⁾ 現實の賣買者と疏外せ
られた賣買者⁽²³⁸⁾ 手近な説明⁽²³⁹⁾ 賃銀の不確定列と懸引列⁽²⁴¹⁾ 列の幅廣きほど平和解決の見込多し⁽²⁴³⁾ 仲
裁調停の機關⁽²⁴⁴⁾ 労資協調は出来ない相談⁽²⁴⁵⁾ 要は合理化にあり⁽²⁴⁶⁾ 唯一の正義點は見出し得ず⁽²⁴⁷⁾ 産業
の平和⁽²⁴⁹⁾ 要は争議の醇化即ち厚生化⁽²⁵¹⁾ 現在争議と將來争議⁽²⁵³⁾ 將來争議必ず増加す可し⁽²⁵⁵⁾

第三篇 勞銀制度

勞銀制度討議報告要領⁽²⁶⁰⁾

報告講演

緒言⁽²⁷⁶⁾ 本邦勞銀形態の調査⁽²⁷⁷⁾ 調査の經過⁽²⁷⁸⁾ 調査結果の分類⁽²⁸²⁾ 勞銀形態分布の一斑⁽²⁸⁴⁾ 大體的印象⁽²⁸⁶⁾
勞銀制度の意義⁽²⁹²⁾ ウエーヂ・システムの謂に非ず⁽²⁹³⁾ 階級討論の一例⁽²⁹⁶⁾ 勞銀系統と勞銀形態⁽²⁹⁷⁾ 勞銀
形態研究の必要⁽³⁰⁰⁾ 賃銀は報酬なり分配高に非ず⁽³⁰²⁾ 相對的餘利價值の較取り⁽³⁰⁶⁾ 能率の増進が雇主唯一
の手段⁽³⁰⁹⁾ マルクスの正しき點と誤れる點⁽³¹⁰⁾ 能率増進法としての科學的經營法⁽³¹²⁾ 勞銀系統も勞銀形態
も能率増進の方法⁽³¹⁷⁾ 雇傭契約の由來⁽³¹⁷⁾ 製絲工女の雇傭契約⁽³¹⁹⁾ 事前の約束、事後の支拂⁽³²⁵⁾ 勞銀の保
護⁽³²⁵⁾ 割合の争⁽³²⁷⁾ 勞銀の率と支拂の形態⁽³²⁹⁾ 相對的餘利價值論と科學的經營法⁽³³¹⁾ 一の實例⁽³³²⁾ 勞銀率
の保護と勞銀形態の保護⁽³³⁴⁾ 係争對象の限局⁽³³⁵⁾ 勞銀形態と勞傭協約及工場委員制度⁽³³⁷⁾ 實際の必要ある
を要す⁽³³⁷⁾ 勞銀形態の列舉、時間給⁽³⁴²⁾ 出来高給⁽³⁴³⁾ タスク給⁽³⁴³⁾ 團體給⁽³⁴⁴⁾ 團體タスク及團體出来高給⁽³⁴⁸⁾
團體累進給⁽³⁴⁾ 其他の形態⁽²⁴⁰⁾ 利潤分配制度と出来高利益分割制度⁽³⁵⁰⁾ コールの分類⁽³⁵¹⁾ 學理的分類⁽³⁵³⁾ レ
リング分類の説明⁽³⁵⁵⁾ ベルンハルトの分類⁽³⁵⁷⁾ 單純時間給と單純出来高給、其他の比較⁽³⁵⁷⁾ 不見識なる加
給⁽³⁶¹⁾ 労働費以外の小費⁽³⁶²⁾ 出来高給の長所と短所⁽³⁶³⁾ 出来高給に對する労働者の反對⁽³⁶⁷⁾ 之を免るゝ工
夫・獎勵加給付出来高給⁽³⁶⁹⁾ 獎勵加給付出来高給と排斥する所以⁽³⁷³⁾ 獎勵加給付時間給⁽³⁷⁵⁾ 出来高利益分
割制度⁽³⁸⁰⁾ ハルゼー式⁽³⁸²⁾ コールの連断論を排す⁽³⁸³⁾ 出来高利益分配制度の長所⁽³⁸³⁾ ハルゼー式折衷の關
式⁽³⁸⁸⁾ ローワン式⁽³⁸⁹⁾ 結論⁽³⁹⁶⁾

347

附錄 勞銀形態報告摘要

- 第一類 製絲(4) 紡績(12) 瓦斯紡績(19) 絹絲紡績(21) モスリン紡績(23) 紡績及織物(24) 織物(25) 毛織物製造(26)
- 工(26) 毛布製造(27) 製麻(30) 麻絲製造(32) 其大小製造(33) 染色(36) 染色、整理、製織(39)
- 製鋼(40) 機械工業(41) 工作機械及發動機製作(47) 鑄鋼業(48) 電線被服製造(49) 電線製造(52) ワイヤロ
- 工製造(56) 通信機械建築材料製作(56) 機關車製造(57) 自動車製造(59) 自轉車製造(60) 造船業(61) 鐵
- 船、造機、製罐、電機、造兵(68) 水車製造(70) 貴金屬製造(71) 時計製造(72)
- 硝子製造(75) 陶器製造(78) セメント製造(78) 煉瓦製造(82) 製紙(83) 曹達製造(87) 燐寸製造(88) 豆粕製
- 造(91) 製油(93) 蠟燭製造(93) 製藥(94) 醋酸製造(99) 化粧品製造(99) 染料製造(100) 樟腦再製(101) ゴム製造(108)
- 齒磨製造(104) ペンキ製造(105) 人造肥料製造(105)
- 醬油釀造(107) 酒造(108) 味噌、燒酎釀造(110) 麥酒釀造(111) 製糖(113) 製茶(117) 粉(118) 麵類製造(119) 菓
- 子製造(121)
- 印刷(121) 製本(124) 木管製造(126) 西洋家具(127) 木材器製造(128) 下駄製造(129) 帶皮製造(130) 製靴(130) 諸革
- 製造(135) 防水布製造(138) 洋服裁縫(139) 足袋製造(141) 毛筆製造(141) 樂器製造(142)
- 發電所(143) 電燈(144) 瓦斯製造(144)
- 汽船(145) 鐵道(147) 電車(148) 電力(150) 建築業(150) 仲仕(153) 貸自動車業(154)

第五類

第六類

第七類

第八類

鑛山(155) 炭山(164) 石油採取(173)

(甲) 勞銀形態調查數內譯表
(乙) 勞銀二主要形態分布一覽表

挿 圖 目 次

第一圖	單純時間給	三四二
第二圖	出來高給(請負給)	三四四
第三圖	直線型賃銀形態の生産時間と勞賃費	三五六及三七七
第四圖	獎勵加給付出來高給	三七〇
第五圖	獎勵加給付時間給(累進時間給)	三七六
第六圖	出來高利益分配制度の一(複雜分割制度の一)	三八六
第七圖	出來高利益分配制度の二(複雜分割制度の二)	三八七
第八圖	出來高利益分配制度の三(單純分割制度の一)	三九一
第九圖	出來高利益分配制度の四(單純分割制度の二)	三九二
第十圖	ローワン式による時間當り所得	三九三
第十一圖	對數縱橫線による賃銀形態	三九四

別 表

第一圖	勞働者一人當り一日賃銀並に一仕事當り勞費比較圖表	卷 末
第二圖	全上、三割三分の一加給付ハルゼー式による場合	卷 末
第三圖	全上、五割加給付ハルゼー式による場合	卷 末
第四圖	全上、ローワン式による場合	卷 末

欠

欠

第一章 社會觀念の發達

個人、國家、社會

社會運動の觀念は社會政策、社會主義、社會事業、社會立法等の觀念と同様に「社會」と云ふ觀念から出立して居る。故に社會運動の根本觀念を明瞭にするには、先づ右等の場合に於て意味せらるる「社會」と云ふ觀念を究明する事から始めなければならぬ。「社會」と云ふ言葉は從來二つのものに對して區別す可く用ゐられて居つた。即ち其一は國家に對して區別す可く用ゐられ共二は個人に對して區別す可く用ゐられて居たのである、個人と云ふ觀念も國家と云ふ觀念も共に昔からある。必ずしも國家と云ふ字を使はず單に國と云つたり公と云つたり公共と云つたり様々異なつた字は用ゐるが、要するに國家なる觀念に該當する人間の團集生活と云ふ觀念は昔からある、但し國によつて其發達の度合は色々違ふ。國家と云ふ考へに甚だ重きを置いて居た國民もあ

る、それに重きを置くこと割合に少い國民もあつた。其反對に個人と云ふ考へは何處の國へ行つてもある。これも亦國により或は民度の發達如何によつて其言ひ表はす内容には色々程度がある。併し國家に對してそれと區別せらるべき個人なるものゝあることは誰も皆考へて居つたことである。

個人思想と國家思想

西洋は個人思想が發達して居る、日本には個人思想は西洋ほど發達して居ないで反對に國家思想が發達して居ると云ふ人があるが是は大なる謬見である。西洋に於て個人と云ふ考へが發達して居るのは個人に對抗する國家で考へが發達して居るからである。一方が發達して居るから他方に之れに對抗する考へも亦強くなるのである。男と云ふ觀念が深くなると女と云ふ觀念にも亦特別な意味が附與せられる。元は男と女の區別がはつきりして居なかつた。西洋の言葉では人間と云ふ言葉と男と云ふ言葉は同じである。man と云ふは男でもあり同時に人間でもある、女といふには其に何か制限の文句、英語で云へば前へ woman と云ふ字を付けて woman と云ふ、少し人間の資格の少いもの或は毛色の變つたものといふ様に聞へる。男女の區別が餘りはつきり人間の意識に

上つて居ない時には一つの言葉を以つて凡てを指し、先に飛出して來て幅を利かしたものが男であるから主として男が人間と云ふ言葉を占領した。所が其の男性が段々著しく發達して來ると之に對して餘程遠ひのある女と云ふ考へが強くなる。そこで近來は女性問題、男性に對する女性特有の問題がやかましくなる之を婦人問題と名ける。若し婦人問題なるものは婦人が男子に壓迫せられるから起つて來ると云ふなら、昔の方が婦人問題が遙に盛んでなければならぬ筈である。何んとなれば昔の方が婦人を壓迫することが激しかつたは誰も疑はないことである。然るに婦人を稍々對等に近く扱ふやうになつて來た今日に於て、婦人問題が喧しくなつて來たのは、男性と云ふ考へが發達して來るに従つて之れに對抗して、此れと區別し對立すべき考へとして女性と云ふことが強く感ぜられ意識せられるやうになつて來たからである。

勞働對資本

社會政策の主たる問題とする勞働問題もさうである。勞働と云ふ時には必ず常に資本に對抗するものとして考へられる。資本と云ふ考へが強くなり資本の働きが誰人も看過すること出來ないやうに鮮かになつて來た今日に於て、之に對抗して様々なる點に於て其とは利害關係を異にし、其

據つて立つ立脚地を異にする勞働の考へが強くなる、そこで勞働問題が起つて来る。勞働問題とは一體勞働斗りの問題ではない同時に資本問題である、資本及び勞働問題である。恰も今日婦人問題と云ふのは婦人斗りの問題ではなく同時に男子問題である如くである。所謂婦人問題の取扱ふ點目の中には男子問題が澤山入つて居る、例へば婦人に對する男子の壓迫極暴、之は婦人問題ではない男子の問題である。其を婦人問題の中に入れて居る。今日勞働問題と云ふものの中には資本問題が澤山ある。資本と勞働とが争つて居る勞働者が悪い資本家が悪いと云ひ、或は勞働者にも相當の主張がある、資本家にも相當の主張があると云ふこと、之を皆勞働問題と云つて居るが實は資本及び勞働問題である。

個人意識の發達

個人と云ふ考へも其如くに、個人に對するもの、一つ若くは二つの考へが強くなるに随つて個人と云ふことが著しく意識に上つて来る。日本に於て個人思想が發達して居らないのは國家思想も發達して居らなかつたからである。婦人問題の無い昔は婦人問題もなければ男子問題もなかつた如く、勞働問題の無かつた昔は勞働問題もなかつた如く資本問題もなかつた。個人問題の無い

時は國家問題も大してない兩者ごちや／＼である。日本の方が西洋より國家思想が發達して居つたと云ふことも間違ひであるが、日本の方が個人思想の發達が西洋より少いと云ふことも其の意味に於ては間違ひである。西洋の文明が個人文明であり日本若くは東洋全體の文明が國家文明である譯でも何でもない。人類の發達の道行にはサウ違つた事はない一つの道行である、唯だ向ふが進んで居つてこつちが後れて居るだけの話である。

日本の家族制度

具體的に一例を擧ぐれば、日本は家族制度が大いに發達した國である、之は日本の國粹として誇るべきものであると能く人が云ふ。恰も家族の制度は日本に於ては西洋に於けるよりも遙に違つて居る、西洋に於ては日本ほどに發達して居ないかの如くに云ふが其れは大變な間違ひである。家族制度は日本に於ける發達も西洋に於ける發達も同じ道行を取つて居る。唯だ向ふの方が先きに發達して居つて日本の方が後れて居る、後れて居るからまだ昔の野蠻時代の遺物が澤山あると云ふ違ひがあるのみである。例へば戸主の制度の如き今日の文明の程度に到底容れられない制度がちやんと法律の上にも認めてある。社會の實際に於ては段々無くなつて居るにも拘らず法

律の上では強いて戸主誰と特別な地位を認める、洵に譯の分らないことである。之は日本が遂に後れて居るからである。日本の家族制度に麗はしい點のあることは事實であるが西洋の家族制度にも多くの麗はしい點がある。例へば家を重んずることは決して獨り日本ばかりではない西洋でも左様である、日本にのみ家族制度が發達して居ると思ふのは、西洋のことを少しも知らない否日本のことも知らない謬見である。

社會原始の單位

所謂家族制度の美點とは何であるかと云へば一軒の家の者が別れくにならず、成べく一緒に居て財産も分たない住居も異にしない成たけ一つ所に居る、さうして其の間に温かい情が通つて居る父は家族の者を愛撫する家族の者は戸主を大事にすると云ふ。これは要するに人間の團集の單位が大きいと云ふに外ならない。社會の發達の上にては何れの場合に於ても社會の初めには多勢の團集が一つの經濟團體一つの生活團體であつた。其れが文明の發達と同時に段々縮小的發展を遂げ段々と壞れて來た。日本に於ては昔は「氏」の制度があつた、一つの氏とは大變多數の人から成立つて居るもので大氏と小氏とがある。大氏に至つては甚だ多數の人を包含着して居る、

其の澤山の氏は氏の長者の制令を受け其の下に不分割的に共同の生活をして居つた。其氏の制度に代つて起つて來たものが所謂家門、今日の社會學の術語で云へば「大家族」である。大寶令——適切に云へば養老令——によつて規定せられた戸籍の制度に依つて作られた戸籍の斷簡零墨の遺つて居るのが可なりある、大日本古文書に澤山蒐めてある。此等を見ると一戸には最も多いものは九十人位居つた、それから八十人七十八人五十人三十人と云ふやうに十人十五人は寧ろ例外で大抵それ以上の人間が一戸に屬して居る。親兄弟伯父伯母從兄弟同志再從兄弟同志皆一つの家に屬して居る。これが即ち日本で家族制度と普通云ふものである。さう云ふ制度は決して日本にばかりあつたのではない西洋の何處の國にもある。希臘の「フラトリー」Phratry 羅馬の「ゲニス」gens 獨逸の「ジツペ」Stappe 英吉利の「クラン」clan 此れ等は皆日本の氏、若くは氏が段々崩壊して代つて出て來た大家族に當るべきものである。

大家族の遺物

今日になつても日本にも此の大家族の遺蹟がまだある西洋にもある。日本で最も能く人の知つて居るのは飛騨の白川にある大家族である。これは私は先年自分みづから行つて見たので確かな

事を述べる事が出来るが、私の見た中否白川中の大家族の一番大いなるものは三十餘人の家族から成つて居る。家は合掌造りと云つて二階から一番上まで一本の木と木を以つて合掌的に組んだ屋根を拵へて大抵五階若しくは六階になつて居る、唯だ一階だけは地から柱を建て、居るが二階から上はズツと合掌的の屋根に、一列の柱であつて、其の間の仕切を竹で打つてあるから下から五六階の上までズツと見通せる、中々大きな家でそこに一家の者が皆住んで居る。さうして戸主の外は嫁を持たない、他の者は唯だ家族として同居して居つて妻帯は全然しない。併し一家の内には男もあれば女もある其の女はやはり子供を生む。女は他に嫁に行かず男は戸主の外は他から嫁を取らないけれども人間であるから子供を生む其の子供は皆私生兒である。つい此の頃までは戸主の私生兒として戸籍に載つて居つたが、此の頃は認知して庶子になつて居る者もあり様々であるが未だ私生兒が澤山居る。一戸内には伯父も居れば叔母も居り従兄弟も居り従兄弟違ひも又従兄弟違ひも居る、それが皆合體して一つの家を作つて居る。家族制度が若し美風であるならば此の飛驒の白川の如きは、日本中で最も美風を存して居る所と云ふべき筈である。

西洋にもあり

ところがこれは決して日本にあるばかりではない西洋にもある。此の度の歐羅巴大戦争の抑々發端となつた塞爾維の農民間には此の種類の大家族が中々多くある。此の度の戦争の爲めに大分崩れたであらうと思ふが全滅はして居まい。その他佛蘭西、西獨逸にもあれば露西亞には無論ある伊太利にもアルプス山間地方にはある。全然無いのは亞米利加である、これは出來星の國であつて、皆新しい人から成つて居る國であるからさう云ふ昔の遺物は無い。英吉利には割合に無いが蘇格蘭には現に「克蘭」と云ふものがあり、愛蘭には「タニストリー」の制度があつて其の戸のことを「セプト」と云つて居る。家族制度が日本の特色だなどと云ふのは、井の中の蛙大海を知らずどころではない斐の蛙の蛙井戸の水さへも知らないものである。そんなことで日本の國體の美を誇るなどは實にをかした話である。國體の美ではない家族制度は非常に弊害の本である。日本にまだ家族制度があるからこそ色々な弊害が起る殊に戸主と云ふ變なものを認めて居る爲めにどの位文明の發達を害し、文明的行政の妨礙になつて居るか知れないと私は信じて居る。

個人の發達後、處國家、社會の發達亦後

日本では個人と云ふ考へも發達して居らぬ。我々が今社會政策のことを考へるに就て最も念頭に置かねばならぬは、個人の發達して居ないことは個人其のものゝ發達して居ないことのみでなく國家が發達して居ないを意味することは是れである。國家が發達して居ないばかりではなく社會も發達して居ないのである。國家の發達は社會の發達と伴ふものである。國家と社會とは同一種のものではないが同一の地盤の上に立つものである。國家發達すれば社會發達し社會發達すれば國家も發達する、國家社會發達すれば個人も發達する、個人發達すれば國家社會も發達する、此の兩者は互に原因となり結果となつて行くものである、一方だけ發達することは出来ない。個人思想の勃興を抑へて置いて國家の富強を望むことは逆も出来ないことである。

露西亞と支那

今日現在世界の厄介になつて居る國は幾つもあるが、最も厄介な國と云ふ可きは露西亞と支那である。露西亞は革命をしたから厄介なのでなく革命しない前の露西亞の方が尙ほ厄介なのである。今日は饑飢の爲に苦しむとか産業が破壊してしまつた爲に苦しんで居るが、革命以前の露西亞は總の點に於て苦しんで居つて世界の禍の源であつた。支那も亦此の度の太平洋會議に於て

國際管理にしようぢやないかと云ふものゝあるのは、恰度道樂息子に家を委せて置いたけれども身上を無茶苦茶にしてしまつて逆も家が立行かぬと云ふので、親戚や身内の者が寄つてたかつて一切の權利を取上げて準禁治産にし、巾着を預かつて要るだけの小遣を當がはうちやないかと云ふような話である。若し日本がそんなことを言はれたなら我々日本國民は非常に憤慨するであらう、支那人も此の頃は餘程目覺めて來たから憤慨する者もあるが、大多數の人民はまだそれがどういふ工合になるか十分に諒解が出来ないから憤慨する迄にも行かない。人々は腹を立てることが出来ないやうな意氣地の無い者では世の中に生きて行く資格がない。國民として腹を立つ憤慨すると云ふ意氣地が支那には無い、これは支那の國家が發達して居らず支那の個人が發達して居ないからである。

背後の大なる力

十八世紀から十九世紀を経て今日に至つて、我々人類の文明が全體には今まで普通のやり方を繼續して行く内にどうしても普通のやり方では承知することが出來ず、我々の考への置き所を全然新たに建て替へなければならぬ非常な發見をなした。十八世紀から十九世紀にかけて色々

自然科學の發達に依つて大發見大發明もあり、蒸氣力を發見したとか續いて電氣の應用が始まるとか色々變つたことがあつたけれども、其れ等一切の大發見大發明は若し更により大なる發見によつて伴はれたのでなければ、其後に後援たるべき大發見があつたのでなければ今日のやうな人類文明の大變革は惹き起し得ない。否此れ等の大發見大發明も實は其の背後にモツと大なる人類の大發見大飛躍があつたからこそ起つたのである。ワットが蒸氣機關を發明したのは、彼がグラスゴウ大學の一室に、コツ／＼と唯だ機械を扱つて居る間に考へついたのであると云ふが左様ではない。ワットをして彼の大發明を爲さしめた其の根本の大いなる力は、社會全體の文明社會全體に流れて居る大きな暗流是れであつた。最近に至つては色々な科學上の發見發明があつたが、これには愈々以つて十八世紀の終十九世紀の終に於けるよりモツと強く大いなる背後の力の働いて居ることが分るのである。

社會の發見

其の大いなる力とは何かと云ふと我々人間が「社會」を發見したこと即ち是である。十八世紀以前に於ても社會はあつた又社會と云ふ事を幾らか考つた人も無いではなかつた。日本でも無

いことはない、殊に徳川時代の日本の優れた學者、國學者、漢學者の中には、社會と云ふ字は用ゐないけれどもさう云ふ事に考へつた人も若干はある。否モツと遇つて昔の支那の學者の中にはさう云ふことに考へつた人は餘程ある。今日の社會政策の眼を以つて見ると、恐らく此社會と云ふことに最も早く氣のついたものゝ一つは支那の儒教の思想である。乍併之れを今日のやうな形に於て的確に我々に教へたのは東洋ではない、東洋はそれ以來ズツと沈滞して一まつてそこまで行かない非常に發達が後れて居る。西洋に於て社會と云ふ考へが總の人にはないが時勢の先導たる人々の頭の中に起つて來た。其れが今日の社會運動や社會問題を惹き起すやうになつた根源である。

より狭い社會の概念

今日社會事業若くは社會政策、社會運動と云ふ時の「社會」とは個人に對し國家に對する社會の全般に關することを謂ふのではない。日本では未だ大分無茶苦茶に此等の言葉を使つて居つて何か公けの問題、公共の生活に關した問題が起ると其れは社會問題である、左様なことは由々しき社會問題であると云ふやうなことを随分新聞や雜誌に書くけれども、これは言葉の使ひ方を誤

つて居るものと云はねばならぬ。今日謂ふところの社會運動或は社會問題又は社會政策の其の「社會」とは、社會に關する事の一切をゴタクと包含するのではない、其の中の或る特に限つたものを意味するものである、社會に起る凡ての運動は必ずしも社會運動たるわけではない。其れと同様に政府に於て社會事業をやる、其の爲めに特に社會局若くは社會課と云ふやうなものを置くと云ふのも社會に關することの總てを取扱ふのではない。社會に關する總てを取扱ふのならば政府の仕事は悉く皆是れ社會に關係あるものであるから、政府の事業は皆社會局に入らなければならぬ、社會課が地方行政の一切を占めてしまはなければならぬ、さう云ふ意味では決してない。今日の世の中に起る多くの問題就れか社會に多少の關係の無いものはない、否すべて皆社會に起つて来る。個人問題でも社會に起つて来る。我々は社會の内に生きて居る、我々の間に起る問題は皆社會に起る所の問題である。

例を以て説く

恰かも汽車に乗つて行く人が多勢ある、女もあれば男もある子供もあれば老人もある、其料々なる人の間に起る問題は、其の人々が汽車に乗つて居る間に起る問題ならばこれは總て汽車中の

出來事である。汽車の中で赤ん坊が泣き出した、これは汽車中に於て赤ん坊が泣いたのである其の以外に於て赤ん坊が泣いて居るのではない。汽車の中で或人が腹を痛くして下痢を致したとすれば、それは汽車中に於て下痢をしたのであつて其外に於てしたのではない、汽車中の出來事である。乍併其れ等は汽車其ものに就ての出來事ではない、其れが汽車全體の安寧に關し汽車の進行に關係するやうになれば初めて汽車の問題となる。汽車の中に乘つて居る乗客一々の間に起つたことは列車の中の問題ではあるけれど、汽車其もの、問題ではないのである。

社會問題の發見

社會問題もさうである。總て皆社會の中に起るのであるけれども其の總てを社會問題と云ふのではない。其起る問題が社會其のもの、存在、社會其のもの、運行に關係するやうになつて初めて社會問題となるのである。所謂社會問題、社會事業などと云ふ時の社會は汎く謂ふ社會の中の特に限られた問題である。其社會的と云ふことは初めに申したやうに、個人的と云ふことに對し又國家的と云ふことに對するのが第一の意義である。社會内に起る出來事でも、個人的の出來事たるに止るもの、國家的出來事であるもの、社會的出來事であるものと、大體別けて此三つにな

る。社會事業と云ひ社會政策の主體とするところは個人的でもなく國家的でもなく、特に社會的であるものである。故に社會を發見したことが十八世紀から十九世紀を通じて今日に至る大發見であるとするならば、更に第二の發見として其の社會の内特に限定せられた狭い意味に於て云ふ「社會的」と云ふことを發見したことは、十九世紀の後半の第二の大發見と云はねばならぬのである。歐羅巴に於ても亦日本に於ても特に社會事業、社會的の施設と云ふことの際立つて感ぜらるゝのは極く近頃のことであつて、其れの見出されたのは先づ十九世紀の後半、モウ少し適切に云へば十九世紀の終り四分の一即ち千八百七十年代以後である。

第三の發見

而して更に第三の時期が此の度の大戰争によつて區劃せられた。此の度の大戰争によつて此の社會的と云ふことが特に肝要である。人類の共同生活の中で最も重要なるものであると云ふことが更に見出されるやうになつたのである。日本も進んだ程度に達したが故に此の第三の時期に於て、歐羅巴と歩調を同ふするやうになつて來たのである。乃ち政府が自ら率先して社會事業をやると云ひ社會局を設けると云ひ地方に於ても社會課を設けると云ひ、少くとも名前だけでも呼聲

だけでも社會と云ふことを看過することの出來ないやうになつて來たのである。

今日は未だ其途中

然し此の社會的と云ふことが國の憲法、行政の中心となるやうにならなければ本當の發達ではない、今はまだ其道行である進行中である。今日に於て國の憲法國の行政此の二つが社會的になつて來たのは、例へば露西亞の如き例へば獨逸の如き例へば英吉利の如き程度は色々あるけれども、世界大戰争の終結を告ぐると共に起つたのである。獨逸の新しい憲法の如きは一つの社會的憲法——其の社會的と云ふのは廣い意味の社會的でなくして、狭い意味の社會的の憲法 *Donstliche Verfassung* と云つても宜い位である。英吉利は憲法其のものは形式的の變化は無論しないけれども其の行政は著しく社會的になつて來た、これは戰争前から既に其の傾向を著しく示して居つたが戰争の後に際立つてさうなつて來た。其れを主として掌る官省を英吉利では *Ministry of Reconstruction* 改造省と云つて居るが實は社會事業省、社會省である。此れは決して政治家が空に考へ或は輿論に迎合する、若くは輿論の機先を制しようとするやうに云ふ爲にやつたのではない、實際の必要が此の如くならしめたのである。日本には其の必要が無いかと云ふと其の必要は大いにあ

る。其の必要があると云ふことは即ち日本が急速の進歩を爲したことを語るものである。乍併まだ實際上の施設に於ては非常に後れて居る。若し此の儘にして後れて居るならば時機を失してしまつて後から設けたものは前に設けたものゝ半分の効力もなさない。今日に於て日本は社會政策の意義の重大なることを到底度外視し能はざるものである。

第二章 人類生活共同化の行程

無限の進歩と有限の人力

人間は死滅しない爲めに必ず進まなければならぬ。其の爲めに無限に進むと云ふ傾向を與へられて居るものである。其の無限に進む傾向は、數と質との二つの上に在る。人間の數は妨げる力が無ければ、無限に殖える。これは獨り人間に限らない凡ての生物に共通の傾向である。生物はより善くなる爲めに、自然淘汰せられる爲には、生きて行き得る數より以上生きて行く見込の無いものも兎に角一度に生れる。生れたものゝ中で残るものは寧ろ少數である。此く數の上に於て

人間は限りなく殖える傾向を有つて居るが、更らに質の上に於ても、亦た人間は其生命を充實して行く爲めに、向上發展して行く爲に、逆も自分の力の及ばない無限の欲望を與へられて居るのである。物質的にも精神的にも限りなく進んで行かうとするものである。ところが此の無限に殖えようとする人間を養ふだけの物は無論ない。又た生きて行けるだけの人間が有つて居る精神上、物質上の要求、生命を充實して行かう向上發展して行かうと云ふ要求を充すだけの力も人間にはない。人間を取巻いて居る外界は甚だ不十分である。又た其の外界を以つて人間の用に充てようと云ふ、其の充てる工夫も限りがあつて、無限に人間の要求に應ずることは出来ないものである。

共同生活による其調和

然るに茲に人間は共同生活を形づくることに依つて其の共同生活に組織と云ふものが出る。其の組織の力によつて著しく無限と有限との調和をすることが出来る。外界の有限を著しく變へて無限にすることが出来、人間の精神上、物質上無限に進んで行かうと云ふ傾向に稍々應ずることの出来るやうになるものである。我々が此の事實に氣の附いたのは割合に新しいことである。

乍併事實其のものは昔からある。どんな幼稚な人類でも苟も共同生活を爲さない者は無い、全く孤立の人間は初から無い。唯だ人が集るのみでなく、集まつてそこに新しい力を生じそれに依つて人間の無限進歩の要求を充たしつゝあつたのである。其の共同生活は民族によつて程度に色々違ひがあるが、何處を見ても皆先づ國家と云ふ仕組に於て此の共同生活を作つて居る。國家は共同生活を容れる一つの器物である容器である。國家と云ふ器物の中に入つて人間の共同生活が營まれて行く。其器が無理に壓迫して共同生活を維持して居る場合もあるし、自然に成立つて居る場合もあるが、兎に角國家は共同生活を統一し、之に秩序を與へる最も有力なる機關であつたのである。

自然と文化

自然	外	内
文化	界	界

我々が其の生命を維持し國家の生命を進めて行く爲めに使ふものは、凡て我々以外にあるものと自分の内に在るものとに分けることが出来る、之を名けて外界・内界と云ふ。内界の力も増さなければいかぬ、外界の力も殖えなければいかぬ。内界と外界とを通じて之れを上圖のやうに横斷する

と上の方が自然下の方は色々な名前を附ける、此頃の流行の言葉では文化と云ふ、元は精神と云つた。兎に角一方は自然と云ふ事は疑ひない、一方は自然でないものとする。自然とは何を云ふか、其れ自からに意思のないものどれでも宜いもの、其一つ／＼に意味なく唯だ全體に意味があつて一つ／＼が全體の代表的なもの、それが自然である。之れに反し其一つ／＼に意味があるものそれを或は精神と名け此の頃は文化と名ける。其れ自からに意味のあるものは人の爲めにも使はれる人の道具にもなるが、又其れ自からの意思を有つて居る其れ自からの生命を有つて居る。どれでも此れでも宜い、全體の唯だ一つの見本に過ぎない自然は、一つ／＼に意味はない唯だ全體にのみ意味がある、従つて人の道具として使はれれば道具になり切つてしまふ道具であるばかりのものである。社會も國家も個人も、無限なる其の欲望を充たすが爲めには有らゆる物を取つて道具とし、有らゆる物を手段に使はなければならぬ。ところが其の手段の中に手段になつてしまつてそれでお終ひのものと、手段ではあるが同時に其れ自から自己の目的を有つて居るものと此の二つある。

自ら目的を有する手段

社會に起る問題の中の特に限られたる尊い意味を有つ社會的と云ふことは、此の使はれる手段の中で手段とはなるけれども其自からにも目的のあるもの、其自からの價値を有つて居るもの、其れ自からの自決の意思を有つて居るものに關する問題である。自然の問題でなく社會の問題である。其の自然の問題を支配する法則は自然法則であるが、其れ自からの目的を有つて居つて他の者の爲めに手段となるものに關する法則を、社會法則或は此の頃の言葉では文化法則と云ふのである。

不足の征服と其組織

各個々人なり若くは個人の團集が、外界のものを手段として取り入れて、自分の方へ取つて來て自分の意思を實現するやうにする事は即ち勞働である。勞働の結果即ち勞働されて目的がそこに實現せられたものは財である。凡ての物は人間の社會的なる若くは個人的なる生活實現の爲に使はれる時に財となる、凡ての物は皆勞働を通じて財貨になるものである。ところが此財貨を作り出すこと即ち勞働して目的が實現される様に方つて、人間の本來に存する解け難い矛盾が必ずいつでも働いて來る、其は即ち不足と云ふことである。人間の欲するところは無限であ

る、然るに自分の力、自分が從へ得る外界の力には限がある、隨つて不足する。「經濟」とは此不足に打克つ爲の一切の人間の工夫を名けて云ふのである。物が不足でなければ經濟と云ふ事は起らない。如何に不足に打克つべきかの工夫が即ち經濟となるのである。其不足に打克つ爲に、人間は古代極く文明の幼稚な時分から文明の程度の低い時代から一種の組織を作つた。何人かの人が合して唯の集合でなく一の有機體を作つた。其有機體の一番始めのものは何であるか、一番始めの社會の原始體は何であるか、其は即ち「家族」Familyである。今日は家族とは男と女が合體して其の間に生れる子供を併せたものを指して云つて居るが、昔の家族とはそればかりではない。前にも飛驒の白川の例をあげたが、モツと多數の人を包含して居る。今日は男女の婚姻、性的結合によつて家族が出来るのであるが、昔に於ては男女の性的結合は寧ろ家族あつてから後に始まる。其の時分の家族は何であるかと云ふと、血を共通に有する人々の何人かの集まりであつた。然し其の結合の中心をなすものはやはり男女の結合である。

體性上の不足の征服

これは獨り人間に限らない凡ての生物を通じて共通の現象であるけれども、人間の力の第一の

不足さうして一番先きに打克たれなければならぬ不足は男性女性の夫々の不足である。即ち男性はどうしても女性の力がなければ自分の生活を維持して行くことが難かしい。女性も亦た男性の力を頼りなければ其の生活を充實して行くことが難かしい。天然は完全な人間を作らないで片ひらづつを作つて置いた、其の兩ひらを合せて初めてそこに兎に角一つの個人生活が、其程度に於ては纏まり得るやうに出来て居る。昔は一人の男子に多數の女子がくつ附いて見たり一人の女子に多數の男子がくつ附いて見たりしたけれども、段々變つて今日は一人の男子に一人の女子がくつ附いてそれが普通の形になつて居る。例外變則は随分あるけれども原則はさうなつて居る。それが唯一の形式と云ふことは無いが、兎に角男女が合することが人間の一番始の團集の必然形式である。

社會主義の謬見

今日の社會主義或は共產主義を唱へる人の多數は此點に於て一の謬見に陥つて居る。彼れ等謂へらく、昔人間の幼稚な時代には男女の永久的結合即ち婚姻と云ふものは無かつた、雜婚或は亂婚 Promiscuity の状態であつた。人間も他の獸類と同じく男女の性的結合を雜婚的にして居つた。

其後餘程遅れて今日の家族制度が成立したのであると、斯う主張して居る。日本でも大分此の説を祖述する人が社會主義者は無論社會主義者以外にもある。これは社會學の説としても非常に間違つたもので一昔或は二昔前の説である。今日は實際の事實が少しも此説に裏書しないのである。

婚姻は普通の結合形式

極く幼稚な時代に在つても記録の無い我々の知識の及ばない時代は分らないが、我々の知識の及ぶ限り舊い時代に於ては人間は——一生變らないとは云へないかも知れぬがそんな事を云へば今日だつてさうである、随分離れて見たり又くつ附いて見たりして居る——。兎に角永続すると云ふ意思を以つて男女が——一人と一人ではないかも知れないが——結合することが社會の極く幼稚な時分からある。此れが人間の共同生活の一番原始の形式上の出立點である。此は男としての生活を充實する爲めにも女としての生活を充實する爲めにも兩方なければならぬ。それを或は宗教或は政治上の理由或は一種の間違つた哲學の説の爲めに、結婚するよりも獨身の方が遙に良いと云つて男女を別々にして置く。例外の人間はあるもので其は別問題であるが、一般の

人間に向つて別々の生活が良い、所謂禁欲生活が良いと云ふやうなことを説いた時代が随分ある。歐羅巴でも基督教會の所謂修道僧侶は悉く獨身であつた。これは非常に間違つたことで大變悪い結果を來たして居る。世界中に於て性に關する最も重大なる犯罪は獨身生活を無理に強制せられた耶蘇教の坊主の間に行はれた佛敎の坊主の間に行はれた。今日でもやはり大體さうである。殊に西洋の新聞を見て居れば分るが、加特力敎國に於て（新敎國にもあるけれども）非常に残忍な性的犯罪が行はれる。此れは人間の性を充實しないのみならず寧ろ之れに逆行するからである。

社會も國家も家族より起る

家族から社會が起つて來る、國家も亦振へてはやはり一つの家としてある、國の君を父とし臣民を子とする。君臣の如くにして而して父子の如しと云ふことが大變に尊いことと考へられて居るが、此は當然のことである。國家とは字で書いても「國の家」と書く、家と云ふものを土臺として居るのである。國家あつて家あり家あつて國家ありと云ふが、歴史的に云へば家あつて而して國家があるのである。家と云ふ男女の結合が現はれて一つの家族が出來ると其れが國家に近い。

國家に似寄つた形を取るものである。人類の共同生活はそれ以來色々變遷し色々な形態を取つたが、要するに足りない者同士が互に其長を以つて他の短を補ひ、長短互に相補ふ結合を作つたのである。今日も此點に變りはない。武に長けた者は文に長けた者と合體して其の長短を補ひ合ふ、資本家は金の力を以つて長とし労働者は其労働の力を以つて長として居る、此れが合體して互に長短を補ふ。長短相補ふと云ふことは少しも變らない。長と長とが寄れば却つて隔離してしまふ。男女の結合でもさうである。女性にして極めて男性的なる者はどうも永く尻が落着かない、反對に男性にして女性的の者はやはり始終落着かないか若くは始終坐倒せられて尻に敷かれて居なければならぬ、これは本當の共同生活ではない。剛き者は剛き儘に何處までも剛く其長を現はし、柔かき者は柔かき儘に何處までも其長を發揮して、初めて本當の共同生活になるのである。それが唯だ一人の男と一人の女との間の結合でなく、段々其範圍を擴張して所謂大家族となり、進んでは一村一町終に一國となつて、多數の人が色々其長を異にし、其の短を異にする者も續ぎ合せて互に補つて行くやうになつて來た。これが今日の社會であるのである。

社會結合の爲めの格段なる力

此の社會を此の如く非常に複雑な非常に舞臺の廣いものにするには、唯だ自然の結びつきに委せて置くことは出来ない。自然の結びつきに委せて置けば中々寄り合はない、どうしても此れに一つの格段なる力を加へて之れを結び付け組み合せなければならぬ。或は無理に組み合せることもある、或は自然に組み合せられることもある。組み合せられ得る様な途を拵へてやることもある、其れが即ち國家の爲すところである。であるから社會と云ふことに我々が氣の附く數百年若くは數千年前に既に國家と云ふことに氣が附いた。社會が無いのではない、ある無論ある、社會あるが爲に國家があるのだけれども、我々の眼に映するものは社會としてでなくして國家としてであつたのである。國家が其の仕事をしなければ何か之れに代つて國家の事をするものが起つて来る。日本には全く無いとは云へないが先づ無い。西洋では國家が其の仕事長く怠つて居つた歐羅巴の中世——暗黒時代と云ふのはそれである——に於ては國家に代つて此仕事をしたものはお寺であつた基督教會是れである。今日でも羅馬法王と云ふものは段々其勢力は衰へては來て居るが、兎に角一國の君主のやうな形を有つて居る。今日羅馬加特力教會が一つの侵され

ざる地位を有つて居るのは其爲めである。宗教の團體に力があるので何でもない。國家に代つて國家の事を行つただけのことである。恰度日本でも神佛混淆時代に神主の代りを坊さんがやつて居つたそれと同じ様な譯である。神主の代りを勤める坊さんが更に進んで國家の代りをやるやうになつて、耶穌教會が國家に代るやうになり坊さんが皆官吏であつた。それは日本に無いことであるが西洋ではさうである。随つて羅馬法王は外國へ公使を出す、今でも出したりやつたりして居る。日本へも近頃來た日本からも羅馬加特力教會の法王の所に常住の公使ではないが、初めて使節が行くやうになつた、即ち外交上の一つの對手と認るやうになつた。兎に羅馬教會は國家に代つて其仕事をした、必竟國家が無能にして何もしなかつたからである。日本にはそんなことはない日イでは國家がズツとやつて居つた。國家の當事者は色々變つた、幕府がやつたこともある、けれども幕府になつてもナンでも國家は國家である。日本では國家は少しも休んだことはない。獨り皇室が萬世一系であつたのみでない、日本では國家がズツと昔から——其當務者は變つて居るそれは何處の國も變る人間は無限に生きて居るものでないから。けれども其の國家はズツと續いて存在して居る。此の點に於ては日本だけが殆ど完全な——完全なと云ふのは形に就てである、實質は色々不都合なこともあつたけれども、形として完全な形を有つて來た

のである。

殆んど國家に盡く

兎に角さう云ふ變遷はあつて、必ずしも國家其もの斗ではないけれども、國家に代る何等かの具體的の形が出来て、それが社會を堅め社會を維持して來たのである。であるから凡の我々の團集生活、共同生活はツイ近い頃までは國家であつた。我々の考へは個人の事を離れれば即ち國家であるのみ、其の對立は唯だ個人對國家あつたのみで、個人對社會と云ふことは殆ど考へて居なかつた。我々のすることは國家的か或は個人的である。國家的の利害關係のないことは、個人的の利害關係である。國家の爲めに盡くすか個人の爲めに盡くすかであり、衝突するものも國家と個人とであると云ふ風に考へて居つた。實はさうではない國家に對するばかりでなく社會に對する對立もあつたけれども、それを皆國家に纏めて考へて居つたのである。然るに十九世紀になつてから國家の外に社會と云ふことの考へが起つて來たのである。是れが即ち私に社會の發見と名くる所の事である。

有限の生活と無限の生活

第三章 經濟生活と人格生活

共同生活を營む人間は其の欲望を達するには何れも個人として働き、總ての財は何人かの人の所有に歸着するのである。各個人は所有物を得るが爲めに働く其の働きは個人の働きである。ソコで個人の生活には經濟生活（財の生活）と人格生活の二方面が存する。人格の生活は前章に述べた如く無限なる生活無限に伸びて行かうとする生活である。人格は何處までも充實し發展して行かうとするものである。之れに反して經濟生活は人間の内界の力並に外界の物と力とに限りあるが爲めに制限せられた生活である。此く人間の生活は一方は有限の生活他方は無限の生活の二方面を有つて居るものである。各個人が自分の生活を營む爲めに得る物は、分量上にも制限があり品質の上にも亦た制限のあるものである。總ての物は皆同じ働きを爲すものでなく夫々特有の性質を帯びて居て其の性質以外のことを許さない。釜を以つて薪を割ることは出來ず杖を錐の代

りに使ふことは出来ぬ。釜には釜の用しかなく、杖には杖の用しかなく、刀には刀の用しかなく、其の本來の用以外のことは出来ないのである。従つて其の用其の物の有つ性質が人間が使用し得る可能性なり範圍なりを限つて居る。

物の所有と支配

人は生活を営む爲めに物を所有せねばならぬ。物を所有するは物を支配する所以である。家屋を有つて居る土地を有つて居る多少の動産を有つて居る、家具、家財、衣類、書物、裝飾物を有つて居る。此く物を有つは己れのみ之れを支配し他人をして之れを支配せしめざらしめることである。物は總て人の支配の下に立つて人の意思を承けついで、其の儘に左右せられて居る受動的のものである。他面に於て人は其の有つて居る物の爲めに制限される。自分が物を支配して居るのであるが其の支配して居る物の爲めに又た支配せられる。これは國に就いても亦た同じことであつて、國は人民を支配すると共に又た人民に依つて支配せられる。國家は人民全體の意向の向ふところを無視することは出来ぬ。國民の爲し得る事以外のことはどんな強力な國家と雖も強制することは出来ぬ。英吉利の國家は英吉利人が出來ることしか出來ず日本の國家は日本人の

出來ることしか出來ぬ。物質上の財は如何に人間の工夫が進んでも其の用に限りがある。其の限りが又た逆さに所有者たるところの人間を束縛し制限するのである。

質より來る制限、束縛

其の制限は、第一には質の上にある。所有する物の性質如何に依つて所有者は品質上の制限を受ける。我々は生活を営んで行くに方つては其れを以つて自分の所有する物が許すだけの事しか營むことは出来ぬ。土地を有つて居る者は土地を使ふことしか出来ぬ。其の土地が農耕地であれば農業しか營めない。山林であれば林業しか營めない。住宅地であれば住宅用にしか充てることが出来ぬ。文明の極く幼稚な時分から發達した今日に至るまで、程度に變りはあるが各人は有する物があれば——有つて居る物の無い人は別であるが——多少の財産を有つ人は其の財産の爲めに一生爲すべきことを豫め定められ人格を拘束せられる。地主の子に生れて親から土地と云ふ財産を承け繼いだ者は先づ以つて土地の管理、經營を一生の仕事とする。親から八百屋を繼続した者は先づ大抵は八百屋を以つて自分の營業とする。一體人は何でも出來る譯である、殊に今日の營業自由の世の中に於ては何をして差支ない譯であるが——無論多數の例外はあるが——

原則としては其の人の有する物の爲めに自分の一生爲すべき仕事を限定せられる。此の事を哲學上の言葉を用いて有が在を限定すと云ふ。人間は其の力を發揮すれば殆ど神にも肉薄し得る働きを爲す者であるが、大多数の人間に就いて云へば左様でなく生れ落つると同時に拘束せられて居るものである。其の拘束者の第一は其の人の所有物である。此れが今日になつては大いに解放せられて人間は所有物の束縛から著しく解き放たれて居るが、昔に於ては殆ど全く其れに束縛された。封建時代に於ては百姓は代々百姓武士は代々武士商人は代々商人になつて居つて、如何に天稟を有するものも其の天分を恣まゝにすることは出来ない。與へられた財産を以つて爲し得る限りしか出来なかつたものである。随つて人の人格の特性は所有物の特性によつて定められる。社會的分業と云ふも道理の上から割出した分業で無く、多くは先天的に人の生れ落つると共に定められた事が社會的分業になる。

二個の相反する見解

これに就いて社會學者、經濟學者の間に相反した二つの説がある。或る一派の學者は人には天賦の才能の違ひがある、生れて賢なる者あり愚なる者あり同じく賢と云ふ中にも其の賢さに

色々度もあれば種類も違ふ。此れが即ち人の所有する所有物の多寡、大小、種類を決めるのである。賢い者は多くの財産を有つやうになり其の財産を盛んに活用することが出来る。愚かな者は財産を得ることが出来なくなる。随つて社會上の分業に於て愚かな者は下の方の地位に着く賢い者は上の方の地位に就く、人の天分が本で其れから所有が定まると云ふ。之れに反對する者は云ふ、左様ではない所有の制度が社會に無い所に於ては左様であるかも知れないが、社會の極く幼稚な時分から所有の制度がチャンと確立して居る。人は生れると同時に既に何等かの——澤山の物か少い物か——物を有つて居る。其の有つ物の爲めに天分を發揮す可き方面を定められる。其の前提なく縦横自在に出来るだけ天分を伸ばすものは極く少数である。社會上の貧富の懸隔は人の才能の相違賢愚の違ひのみから起るのでなく、抑も人が社會に出る時に既にそこに多少の違ひがある。然るに多く持てる者は基督の言葉のやうに一持てる者は與へられて猶ほ餘りありで、有つて居る者は益々そこへ類を以つて集まつて来て富が殖える、一持たぬ者は其持てる物をも奪らるゝで無い者は益々益々無くなつてしまふ、此が社會分業の本であると云ふ。此く二つの説がある。孰れの説が正しいかと云へば大體に於ては後の説の方が正しい。尤も非常な天才者、例外者或は天才でないまでも多少群を抜く人は此の原則を打破るであらう。けれども大多数に

就いて云へば此原則は非常な力を以つて人の運命を決めるものである。語を換へて云へば人の所有物が初めから其人格の生けを支配する。此れが品質の上に於ける物の支配である。

量より來る制限と束縛

第二分量の上にも制限がある。同じ種類の物を有つ人でも其の有つ物が千圓二千圓であるか、或は一萬圓二萬圓に當るか百萬圓二百萬圓に當るか千萬圓二千萬圓に當るかに依つて大變に違ふ。其の違ひは唯だ分量上で違ふだけ數的に違ふだけでなく、分量の違ひは累進的、累加的に其働きを強くする。或る人の有つ財産の多い寡いは唯だ他の人と比べて甲は乙の十倍の財産を有つと云ふだけに止まらない、十倍であることは其の人の人格の伸張の上に於て大變違つた働きを爲すのである。概して云へば所有財の多いのは人格の束縛を非常に緩くする。所有財の少いのは其の拘束縛りさ加減を愈々緊張して人を動かさせないやうにするものである。辛うじて一つの商賣を經營して行ける位の財産しか無い者は、他の業に變へようと思つても容易に變へる譯に行かない。其反對に澤山財産を有つ者は一の事業を營みつゝ尙ほ他の事を色々考へて財産の或る部分を割いて他の新しい事業を試みる、其れが成功すれば段々元の事業から自分の財産を回收して新し

い事業へ注いで、終には全く違つた仕事をする人にも成り得る。僅かな財産しか無い者は其の餘裕が無い始終生活に逐はれるから、與へられた財産の定めた約束の通り守つて行かなければならぬ。此れにもやはり例外はあつて非常な天才抜群の力ある者は其れを破り、僅かな所有物しか無くても之れを自由に轉化することもある。乍去大體に就いて云へば量の少いのは其拘束を緊縮せしめる。量の多いことは其の拘束を遙かに緩くする。此の二つの違ひが經濟生活と人格生活を結びつける連鎖、兩者を架け渡す橋になる。然し如何に財産の種類が自由に應用出来るものであり、財産の分量が多く活動の餘地が大いにあるとも、やはり人の有つて居る財産が其人格を制約し之れに影響し支配することには變りはない。

職業の分立による不具化

斯く制約せられると自分の有つ財産によつて定められた一定の職業に向つて、各人は段々適當するやうになる。或は教育に依り或は傳統に依り或は唯だ習慣に依つて、八百屋の子に生れた者はいつの間にか八百屋の商賣を覺えてしまふ。門前の小僧習はぬ經を讀んでしまふ。或る事に特に適することを營むことは其の業に於ては人をして天分を發揮せしむることゝなると同時に、他

方に於て其の以外のことに向つては其の人を不具にすることもある。例へば實業教育を授けて或る種類の實業にノを仕込んでしまふと、其業には適應するやうになるが其の代り他の業は少しも出来なくなつてしまふ。商業學校で算盤と簿記とばかり教へて居ると算盤と簿記には長けるが、其の代り文學者にならう音楽家にならうとすると其れが爲めに妨げられる。焉ぞ知らん其の人の天分は音楽家になるに適して居るかも知れない。然るに其の人の生れ落ちると共に定められた運命が、其の人を實業家たらしむべく決めた上に、更らに幾多の修練を経て行くから天分に反したことをしなければならぬ。反しつゝもどうやらこうやら之れを以つて一生の業とするやうになるが、其の代りに他の業には不適當となる。社會的分業は凡ての人を或る意味に於て或る程度までは皆不具にしてしまふものである。人をして或る一つの事には長けしめるが他の事には何も知らない時分よりは却つて移りにくくしてしまふ。人の力が極めて限があるのみならず其の有つ財産、其れから定められた一定の職業の爲めに其の職業では力は發揮出来るが、其の職業以外のことに就いては殆ど無能になつてしまふから、彼れの活動範圍は更に限られた有限なものとなる。封建時代に於ては出来るだけさう云ふやうにした、成だけ人をして其職業以外の事を考へさせない、親代々傳はつて居る業に安んじて他の事に心向けさせないやうにして居た。今日の

社會はさうでなく天分のある者は親の爲した事と全然違つた事、其の人の有つ財産が到底許さないことも出来るやうにしよう／＼として居る。即ち所有の束縛を破る力は太變強くなつて居るけれども、破る力よりも固定する力の方が未だ遙に強いのである。

人格の格付と其解放

人の共同生活に於ける地位は此く職業によつて定まる。或る職業は社會に於てどれだけの高さを有ちどれだけの地位に在るかは定まつて居る。其の職業の地位が同時に其の人の其の人格の地位となる。人格は各人皆對等である。人格に甲乙の差異はない、才能には違ひがあるが人格たることは如何なる貧乏人の子も、如何に尊い所に生れた子も完全なる一つの人格であつて、其間甲乙の差異はない譯であるにも拘らず、人の社會に出て來る時に其の人格に夫々格付けが出来て居る。斯く格付けられては居るが人格其のものゝ本質として其れに甘んずるものでない。機會あれば出來得るならば其の拘束を破つて社會上固定せられた地位を脱して、其れより上に進みたい。一段々々と上に行きたいとして居るものである。それではなければ人格でない。此れは必ずしも名譽心が強い野心が強いからではない、苟も人格たる以上——缺陷のある人格なら別問題である精

神祕的異狀があれば致方もないが、缺陷の無い完全人格であり一人の人間である以上、何處までも仲びて行かうとする無限發展の要求を有つて居る。かくて人は矛盾に陥る。自分に定められた職業其の職業の有つ地位は固定して居るが、自分の人格は何處までも進んで行きたい。「王侯將相豈種あらんや」人に出来ることなら自分にも出来ること云ふ考へは、強弱の程度はあるが各人に皆ある、なければ人間でない物格に墮したものである。

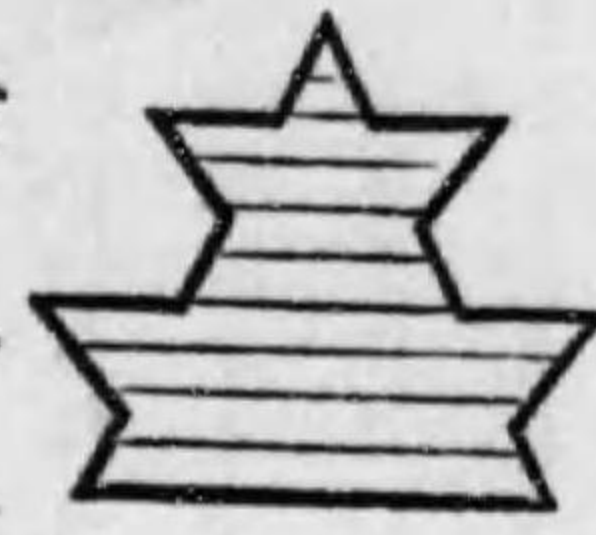
耐へ難き矛盾

無限に進まうと云ふ傾向を有ちながら實際の生活は限られた定められた地位に在つて、物を所有する人一つの職業を營む人は其の所有物其の職業の主人である謂であるが、實際の共同生活の上に於ては却つて其れが使はれ人になると云ふことは耐へ難き矛盾である。土地を有つ者は土地の爲めに縛られて却つて自分の支配の下に立つ土地の従僕となる。よく下世話に云ふ「金の番人」で金持は金の番人になつてしまふ。金を有つて居るが爲めに何でも金々と云つて金を無くさないやうに、唯だ金を研やすやうに殖やすやうにして少しも高尚な人格の要求に觸れることなく、金を殖やすことのみで一生を費して金の従僕になつてしまふ。金に就ては最もよく分るが

職業も亦た同様であつて人は多く職業の従僕になつてしまふ。職業に忠實で之れに献身的に全力を傾注することは是非しなければならぬことであるけれども、耐身的に努力すると云ふは決して従僕になることではない。臣下が君に仕へるには決して臣下の人格を没却してしまつては本當に君に仕へられるものではない。臣下は何處までも臣下としての人格を以つて君に仕へて初めて本當の忠臣である。妻が夫に事へるのでも妻の人格を没却して夫の奴隸になつてしまつては本當に妻として夫に事へるのではない奴隸として仕へるのである。妻は妻として何處までも獨立人格夫に對抗した人格を有つて夫に事へてこそ初めて本當の妻である。子の親に對する僕的主人に對する目上の者が目上の者に對するも亦た然りである。然るに物質生活、財の生活に於ては我々は殆ど例外なく皆主人でなく従僕となるものである。

社會に於ける上下關係と其破壞

此の從位の關係は決して孤立した從屬の關係でない。人格生活も經濟生活も社會の共同生活の中に營まれる。社會の中に於ては各人が夫々從僕となつて共有する地位が人と人個人と個人との間の上下の關係となつて、財産の少い者は財産の澤山ある人に對して下位に立つ。位の下ばか



りでなく人格の上に其れだけの拘束を被むることになる。一つの國一つの社會を形づく個人は平列に竝んで居るのでなく上下的に組み合せられて居る。下から上に一段々と積み上げられて上圖の様に幾つかの階段を有するピラミッドの形を作つて居る。トコロが下の者が非常な勢ひを以つて突進して急に上に出ようとすれば、社會の動亂を惹き起し社會の平和を破ることになる。上の者が從來有つて居る特權を更に擴大して下の者に對する壓迫を更に強くすると此れ亦た社會の動亂を惹き起す。社會の動亂は多くは下から来る。下の者が上に出ようとする其の出るのが徐々でなく急なる爲めにチャンと定まつて居るピラミッドが崩れる。急に途中の或る部分が腐れ出して左圖の様となげ／＼が出来此れが社會の動亂となる。國家の存在は社會の動亂の爲めに脅かされるものであるから、國家は力を盡して此の如き動亂の起らないやうに起らないやうにする。其の起らない爲めには或は壓迫も已むなくやることがある。兎に角さう云ふ可能の無いやうにすることが國家存在の最も重大なる仕事の一つである。

絶えざる内在的變遷

斯く出来上つて居るピラミッドはいつも不動的に變らないで、永久にさう云ふピラミッドを成して居るか云ふとさうではない、其中に於て絶えず運動が行はれる。突進的の運動は必常にあるとは限らない時あつてか爆發するだけであるが、内部に於ける小なる運動は始終行はれて居る。上下の區別は定まつて居るが少しづつ上の者が下になつたり下の者が上になつたり、或は横に押出して見たり内の方に押込んで行つて見たり始終運動が行はれて居る。此の運動は即ち社會の生命を持續し進めて行く運動である。チャンと定まつた儘で少しも運動が無ければ其の社會は死んでしまふ。日本の徳川時代の如き大體に於て極く不變不動を主義として、何事も社會に新しいことの起らないやうに起らないやうにして居つた。けれども其の徳川時代にも斷へず進歩はあつた。進歩があつたからこそ今日我々が西洋の文明を呼び入れても急にまごつくことなしに待つて居たと云はないばかりに之れを受け入れて、右から左へ着々之れを利用して行くことが出来るのである。唯だ急激な變化がなかつただけで運動は絶えずあつた。内部の運動の無い社會は死んでしまふ外はない。

運動の最も著しきは經濟生活

其の運動は何處に一番著しく現はれるかと云ふと經濟生活の上である。人は職業を營む爲めに物を有ち其の有つ物の爲めに縛られて居るが、物を有つのは國民の總てではない。社會に段々人數が殖えて來、社會が段々大きくなつて來ると、何も物を有たないで生活して行く人の數が段々殖える。さう云ふ人は唯だ自分の働き、勞働によつて生活する。勞働によつて生活する者は物を有つて居るのではないから、其の有つ物の爲めに制限せられ束縛を被むることは無い。従つて甚だ自由であるやうに考へられるが實はさうでない。我々の生活を維持して行くには必ず物的材料がなければならぬ。勞働を營むには勞働を施す對象、物體がなければならぬ。百姓をする者には土地がなければならぬ。工業家は工業用の材料なり道具なり器具なりを持たねばならぬ。商人が商業を營むには商ふ品物がなければならぬ。自分が其等の物を有つて居る場合には其の有つ物に就いて百姓をし、工業を營み商賣をするが、其の物を有つて居なければ之れを有つて居る人からどうとかして融通して貰はなければならぬ。

經濟生活特有の人格的束縛

茲に於て更に第二種類の束縛が行はれる。其は他ではない勞働力しか有つて居らず財産を有た

ない者は自分の要する材料、原料、器具、機械の類を有する財産所有者の支配の下に立たなければならぬ。是れである。物を有つものは其の有つ物の種類數量に束縛せられる。物を有たぬ者は物から束縛を被むるばかりでなく、其の物の所有者たる自分と全く互格なる他の人格の下に立ち其束縛を被むるのである。今までは人間と財との出の從屬關係であつたが今度は人間と財との從屬關係に加ふるに、人間と人間、人格と人格との間に於ける從屬關係が加はつて來るのである。土地を有たない者が百姓をしようとするれば、地主から土地を借りて小作人にならなければならぬ。小作人は唯だ土地を借りて之れに對して小作料を拂へばそれで宜いと云ふものでなく、地主に對しては社會上に於て一等下な地位に立つものである。貸借の關係はかりでなく色々な關係が之れに附いて來る。其の關係たる決して平等對等でなく上下の關係、服從の關係である。

人格の支配者起る

其の反對に物を有つ人は澤山有つ人は無論であるが、少し有つ人でも其の有つ物を他人に勞働の機會を與へる爲めに貸し與へる人は、其の貸し與へることによつて借り主たる人格を支配する

やうになる。彼は物を支配するのみならず他の人格をも支配する。其れと同時に所有者が支配して居る物によつて縛られる如く、自分の支配する人格によつて自分が縛られることになる。主人は僕を使ふに方つて決して使ひ放しでは済まない。自分の使つて居る僕の人柄の如何によつて其の人格もやはり束縛せられる。大變忠實に働く者ならば安心して委せられるが、動々もすると横着しさうな者は絶えず注意して居なければならぬ。主人は人の取締り奉公人の取締りに非常に頭を悩まさなければならぬ。其れが爲めに他の仕事を打捨て、始終それに掛からなければならぬ。恰も所有物は自分が支配する物であるに拘らず自分が其れによつて支配せられる如く、他の人格を支配する人も其の支配して居る人格によつて反對に自分も支配せられることになる。此れが極く顯著に發達したのが封建制度である。殿様は土地を支配し人民を支配し自分の幕下に澤山の家來を有ち其れを支配して居るのであるけれども、やはり家來によつて始終縛られて居る一刻も之れを忘れることが出来ない。之れを忘れて其の支配から通れれば其の被支配者は彼から離れてしまふ、彼等は謀叛を起して離反して行つてしまふ。始終之れを自分の權力の下に置かうとするに自分も亦た其の支配を受ける覺悟がなければならぬ。

斯く互に支配し合ふとは云ふけれども、其の支配の度は物を有たぬ者が有つ者に支配せられる

方が強いのである。即ち社會が段々發達し經濟生活が進んで來るに従ひて、社會の中他の人格を支配する物の所有者——必ずしも金持とは限らない。金持は其の代表的の者であるが大して金持と云はれる程の者でなくとも、多少の物持ち——は其の有つて居る物を通じて人を支配し、社會の大多數の者は何も物を有つて居ないから物持ちの爲めに支配せられる。即ち社會は大體に於て支配する者と支配せられる者とで出來上ることになる。

支配階級と被支配階級

そこで自から二つの階段が出來て來る。社會に於て主として支配する階級、自分も支配を受けが其れよりも支配する方が遙かに強い階級之れを先づ支配階級と云ふ。其反對に支配せられ通し階級を被支配階級と云ふ。封建時代に於ても支配する者と支配せられる者との間の利害の違ひは無論あつた。けれども未だはつきり意識せられ社會を根本的に動かす力にならなかつたが、資本主義の今日の社會に移るに従つて其が段々著しくなつて來て、社會内に殆ど二つの別の社會があるが如く各々違つた極端をなして、支配する階級がこちらの端にあれば支配せられる階級はこちらの端にある、其の間に中間者として色々なものがある。それが平面的でなく支配する階

級が上に行つて支配せられる階級が下に来て中間者は間に挟まれて居る。中間者が無くなつてしまへば支配する階級と支配せられる階級とが直ちに當面に對峙するやうになる。尤もさう云ふ國はまだ何處にもない。中間者が全然なく支配階級、被支配階級のみが直接ぶつかつて居ると云ふやうな極端な社會は無いが、國によつて中間者が大變多く兩者の間に廣く跨がつて居る社會もあれば、兩者の間の隔たりが段々稀薄になつて來る社會もある。

流通經濟と支配の増進

支配被支配の關係は流通經濟の進歩と共に増進する。流通經濟に於ては物はすべて誰人かの所有中にあり、新たに作られたものも亦必ず誰人かの所有に歸する。人間の働いた結果は直ちに人間の用に充てられないで一先づ誰人かの所有物になつて、然る後に人間の用に充てられる是れが流通經濟の常態である。然るに明治維新以前の日本の農家の大多數は自足經濟を營んで居た。即ち自分のところで作つた物は全體自分のところで使つてしまふ。田で出來た米畑で出來た麥稗を食べる、家内で織つた布子を着て居る。餘所へ賣出す物も殆どなければ餘所から買ふ物も殆どない、作られた物は直ちに人の需用に充てられる。無論それは其百姓の所有物である。けれど

も、所有物とは他に對抗して他の人をして其れを使はしめない時に於て初めて十分の意味を成すのである。自分の所で作つた物を自分が直に使つてしまふ、今朝畑で取つた物を今日直ぐ食べてしまふのは、所有物と云ふ明白に限られた階段を経過しないのである。だから自足經濟が行はれて居る社會に於ては、物が作られて其れが用ゐられる間に一度必ず所有物になるとは云へない。所有物になる物は寧ろ例外的の物である。作られてから使はれるまでの間が特に永い間を経過する物だけが所有物として社會の表に活躍する。金持とか地所を澤山有つて居る大地主とか或は殿様とか大きな商人とかの所に出來た物は、迎も一軒の家で直ぐに使ひ切れないから之れを所有物として社會に存續して置く。封建時代にもさう云ふものは随分あつた。殊に各藩に於て百姓から取上げる米は之れを商ひの品物として日本で云へば大阪で賣出したのである。それは確に所有物になり商品となつて賣買せられた、然し日本の米の大多數に就て云へば作られた所で直ぐ使はれて所有物にはならなかつたのである。ところが今日はさうでない、今日は自足經濟は殆ど廢れてしまつて、片田舎の百姓と雖も皆所謂流通經濟に入つて居る、流通經濟の意味は物が出來てから使はれる迄の間に流通するグル／＼人の手を廻ることは是である。人の手を廻つて居る間が即ち或る人の有であるそれが所有物、財産である、之れを商賣の上から云へば一つの商品であ

る。今日の經濟生活の特徴は商品生産と云ふことにある。直ぐ人の用に充てることより寧ろ商ひの品として賣出すのに、何れが一番利益があるか何れが一番販路が廣いかお客様が多いか、どんな品物を作つたら商品として一番利益があるかを自當として物を作る。昔の自足經濟時代のやうに自分の使用を考へ自分が食べるに云ふ目的で作るのでは無い。自分が欲しい物を作るのと全然反對で作る人は自分がそれを使ふことは殆ど考へに無い。自分は却つて餘所から物を買ふ、自分の所で作つた物は全部を擧げて之れを世間に出して賣つてしまふと云ふのが今日の流通經濟生活の特徴である。さうなると自分の作つた物は一度は皆誰人かの所有物になるから、其の所有物の主人即ち所有主の支配を——短い間か或は永い間か時期には長短はあるが兎に角或る時期の間——必ず被むらなければならぬことになるのである。物を作る人、勞動する人は取換引換であるか或は引續いてであるか、兎に角他の人格の支配の下に立たなければ勞動が出来ない。それが嫌やだとならば何もしないで居る外ない、自分の勞動を用ゐるところが無いことになつてしまふのである。

所有の種類と支配の種類

所有には土地の所有貨幣の所有企業の所有の三種類がある。土地の所有は之を不動産 Landed Property 或は Immovable Property と云ふ。貨幣の所有は之を動産 Movable Property 或は Movable Property と云ふ。企業の所有は言葉が甚だ不適當であるが、今日一般に資本 Capital と云ひ、企業を所有する者を資本家若しくは資本主と云つて居る。此の種類の違ふによつて人を支配する加減も亦た違ふのである。土地の所有者即ち地主の支配とは地主對小作の關係である。近來日本では岐阜縣を始め各地に非常に小作の騷動が起つて、小作人が従來の地主の壓迫に甘んじないでドシ／＼小作料をまけて呉れと値切運動を始める。地主の方でそれに應じないと小作料を返してしまふ。さうして他から其の土地を借りに来る者でもあると邪魔をして借りさせないやうにする。地主は耕作地を返されてしまつた、自分が其土地を耕せば宜いけれどもそれだけの人が居ない。そこで作男を雇はうとすると小作組合で妨害して耕作をさせないやうにする、つまり土地の持ち腐れになつてしまふ。土地の持ち腐れになるよりは値切られても仕方がない、少しなりとも小作料が取れる方が宜いと云ふので地主の方が泣き寝入になつて居る所が随分ある。岐阜縣の如きは中猛烈な勢ひである。それ以來各縣に於て洵に燎原の火の如くと云つても宜い位非常に急速の勢ひを以つて、最近二三年間地主に對する小作人の反抗が熾んになつて來た。此れは土地所有の支

配關係の根柢が動搖し始めたことを示めすものである。此れは日本の將來に取つて最も重大な社會問題である國の基礎に關する大きな問題である。此の頃労働問題が大いに人の耳目を惹いて居るが、日本で云へば資本主對労働者の労働問題よりも地主對小作人の小作問題の方が遙かに重大な問題である。他の國に例を見ない位に、地主が一つの階級、之れに對抗した小作人が他の一つの階級であると言ふ對抗が段々顯著になつて來た實に重大な問題である。第二は金を有つて居つて他人に此の金を貸し付ける。或は單に貸金として貸し付けるものもあらうし、或は事業に資本を投下する形に於て貸し付けるものもあらう。兎に角金を貸して此れから利息を取る金貸と其金を借りる金借との關係である。金貸と金借の關係は、地主と地借との關係よりは餘程稀薄であつて人格の束縛は餘程薄い。ところが第三の企業（企業）の所有になると其の關係が更らに甚だ濃くなつて來る。資本を有つて居る者資本主は企業を有つて居る、工場を設備しそこに機械を据え付け材料も皆自分が調べて、さうして労働者を一日幾らと云ふ時間給賃銀なり一仕事幾らと云ふ出來高賃銀を以つて雇ひ入れて仕事をさせる。約束した賃銀を拂つて出來上つた物は悉く皆自分の所有に歸してしまふ。此の企業の所有者と、其所有者に雇はれる雇はれ労働者（雇傭労働者）とは大いに利害關係を異にして、人格の束縛壓迫を著しく感じて争つて居るのが現今世界の趨勢であり日

本にも此の頃は大分増加して來た。労働争議とは即ち此謂である。唯だ一時の争ひも大分あるであらう人に雷同したのも大分あるらしいが、又どうしても今までの通りには置けなくて實際争はなければならぬことも確かにある。此く種類の違ふによつて人格の束縛壓迫の種類も違ふが、どれを通して兎に角一つの人格が他の人格の下に立つことになると言ふのが今日の經濟生活の實狀である。

三者を兼ねるもの

此の三種の種類を兼ねて土地も有れば貨幣資本も有ち企業も有つて居ると云ふ場合には、三種類の人格が悉く其の下に従屬するから其の人格支配は莫大なものになる。今日の所謂資本家は單に企業の所有者であるのみでなく土地の所有も同時に兼ねて居るか、土地の所有は兼ねて居ないとしても貨幣の所有は大抵兼ねて居る。即ち貨幣の形に於て或は何時でも貨幣に換へらるべき資本の形に於て財産を有つて居るのでなければ、企業を經營して行く事が出來ない。事業經營の資金がなければならぬ、金持であると同時に企業者即ち人の雇ひ主であり、資本主であると同時に雇傭主即ち主人であると云ふ二つの資格を具へて居るものである。此れが今日の労働問題を有

らゆる社會問題の中に、一番重大なるものであるかの如くに見せしむる所以である。必ずしも重大でない場合でも重大であるかのやうに見せしむるのである。

以上を要言すれば

以上説く所を一言に約して云へば、我々は人格生活、經濟生活の二方面を有する者であつて、人格生活は無限に伸張せんとするものであるのに、經濟生活には幾多の制限があり其の制限は總て人格の支配關係を産み出す、殊に今日の流通經濟生活に於ては其支配關係が甚だ有力にして廣汎なものとなり、就中三種の所有又は二種の所有を併有する企業者が、雇傭労働者に對する支配關係は極めて廣汎且つ有力にして又た濃厚なものである。従つて其れが爲めに被むる人格生活の制限、人格の支配的壓力は甚だ大なるものである。經濟生活と人格生活との衝突は此の企業資本對雇傭労働の關係に於て最高頂に達して居ると云ふことは是れである。

第四章 共同生活による人格の解放と制限

共同生活の作り出す新人格

我々は其人格生活も經濟生活も共に之れを共同生活の中に於て營むものである。其れと共に我々の生活を維持する行動は共同生活の中に於ける個人的行動である。而して此く我々の生活を共同化するによつて個人以外に更に一つの人格を作り出されるのである。小さな個人人格の上に大きな多數のものを包含する人格が新たに生じて、個々の人格は大きな人格の中に入り大きな人格の働きを受けるに依つて、個人の人格生活と矛盾する經濟生活との交渉を圓滿にしつゝ行くものである。人格は意思を有つて居つて其の意思を發現する爲めに行爲を營むものである。行爲とは一つ／＼事に就いて云ふ時のことで之れを連続したものは行動である。人格の本質は自決的たること換言すれば他から支配を受けないことは是れである。他から支配を受ければ其れだけ人格が制限せられて完全な人格の發動でなくなつてしまふ。完全に自決的であり完全に自からを支配

するものであつて初めて之れを人格と云ふ。故に人格が意思するとは自決することの謂である。自決するに就いて個々の事に對して考へを起すことが意思である。其意思は之を行爲の上に現はすので、自決の意思から出た行爲は是れ亦た自決の行爲である。其行爲の連続したものは即ち自決の行動である。

孤立生活の自決と束縛

共同生活を營まず孤立して居る個人は其の人格生活に於ては總て自決的なることを得るのである。誰人も他人の掣肘を受けることなく自分で一切を決定し得る。其れと共に其の自決は經濟生活の爲めに限られる。ロビンソン・クルソーが絶海の孤島に居つた時には自分一人で何をしても構はぬ、彼の上には主人もなければ資本家も何もない。極めて自決的に完全に人格が發動し得るかの如くであるけれども實は決して左様でない。ロビンソン・クルソーの生活は有つて居るものが極めて不足である、道具も足りない何の設備もないが爲めに外界の自然から非常な制約を受けて居て思ふことが中々成らない。非常に苦心慘膽して辛うじて自分一身の生命を支へて行つた。然し段々其の工夫が積んで來ると制限せられた外界を稍々自由に自分の意思に従はせ

ることが出来るやうになり、幾らか餘裕が出来て來た。即ち其れだけ經濟生活の制限を免れたのである。

共同生活による經濟生活からの解放と束縛

我々は共同生活を營むによつて第一に此の經濟生活から來る制限を免れるのである。人は孤立して居れば經濟生活より來る壓迫を受けなければならぬが、社會を作るによつて其の力が非常に殖える各人の働き振りは非常に能率を増す、其れに依つて自然の物は不足であり我々の力は足りなくとも、其の足りない力を與へられた條件に於ては最高の能率にまで引上げることが出来る、幾分なりとも經濟生活の束縛から脱れるに至るのである。其の代り共同生活を營むによつて人格が人格と相接觸するから人格同志が各々制約する。乃ち經濟生活から來る壓迫は著しく免れ得ると同時に、他方に於ては他の人格の爲めに大いに制限せられることになる。労働者が山の中で自分一人で労働して居れば資本主も居ず雇主も居ないから、労働問題も何も起らずストライキなどと騒ぐことはない。其の代り彼れは極めて乏しい生活しか營むことは出来ない。然るに一度彼が都會の地へ出て來て工場に雇はれ資本主の下に雇傭労働者となるとなれば、彼は外界の財

の生活から来る束縛は大いに免かれて、完全なる機械を用ひ十分に供給せられる材料を以つて仕事に従事することが出来る。其の代り彼れの上には工場長あり技師長あり社長あり色々な人格が自分の上に折り重なつて居つて、其れに抑へられ其の命の下に働かなければならない。社会問題が起り労働問題が起るのは此れからである。

新なる矛盾

此の如く我々の生活が共同化するにより又新たな矛盾が起る。これは原始的の矛盾ではない文化的の矛盾である。原始的の矛盾とは人格生活と経済生活と直接ぶつかる矛盾、有限と無限との當面的衝突であるが、社会化し共同化した生活に於ては財の生活に於ける羈絆からは著しく免れ得る代りに、新しい人格の束縛が起つて其の束縛と他方に於ける解放とが一致しないことになる。ところが抑へ共同生活を營むのは人格が出来るだけ自由に出来るだけ羈束なく發動したい爲めである。但しさう特別に明言し約束して社会を拵へた譯ではないが、現に人あれば即ちそこに社会があるのは人間に無限なる發展向上の欲望があるからである。其の無限な發展向上の欲望は人格の自由なる妨げられざる發動を要求する。然るに其の爲めに社会を作るによつて此

の人格が束縛を被むることになるのである。斯くて自から進まんとすれば進む途を絶たねばならぬことになり、茲に新なる矛盾が起るのである。

共同化の形は人格の創成

此の共同化の形は様々に變つて来たが、前段に言つて置いたやうに今日までは國家と云ふものを形づくるに依つて實現して居る、今日では國家以外に國家に類似した共同生活の發現體が澤山殖えて来た。即ち自治體、會社、組合其他の各種公共團體、公益團體等何れも共同化の形である。此れ等各種共同體中最も有力にして、最も發達し充實して居るのは國家である。其發達は何れに現はれて居るか云ふと、國家てふ共同體に於て個人人格の外に個人人格の上に、更に、より高い更により大なる人格が出来ることは是である。他の團體、團體は未だ國家ほど十分に一つの人格を形づくつて居らぬ。人格を形づくとはいふ云ふことであるかと云ふと、其自からの意思を有つことである。他人に與へられたのでなくして、其自からの自決的の意思を有ち、其意思から出る自決的の行爲を爲す之れを連續すれば自決的の行動によつて立つことは是れである。今日の國家は國家としての意思を有つて居る之れを名けて國家意思と云ふ。國家は又た國家行爲を爲し

國家行動を營むものである。他の何者によつても與へられるものでない、國家其のもの、存在の意義から國家は一の人格を成すものである。

個人人格と國家人格

國家と云ふ大きい人格と國家を構成して居る個人の人格とはどう云ふ交渉を爲すか。個人は個人としての人格生活を有つと共に又た國家の一員としての人格生活を有つ。ところが國家は個人を離れてあるものではない個人が集まつて初めて國家が出来るものである。従つて國家の自決的意志自決的行爲を完全ならしめ、國家が他に從屬しない完全なる人格である爲めには、國家を形づくつて居る各個人の人格を完全に自決的にしなければならぬのである。國家が國家を形づくる國民の人格を制限すること多ければ多い程其の國家は自分の人格を束縛することになる。束縛せられた者が寄つて作る國家の國家人格は制限せられたものである。個人の自由を出来るだけ認め個人の權利を出来るだけ伸張せしむるは個人の爲にするのみでなく、國家自からの爲めに國家自からの存在の爲めに是非しなければならぬことである。故に國家は其の存在の根本要義前提條件として、國家を構成して居る國民を出来るだけ自由に取扱はねばならぬのである。自由でなければ

ば人格はそれだけ傷つけられ破られる。傷つけられ破られたる人格を以つて成る國家は傷つけられ破られたる國家である。故に國家は自ら瑕なく汚點の無い國家たらん爲めには、其國民を束縛することを出来るだけ少くせねばならぬのである。

國家人格に於ける一矛盾

個人以外に最も發達した人格たる國家人格は又た其れ自から一の矛盾を有つて居る。國家本來の存立の要義としては、國家を構成する個人人格を出来るだけ自由にすることによつて、自己が自由な活動を爲すものにならねばならぬものでありながら、さて實際此の國家を建て、行くにはそれではいけない、少くとも今まではいけなかつた。國家の單位たる個人人格に制限を加へ、其自由を束縛することによつて今日まで繼續して來た。これが實際の事實である、即ち實際の事實と國家本來の理想とは矛盾して居る。

國家なければ個人は滅ぶ

實際と理想とは大いに遠ざかつて居る。けれども遠ざかつて居る現實でも若し此れが

ならば、個人の人格は單に制限束縛を被むることが厭やさにそれを捨てたならば人格其ものは亡んでしてしまふ、國家なき個人は死ぬ外はない。個人の生活に取つては國家は空氣、光線或は水の如くは是非無ければならぬものである。我々の物質的存在に空氣、光線が無ければならぬ如く、我々の精神的な生活には國家は是非無ければならぬもので、我々個人は國家の内にてのみ生き得るものである。

國家人格の完成

此の事を皮相に觀察して國家は一つの權力なり、國家ありと云へば即ち必ず壓迫ありと考へる人がある、これは一を見て二を知らざる論である。國家が權力たるに止ることは今迄の歴史に於て國家の發達が未だ幼稚な時代に於ての一事實である。歴史上の實際の事實としては國家は儘かに最高の權力である。然し權力であることは決して國家本來の存在の要義ではない國家は人格の完成である。國家が一つの權力たるに止まるのは國家がまだ幼稚であるからであつて、發達した時代に於ては國家存在の最要義は其れが完全なる一の人格たりと云ふことにあるのである。文明の發達は如何にして此の缺陷のあり瑕のある國家人格を完全なものとするべきか、之れに向つて

努力することに存する。國家人格を完成するは個人人格を完成する所以である。其れと同時に個人人格を完成するは國家人格を完成する所以である。昔から屢々繰返された「國家あつて個人あるか個人あつて國家あるか」と云ふ問題は無用の問である。世を成して居ない。個人は國家の爲めにのみ生きて居るのでもなければ國家は個人の爲めにのみあるのでもない。人があれば即ち國家がある、國家があるには個人のあることが先行條件である。國家に奉仕するのは自己の人格に奉仕することである。他の人がやつて呉れるだらう國家人格の完成の爲には他の人が盡すから俺は國家人格の完成の爲めに盡くさないで、唯だ自分の利益だけ圖れば宜いと云ふやうなことは出來ない。自分一人が仲間から外れ、ばそれだけ國家人格の完成が遅れる。微小なる一人々々と雖も自分の人格を完成することは國家人格を完成することに貢獻する譯である。唯だ其の現はれ方には得る利益よりも及ぼす害の方大なることが幾らもある。政治上の革命の如き其れである。革命の爲めに國家人格を大いに進めたこともあり又大いに害したこともある。其の現はれ方に就ては大いに違ひがある。けれども個人の行動が國家の人格の完成に向ふべきものであり、又た知らず識らずの間に向つて居るものであることは事實である。

國家以外の共同生活

ところが我々の生活は其ればかりではない。國家人格の完成の爲めにのみ一切を捧げてしまつて居るのでなく其の他に又た色々の事を爲して居る。國家以外に爲して居る我々の行爲と雖も全然孤立した行爲ではない、やはり共同生活の中で營まれて居るものである。其方面を何と名けて宜しいか。國家に直接の關係の無い人間の共同生活上の色々な運動種々な仕業は何と名けるかと云ふと、普通之れを社會と名けて居る。

所謂國家と社會との衝突

そこで國家と社會とは衝突する、國家の要求と社會の要求とは兩立しないと考へる人がある。乍去これは一の謬見である、其は社會は國家の中にある、或は社會は國家と別に並んであるものと見るから來た間違ひである。國家と云ひ社會と云ふのも、つまり我々の共同生活の全體に他ならない。其他に何もあるのではない唯だ見方が違ふのである。一つの物を上から見ると横から見る或は下から見るとの違ひである。此物に二つあるのではない人間の共同生活に二つあるのでは

ない。共同生活は一つの體を成す渾一體である決して相衝突するものではない。

國家に關する謬見

然らば如何なる見方をした場合が國家であるかと云ふと、今までの説では統治の關係に於て結びつけられて居る點から見たものが國家であると云つて居つた。ところが統治とは中々説明が難かしいから分り易くそれは即ち權力關係である、權力關係によつて結びつけられて居るものと見た場合の渾一體としての共同生活、それが即ち國家であると斯う云ふやうに今までは説明して居つた。然しこれは甚だ舊くさい囚はれた考へ方である。一時或る時はさう考へた方が當を得て居つた場合もある、即ち佛蘭西革命時代の如き是れである。今日は佛蘭西革命の時代とは大變違つて人間の考へが非常に進んで居るが、然し國家の學問政治の學問は遙かに進歩が後れて居るから、統治殊に權力關係と云ふ具體的のものを以つて説明して居る。乍併權力は唯だ一つの手段である治めるに就ての一つの手段である。若し權力を行使しないで人類の共同生活がより完全に行くならば無論權力は要らない。唯だ今までの人類は權力關係に依つて無理に形を與へ、鑄型を與へて入れなければ、混沌として纏まらなかつた。そこで權力關係によつて其の鑄型へ入れ

ることを統治と云つて居つた。無論如何なる世になつても國家がある限り人間の共同生活が存する限りは、統治をしない事はない全然無統治と云ふことはあり得ない。其れと同時に權力統治が國家の存在の本義であり國家の本質である時代は疾くに過ぎ去つてしまつた。より高いより先きな事が國家の本質であり國家の仕事である。

國家眞正の本質

其のより先きなる事とは何か、我々が人類の共同生活に於て國家と名けるのは人類の共同生活の形——一つの共同生活であるけれども其の形は色々に現はれる——其の色々な形の中で一番人格性を多く具へて居るものを云ふのである。他のものにも人格性は無いのではない皆人格性を帯びんとしつゝあるけれども、中には極く僅かな人格性しか具へて居ないものもある。稍々多く具へて居るものもある。段々度合があるが其の中で一番人格性を餘計具へて居る個人的人格生活と殆ど異なる人格性を有つて居るものが國家である。

國家人格は未だ個人人格と同一ならず

然らば國家と云ふ人格は個人的人格と全く同じものであるかと云ふと、左様ではないまだそこ迄は至つて居ない。何故至つて居ないかと云ふと我々個人的人格は一刻も休むことがない絶えず行動しつゝあるものである。一瞬間と雖も行動しない人格は無い。個人人格は絶えず行動して居る人格である、寢て居つてもやはり行動して居る。寢る事は一つの行動である休息と云ふ行動である。死なない限りは生れた瞬間から死ぬ瞬間まで我々個人的人格は絶えず行動しつゝある。色々な行爲を繰り返して連続して行動しつゝある。随つて我々の個人人格の意思自決的の意思は絶えず働く、それは悪い方に働くこともあり善い方に働くこともある。善悪兩方の爲めに働いて居るが兎に角始終働いて居る。故に個人人格を譬へて見ると廻つて居る獨樂の如きものである。唯だの獨樂ではない廻つて居る獨樂でなければ個人人格でない。廻つて居るのは或る力がそれに始終加はつて居るからである。靜態に於てない絶えず動態に於てあるものである絶えず運動して居るものである。別段説明しなくとも直ぐ分ることと思ふが、抑々此宇宙は運動である、動いて居ない物は何もない皆動いて居る、併し動いて居る物の中でも比較的動いて居る物と比較的動いて居ない物があるから動と靜とに別つ、けれども靜と雖も實は皆動いて居るのである。例へばコップは机の上にチャンと乗つて居る動きはしないようであるけれども、實は非常に動

いて居る。一分間に何里かの速力を以つてグル／＼地球と共に廻つて居る。乍去地球の表面に於てはコップは靜の状態に在ると云ふ。我々の生命は絶えず動いて運動して行くことに依つてのみ保たれて居るのであつて運動して居なければ死んでしまふ、絶えず脈が打つて居るによつて生きて居る個人の人格は絶えず行動して居る。ところが國家の人格は必ずしもさうでない。國家としての行動を全く停止してしまつて居ることもある、又は全くは停止しないが間歇的の行為のみで連續的の行動と云へない場合がある。例へば露西亞の如き或は支那の如き他の國家に比べれば、連續して居る人格性を有つて居ると云へない、それでも國家である。又た代議政體を布いた國に於ても例へば日本の如きは代議政體を布いて居る、即ち人民と云ふ個人人格が國家人格の行動に參與して居る。従つて其の生命は餘程充實して來て居るけれども、帝國議會の開會期は一年の内僅かに數十日で、あとは帝國議會は休みである。帝國議會のある間は政府も民間も緊張して居るけれども、議會が先づ濟んだとなるとダラリとしてしまつて、ヤレ賄賂を取つた疑獄が起つたと云ふことが起つても左程問題にならぬ、だから議會中だけ押伏せて置く。何とか郵便局長が印紙を澤山盗んで賣つた。これが議會中に現はれた日には大問題になつて通信大臣は大變だから、議會中は新聞記事を差止めて置いて議會が濟んだらパツと發表するとか云

ふ。新聞はワイ／＼書くけれどもモウ議會が濟んで居るから當局者に肉薄して責に任せしむる迄に行かない。英吉利の如き代議政體になると議會は必ずしも始終やつては居ないけれども、其會期は長いし又た議會が濟んで居る間は常設委員があつて、何時でも必要に依つて集まるやうになつて居るから、人民は殆んど絶えず國家意思の發動に參與して居る。英吉利の國家は日本の國家より遙かに餘計生きて居る國家である。英吉利に比べれば日本の國家は一年の内八ヶ月は半は寢て居つてあと三ヶ月だけ生きて居る餘程惰け者である。支那の如きになれば殆ど始終寢て居る時々ヒヨイ／＼と眼を覺ます。それで辛うじて國家の存在が分る位のものである。無論其の間と雖も何かの行爲はして居るが之れを個人の人格に比べれば、意思が絶えず發動し絶えず其れから行動が出て居るとは云へない。無論代議政體で帝國議會がなかつたところが國家の活動は一時と雖も止んで居ない絶えずある。國家は行政を絶えずやつては居る。けれども其の絶えずやつて居るのは國家の機關たる官吏、國家の機關たる官廳が動いて居るので、必ずしも國家が動いて居るのでない場合が幾らもある。一定の方針を定め夫々の機關を拵へ夫々の役人を任命して之れに仕事をやらせる。其の仕事をする人は個人である個人人格としてやつて居る。個人人格は絶えず働いて居るから官吏となつた者は始終官吏として働いて居る一刻も休んで居な

い。乍併それは必ずしも國家人格の活動であるとはばかりは云へない。否國家人格を傷つけたり國家人格の要求に逆行した事も随分官吏としてやつて居る。其の極終に國家を亡ぼすやうになることもやつて居る。であるから國家人格は有らゆる個人人格以外の人格の中では完成したものであるけれども、未だ個人人格と全く同じな自決意思が絶えず働き絶えず自決行動を爲しつゝある人格とは云へないのである。

人格としての株式會社

今日に於ては國家に殆ど比しても宜い位に、經濟生活の上にて人格性を多く具へて居るものは株式會社である。各種の會社も皆左様と云へるが株式會社は殊にさうである。株式會社は一つの人格である、法律の言葉では昔から「法人」と云つて居るが、法律で法人と云つても云はないでも——日本では明かに法人と認めて居るけれ共歐羅巴の法律獨逸の法律では株式會社は法人であるかないかが定まつて居ない。學者の間に色々の説があるが、經濟上から見れば株式會社は慥かに一つの人格である營業人格である。株式會社と云ふ一つの人格が起つて來たことは、我々の共同生活に於いて國家なる人格が發動して來たに殆ど比して宜い位の大進歩である。我

々に與へられて居る解け難い根本的の矛盾を解くに於て、國家にも殆ど比して宜い位の大きな力を株式會社と云ふ形は有つて居る。勞働對資本の争ひに於ても資本家が例へば古河と云ひ住友と云ひ三菱と云ふやうな、兎に角現實にそこに生きて居る人が眼の前にある場合と、其が株式會社である場合とは大いに違ふ。株式會社の重役は勞働者と同じく會社に雇はれて居る人間である。雇つて居る主人は生きて居る人間個人人格でなく、何々株式會社である。同じ人格に壓迫を加へると云つても其感じが大いに違ふ。自分と同じ飯を食ひ自分と同じ喜怒哀樂の情を有する人間に二六時中ガミ／＼小言を云はれて居る場合と、何々株式會社と云ふ人格に小言を言はれる場合とは感じ方が違ふ。此れは國家生活の上にては分つて居る。悪い事をすれば無論であるけれども悪い事をしなくとも國家が命令を下す。此れが若し生きて居る自分と同じ人格者が命令を下す場合には實に不愉快である。何だ馬鹿な人を輕蔑して居ると思ふ場合でも、國家と云ふ人格が命令する場合にはそれが有り難く聞える。或は有り難くないまでも嫌やな感じを起さないで喜んで其の命令に服従し得るやうになる。尤も人に依つては却つて反對に國家の命令だから反抗すると云ふやうな不逞者も無いことはないがそれは變態心理の人間である。常態の心理を有つて居る者は同じ事でも或る自然人が命するより、國家が之れを命する方が遙に尊い遙に高尚であ

り遙に服従し易い。例へば裁判は國家の名に於てする天皇の名に於てすると云ふ、國家の名に於てすると云へば之れを破らうとする念が殆ど無くなつてしまふ。大岡越前守がいくら名判官であつても越前守個人が下した判決では昔なら宜いけれども、今日なら少くとも大岡越前守が勝手に裁いた、所謂大岡裁きでは服従しない。大岡さんより遙かに智慧の足りない今日の判事がやつたことでも、國家の名に於てする判決の方が遙かに服従し易い、株式會社はそれに均しい。労働問題として労働者が對抗するとき自然人たる資本主には反對しても、對手が株式會社である場合には其の事情が餘程違ふ。無論重役は罷めやうと思へば何時でも罷められる。乍併重役を罷めることは決して會社を破ることにならない。重役を罷めても會社は依然としてある却つて廓清されてより善くなることがある。恰度國に於て責任内閣——人民に對し或は議會に對して責任を有つ内閣の制度の方が無責任内閣より遙かに良いやうに、株式會社になつた方が個人事業の雇ひ主、個人事業の資本主より——尤も他の點に於て反對な作用があるけれども——其の點に於ては労働問題の解決に大變に良い。今までは生きて人間でなければ營業の主人になれない所謂企業主にはなれなかつたが、今日では生きて人間でない人爲人格が企業主になれる、會社或は組合が企業主になれる、さう云ふ新しい人格が現はれて來たのである。然し乍ら此等は國家に比べれ

ばまだ遙かに人格性の乏しいものであつて、現に學者の中でも株式會社に於ける主人は一體株主であらうか、それとも重役であらうかと云ふ問題がある。會社の株主は其の會社の資本を出して居るものであるから會社の主人である、株式會社に於ける企業主は株主であると云ふ説と、イヤ株主は唯だ資本を出すだけであとは何も關與しない、年に一遍か二遍株主總會に出て來るだけのものである。帝國議會より遙かに關與權の少ないものだ、帝國議會は少くとも一年間に三ヶ月集まつて國務に參與するが、株式會社の株主は年に一遍か二遍株主總會に出て來て、それも大抵事が無い時分には二十分か三分で散會してしまふ。貸借對照表を示し損益決算を示して利益の配當さへ相當にあれば賛成々々で決まつてしまふ。利益の配當が少いかか缺損でもした場合にはギヤ／＼騒ぐが、無事に行つて居る場合には株主は少しも株主會社の經營に參與しない、そんな者が主人である譯はない、だから株式會社の主人は重役であると云ふ説もある。又折衷説として此の頃流行つて居るのはイヤこれは企業者と云ふ資格が分業せられて居る、株主は唯だ企業の有と云ふ資格を有つて居る企業の有と云ふ資格が分業せられて居る、株主は唯だ企業の一切の運業者である所有者ではない。即ち企業が所有者と運業者の二つに分業せられたのであると云ふ。私は此等の諸説に對して反對してそんな事はない、株式會社の主人は株主でも重役でも

ない又両者が主人の任を分擔するものでもない、株式會社の主人は株式會社其のものである、株式會社に於ける企業主は株式會社其のものが其れであると云ふ説を數年前から唱へて居る。私が此説を始めて唱へた時分には西洋にはまださう云ふ説を唱へた人が無かつた此の頃は、殊に此の度の大戦争以來社會問題の解釋の上に於て或は組合社會主義の如くに、組合にも人格を認めやうと云ふ考へさへ起つて來た。少くとも經濟上の眼點から見れば株式會社と云ふ新しい企業人格が起つて來たと認める説は、必ず勝を占めると私は確信して居る。

凡て社會の中に在り

此く各種の人格が起つて來たが我々の個人人格以上に人格性を有つたものは無論ない。これは天から具はつた人格者である。然し此の人格は其の人格だけでは非常に制限せられて居る。財の生活の爲めに非常に制限せられたもので、今日になつては共同生活を離れた者は手も足も出ない何も出來ない。昔の世の中では社會を離れたロビンソン・クルソーの生活も營めたであらうが、今日はそれが段々出來なくなつて來た。前章にも述べた通り徳川時代の日本の百姓の如きは殆ど人と相交渉しない、自分の所で米を作り着物を織つてそれで生活して行かれた。今

日はそれは出來ない今日は何物か必ず買ひ何物か必ず賣らねばならぬ。賣つたり買つたりするには必ず社會の中に入らなければならぬ。社會の間に入るによつて我々の生活は非常に豊富になり充實せられるのである。凡ての共同生活は社會である。國家の横に國家の拾つた剩りを拾つて行くものを社會だと見る考へは大變遅れた間違つた考へである。社會は其の凡てを包含して居る。國家も社會の中にある。國家の中に社會があるのでなく社會の中に國家があるのである。社會は色々な形を取つて現はれて來る其の最も完全なる形は——今まである中では最も完全な形は——まだ、極度に完全とは云へないが、今日までに於て一番完全なもの——國家である。随つて我々の眼には社會生活は大抵な場合には國家生活として映する。併しそれに漏れるものもある。トコロで國家生活になつて居るものを取つてしまつた残りも社會と名けるとすれば、社會は實につまらないものになつてしまふ。左様ではない、社會の一番良い所は今日は國家生活の中に保たれて居る。であるから我々の共同生活の向上發展によつて共同體の人格を進め又個人人格を進めるには、今日では國家生活の充實から始めなければならぬのである。國家を離れた社會的の行動によつて進めて行けとは出來ない相談である。

社會主義、共產主義の異見

茲で社會主義と共產主義のことをちよつと申す必要がある。社會主義、共產主義又た無政府主義と云ふものは此點に於て、今私の申した事とは全然違つた考へを有つて居る。出立するところは皆同じである。社會主義、無政府主義、共產主義と雖も學理の一般に認められたことを離れて架空の議論を立て、居る譯のものではない。唯だ此れから先きの見方が違ふ。私は今申した通りに今日に於ては兎に角社會生活の一番の粹が國家生活になつて居ると云ふ、何故粹であるかと云ふとそれが人格化するからである。だから我々が共同生活に就いても個人生活に就いても、判断の標準は何であるかと云ふと其の人格化の多いか少いか是れである。ところが社會主義、無政府主義、共產主義はサウ見ない無理な解釋をする。どう云ふ無理な解釋をするかと云ふと「國家は權力なり」と云ふ昔の解釋を文字通りに採る。これは社會主義者が考へ出した解釋でもナンでもない、日本でも有名な穂積八束先生によつて殆ど金科玉條的に教へられた説である。國家は最高統治の團體なり、分り易く云へば權力を以つて鬼の面を被つて人民に向ふものが國家であると説く。社會主義者は此説を其の儘採る。宜しいお前達の學者お前達に愛國の觀念を説く憲法學

者がさう云ふ、宜しい國家は權力の團體である鬼の面を以つて人民に向ふものである。だからそれは人類の人格化の完成に害を爲すものである。何となれば權力は何時も必ず自由對等を制限しなければ成立たないものであるからと、かう云ふ。それは左様である、前述べた通り國家は無論權力を用ゐる統治もする、然しそれは唯一つの手段である、さうするのが一番良いからさうして來たと云ふだけの話である。國家其ものはそれだけで終るものではない。軍人はサーベルを下げて居て時あれば人を斬る、然し軍人は人を斬る爲めにあるものではない國を衛り國を防ぐ爲めにある。國家を防ぐには國家に仇をする者があれば斬らなければならぬから斬る。けれども唯だ斬る事が目的ではない。斬らずして國家を衛り得れば、決して斬りはしない。軍人とは人を殺すものなりと云ふ定義を下したならば大變な間違ひである。國家が權力を用ゐるのも從來權力を用ゐるによつて國家生活を一番よく充實し得たからさうしたのである。いつでも必ずそんな手段によらねばならぬものでも何んでもない。年の行かない時は一人で歩けないから、お母さんに手を引かれて歩いた、けれども大きくなつて髭を生やすやうになつてもお婆さんになつて腰の曲つたお母さんに手を引かれて歩かねばならぬことはない。子供がお母さんの手を引いて上げるやうにならなければいかぬ。國家權力説とは國家がお婆さんになり子供が大きくなり力の強い者に

なつても、お母さんに手を引かれて歩かねばいかぬと云ふやうな説である。社會主義は其説を採つて居る。而して曰く國家とはさう云ふものだ。子供が大きくなつて立派な者になつてもお母さんに手を引かれて居なければいけないと云ふのが國家だ。だから此れは人格の完成と衝突するものである。此意味に於て國家と社會とが衝突する、社會は人間の人格の完成を本義とする、國家はそれに對して個人の人格の完成と云ふことでなく、個人の人格は壓迫して唯だ自分の人格のみを肥やすものである——國家が一つの人格であることは社會主義者中でも認める者がある——故に國家は個人の人格と全然離れた別に對抗した、對立した人格である。彼れ肥えれば我れ瘠せる我れ肥えれば彼れ瘠せるものであると、斯う彼等は云ふのである。私は此説を取らない。國家が肥えるには個人が肥えなければならぬ、個人が肥えるには國家が肥えなければならぬ此れは同じものである。唯だ個體の形と共同體の形が違ふだけであると主張するのである。社會主義の説は之れを正反對に對抗して居るものと見、一方が出れば一方が凹まなければならぬものであると説くのである。

社會主義と國家主義

そこで此の國家たる人格に對抗して居る個人の存在を充實して行くには、どうしても共同化しなければならぬことは社會主義者も認める。何となればそれは事實だから。昔からの數千年の歴史の示す所、孤立した人間は人格が萎縮してしまふ外ないことは彼れ等も十分に認める。其の共同化した社會が社會だと云ふ。そこで社會と國家とは常に對抗するもので、社會が完全に發達するには國家があつては邪魔だ、凡て國家を社會にしてしまはうと云ふのである。此點に於て正反對の説を主張するものは所謂國家主義である。國家主義は社會を皆國家に入れてしまはう、社會を悉く國家にして、國家と云ふ生活に盛りきれない社會が無いやうにしようとするものである。今はまだ國家以外に漏れて居る社會生活もあるがそんなものは無いやうに、すつかり擲くつて皆國家に盛つてしまはうと云ふのが國家主義である。此點に於て社會主義とは恰度相對する説である。日本では國家主義を以つて唯だ國家の爲めに盡くすと云ふやうな、簡単な意味に解釋して居るものが多いけれども、それは論のない話で善いことに相違ない、西洋で云ふ國家主義とは其れではない。社會を一切國家にしてしまひ國家以外の社會は無いことにしてしまはうと云ふのが國家主義である。之れに對して社會主義は國家を皆社會にしてしまはうと云ふ。社會主義と云ふ名は之を標榜したものである。

無政府主義と社会主義

無政府主義は、國家を社会にしてしまふことを段々にしないで、直ぐしろと云ふのである。國家が進化の結果段々に社会になることは待遠しい、直ぐに國家を無くしてしまへば社会に取つての邪魔物が無くなつてしまふから直ぐ左様しろと云ふ、乃ち國家を無くなす方に重きを置くから無政府主義と名けるのである。社会主義は之れと異ひそんなに急になるものではない、人類進化の道行は徐々に行かなければならぬ。放つて置いても國家は段々其れ自ら萎縮して、社会になつてしまふものだと主張するのが社会主義である。であるから一口に社会主義、無政府主義と同じやうに云ふけれども實は根本的に違ふものである。露西亞で今やつて居るのは決して無政府主義ではない、社会主義而も其の道行である、スツカリ社会主義に成つたのでは決してない。英吉利で今流行つて居るギルド社会主義、あれは私は無政府主義の私生兒と名ける。無政府主義の看板を掛けたのでは少し工合が悪いから、腹は無政府主義だけれども表面は餘程穩健なことを言つて居る。だから無政府主義の隠し兒である。此れはソーシアリズムと云つて居るけれども實は社会主義とは違ふ。社会主義は自然にさうして行かうと云ふので自然に逆行することに反對す

る。然し力を盡くして出来るだけ速くさうなるやうには突つかう刺戟は加へよう。然しいくら刺戟を加へても成るだけにしか成らぬと云ふのが社会主義である。無政府主義は直ぐそれをやつてしまへと云ふ。結局は今の國家を悉く社会にしてしまふ可きものとする點に於ては、社会主義、無政府主義、共產主義皆同じである。其點から云へば彼れ等は何れも同穴の貉と云つて宜しい。貉は貉であるが唯だ其の貉さ加減が餘程違ふのである。

國家と社会とは兩立す

此の如く社会と國家とが對立して、社会から云へば國家が邪魔になり國家から云へば社会が邪魔になるものであるとなつたならば、これは實に耐へられない生活と云はなければならぬ。ところが實際は決してそんなものではない。我々の有つて居る歴史は日本の歴史でも西洋の歴史でも何處の國の歴史でも、虚心平氣に之を見れば社会の充實は國家の充實によつてのみ爲されて來て居ることを示す。國家生活が充實すればする程個人人格の解放が完全になつて來る。國家を離れて人間の解放はないと云ふことを示して居る。國家あつたが爲めに個人人格が大いに壓迫せられたのは、其國家が歪だから其の國家が不完全なものだから、國家が國家として立派なもので

ないからである。國家が國家として立派になれば人格を自由にし、其の發動を消かにするに至ることは明白の事實である。

國家の充實は英吉利が第一

洵に羨やましいことであるが此點に於ては日本は餘程後れて居る。どうしても先づ英吉利を推さなければならぬ。英吉利を除いて外には之に比す可きものは殆ど無い。それは英吉利人が特に偉い譯ではない、英吉利に富があつたからである。英吉利は十六世紀以來世界の富を皆自分の國に聚め、世界の富の中心となつたから此れが出来るやうになつたのである。日本には悲しい哉それだけの富が無いから出来ない。國家生活の充實は財の生活を通してなければ出来ない。いくら國家が完成して其の活動を十分にしようと思つても、其の活動の材料たる財の生活が甚だ限られて居て、國家の行動が絶えず其れが爲めに抑へられ限られるやうな間は國家は十分の働きが出来ない。日本の國家は今日したい仕事は澤山ある、教育の充實、社會政策の實行、色々其の事をやりたいけれども奈何せん日本の國は未だ富んで居ない。税をいくら増して見ても中々足りない、だから思ふやうな事業が出来ない。儲かばかりの新事業でも其負擔が餘程重く感ぜら

れる。財政が思ふやうにいかなければそれだけ國家生活は充實しない。國の富が増して來れば財の生活の束縛を受けることが少くなり、要るだけの費用を使ひ十分の機關を備へ有らゆる財政上の設備を充實し、立派な人材を集めることが出来、自然に其仕事がうまく行く。尤も國が富めば腐敗が起ることもあるけれどもそれは變態である。亞米利加の如きは此變態を示して居る。原則として見れば國が富めば政治道徳も完全になる。賄賂が行はれるのは多くは國が富んで居ないからである。國が富んで居ないから官吏に對する手當が十分でない、そこで志の堅くない者は賄賂のやうな誘惑に克てなくなつてしまふ。國家の官吏に對する給與が十分であつて、其の生活を樂しんで全力を擧げて國家に奉仕することが出来れば——それでも賄賂を取る者が全然無いとは云へないけれども——餘程少いであらう。人は持つて生れて悪い事をしようと思つて居る者では決してない。先天的に悪性を帯びた者も無いことはないけれども、さう云ふ者を除いた外ものは境遇によつて悪い事に陥る者が多い。所謂政治上の腐敗も境遇が然らしめるものである。其の境遇を作る最も大なる事情は何かと云ふと財の生活の制限である。英吉利人は先天的に大變優れたる性を有ち、日本人は之れに對して遙かに劣つた性を有つて居る譯ではない、英吉利の財の生活の充實が英吉利をして之れを爲さしめるのである。尤も其の中にも色々な外部の事

情があるけれども一番の原因はそれである。

國家の充實は先づ經濟上から

國家生活の充實は産業の奨励、殖産工業を先づ第一着手とする。如何にして國を富ますべきか、それは唯だ慾を深くして金持にならうと云ふ貪慾から來るのではない、如何に國を富ますべきかは如何に國家生活を充實すべきか、即ち其れによつて如何に國家を形づくつて居る個人の人格を完成し得べきかである。さうは自覺して居ないだらう、然し無自覺の間に其大きな原則によつて動かされて國家は發動して居る。各國とも自分の國を富ますさう富ますさうとして居る。或は他の國を害してまでも自分の國を富ますさうとして居る。他の國を害してまでやることはいけないけれども、それ程強く國を富ますさうと思ふのは財の生活の充實によつて、財の生活に存して居る根本の矛盾を取り去ることが、如何に國家人格の充實に必要であるかを特に人間が深く感ずるからである。

財の生活の非人格性、自然性

人格に生きて行にはどうしても財が要る。個人の人格に於ても要る如くに國家人格にも要る、會社人格にも要る組合にも要る市町村自治團體にも要る。有らゆる共同生活には皆財の生活が要る。苟も人が寄つてたかつて居る以上どうしても財が無ければならぬ。乍作財ばかりあつたのではいけない、財があつて而して其の財を用ゐる人間の勞働がなければいかに働かなくてはならぬ。即ち財と勞働此の二つが無ければならぬ。ところが此の二つは屢々述べた通りに制限されて居る。非常に有限にしか無い不足であることが其運命である。ソコで其の不足は共同生活に於ては非人格性となつて働くものである。非人格性とはどう云ふものか。人格性は無限に伸びよう無限に善くならう、無限に高尚にならう無限に進まうとして居るものである。非人格性は之に絶えず働きを加へて居るにあらざれば、人の要求に逆行して行かうとするものである。之に力を加へ勞働して我々の用を足すやうになつてこそ我々を進める用を爲すけれども、勞働を絶えず加へる工夫を少しでも怠ると後戻りしてしまふ。無限に進まうとする反對に退化させようとして居る、それを非人格性と云ふ或は之れを自然性と名けても宜しい。自然は或る意味から云へば極めて惰けたものである。日本の國土あつて以來此の國土の内には澤山の人を養ふだけの力は具へてある。山を掘れば礦物がある水を引けば動力を起し得る。ところが此の礦物を十分

に採掘し此の水を引いて水力電氣を起し得るやうになつたのはツイ此の頃である。日本にある無数の鑛山を掘ることは幕府時代にも少しはやつて居つたけれども、殆ど開發しないで明治になつてから西洋の工學、技術を持つて來て初めて之れを開發するやうになつた。自然は昔からチャンとそこに在つた、日本には鋼もあり石炭もあり石油もあり其の他の鑛物もあつた。勿論澤山は無かつた、又たモウ無いかも知れないけれども兎に角今掘つて居るだけは昔からあつた。然し人間が行つて之れに勞働を加へて取出して來るまでは自然は黙つて居る、非常に惰けたもの、非常に不精なものである。人が行つて色々骨を折つて資本を注いで之れを促して初めて、暗闇からソク出て來て人間の役に立つ、土地もさうである。唯だ普通に種を播いて居つたのでは年々收穫が減つて行つてしまふ。絶えず肥料を施したり土地の改良をしたり、始終色々な工夫を人間が爲して行くことに、依つて自然はどうやらこうやら人間に追つて行く。之れを少しでも怠り例へば一ケ年でも肥料を施さずに置けば地力がガタンと落ちてしまふ。實に自然は油斷も隙もならぬ情け者である。之れを人格の要求の上から見ると、自然は其の怠惰性の故に人格の發展を絶えず阻礙しよう阻礙しようとして居るものである。故に我々の個人人格、國家人格が充實して居ない時分には、此の極めて怠惰なる自然の爲めに始終抑へられて居つて先きへ出ることが出来な

つた。或る程度までは人間は工夫をして行くけれども、それから先きは困難が非常に大で我々の力が及ばないで行止りになつてしまふ。例へば飢饉と云ふことがある、年々耕作して行くけれども段々地力が減つて來る、そこへ雨が大量降るとか或は非常に旱天が続くとすると、人間が非常に努力したにも拘らず何も收穫が無い、人間の食べる物が無くて飢饉となる。我々の力の弱い時分にはさう云ふことがあつた。今日は農業の技術が發達して居るから飢饉などは殆ど無いけれども、それでも油斷して居れば不作は何時でも起り得る。

共同生活に於ける人格と非人格の衝突

國家てふ社會生活に於ては此の人格的のものと非人格的のものとが絶えず相ぶつかつて居る。此のぶつかつて居る間に運動が起る。我々は此の非人格的なる自然を人格化しよう、人格の充實に役に立つやうにしよう、と工夫して居る、其れが即ち運動を起す。其の運動の全體を名けて人類の經濟生活と云ひ、此頃の言葉では國民經濟と云ふ。日本なら日本の國民は一つの國民經濟を作つて居る。然し國民經濟とは云ふけれども其の國民經濟には未だ自決的の意思は無い。經濟は我々の個人の經濟であるか或は會社の經濟であるか組合の經濟であるか、夫々の具體的の

單位組織を作つて初めてそこに意思があるのであつて、國全體の經濟生活の統一綜合的的意思なるものは無い。國家經濟には意思がある、國が營む經濟には國家の意思がある。國家の強い充實した意思があつて發動して居る。官林の經營、官業の經營有らゆる事は一定の意思によつて一定の豫算に従つて經營されて居る。之に反し日本全體の國民經濟なるものは謂はゞ無政府的狀態に於てある。各個人各法人各團體が夫々の意思を以つて營んで居るのである、従つて必ずしも相調和しない。日本全體に五千万石の米が要るから必ず五千万石の米を作らうと云ふ計劃を立て、米の作付けをするものではない。各百姓が銘々自分の見込に従ひ思惑で田を植付ける。そこで出来た米が五千万石より剩ることもある、さうすると米の値が大變下つて農家が困る。五千万石に足らないと米の供給が不足するから米價が非常に高くなつて人民が皆困ることが起る、此はつまり國民經濟に統一的の意思が無いからである、統一的の意思があつてチャンと其の意思によつて計劃して行けば——自然から來たる障礙は別である。が然しそれも統一的の意思があれば其の障礙をもチャンと豫想して其れに打ち克つ途を講ずる、出来るだけ其の障礙を免れようとするが、今日は其の工夫をしようと云つても各人がテンデンバラバラにやつて居る。それにしては割合に圓滿に行つて居るものと云ふ外はない。

國民經濟の計劃化、統一化

此の頃獨逸などで切りに唱へられる國民經濟生活の社會化 *Sozialisierung* とは、成だけ統一的に一つの計劃を立てた國民經濟組織を立てようとするのである。其ことを *Planwirtschaft* (計劃經濟) と云つて居る「プラン」即ち計劃を立てた經濟と云ふ意である。今までは「プラン」の無い無成案の經濟であつた、此からは「プラン」を立てた經濟をやらうと云ふのである。等しく社會主義と云ふが其中には此秩序經濟を要求する要求もある、其だけは正しい確に正しい。けれどもどうして其れが行はれるかを教へないから一の空論たるに止まつて居る。兎に角無政府的狀態にある今日の國民經濟——政治上其他の生活に於てはチャンと國家の意思が發動して居るにも拘らず、經濟上に於ては依然個人の利己心、營利心に委せて置くが爲めに需要供給がうまく合はない。其れが爲めに我々の財の生活を充實はしつゝも、分配が十分に行つて居ないが爲めに澤山の國民に困難を與へて居る。此れはどうかして廢めなければならぬと云ふことだけは確かである。此の秩序のない經濟に於ては非人格性が著しく發動して居る。其の意味に於ては經濟生活と國家生活とは多くぶつかるものである。經濟生活の要求と國家生活の要求とはどうもうまく調和しな

い、之れをどうかしてうまく調和するやうにしなければならぬことは餘程前から感ぜられて居る。其れが戦後の獨逸に於て社會化、計劃經濟等の議論を盛ならしめたのである。

國民經濟と國家との衝突

此く國民經濟に現はれた全體的の財の生活と、國家に其の最高の發現體を有つて居る我々の共同人格の生活とは絶えず争ひをし闘争を續けて居る。此の意味に於ては人生は一つの闘争である。永久の平和ではない永久に闘争を續けて居る、其が小さなことに於てもよく現はれて来る。國家經濟の上から斯うしたら宜いと思ふ事も、所謂民業の蹂躪だとか云つて反對された、思ふことが中々行はれない。例へば鐵道を國有にしようとする、鐵道を國有にすることは國家の秩序經濟を立てる上に於て非常に善い事である。ところが鐵道會社其の經營者は買収に應じない。強いて買収しようとするれば民業の蹂躪だ民業の壓迫だと云つて反對する。日本では西園寺内閣の時に之れを斷行したけれども英吉利の如きはまだ此れが行はれて居ない。と云ふのは英吉利は國家生活が充實した羨やましい國だとは申したけれども、國家生活を充實して居ると共に亦た之れに對抗する非人格的の經濟生活も亦た充實して居る。一方が強ければ他方も強くして其の間の衝

突が烈しい日本より遙かに激しい。であるから彼の充實した國家を以つてしても、中々鐵道の國有が出来ない。今は炭山の國有と云ふことを云つて居るが此れも中々出来ない、否戦争中國家が管理して居つたのさへも之れを廢すと云つて居る。坑夫がそれを廢されては困るからとて先頃ストライキをやつた。一體國家から云へば炭山の管理は善いことで坑夫等の要求と國家の要求とは合致して居るけれども、炭山の持主、資本主等の非人格的傾向が非常に常い爲めにそれが出来ない。其の爲めにあの大ストライキが起つたのである。

簡易保險の一例

日本でも此の頃問題になつて居るのは簡易生命保險の保險金額である。政府の一番最初の原案は三百圓が最高限であつた。私共は三百圓を五百圓にしたら宜からうと云ふ説を當時持つて居つた。政府は原案の三百圓を更に五十圓減じ二百五十圓を限度として法律が出来た。それは物價の騰貴しない昔の話である。今日のやうに斯う物價が騰貴しては二百五十圓の保險金を貰つたところで迎も葬式も營なめない。どうしても之れを引上げなければならぬことは常識で分つて居る。それは幾らまで引上げるが適當であるかは問題であらうが、之れを倍の五百圓にしよう

云ふ説が大分有力である。さうすると保険業者は直ぐ蜂の巣を突ついたやうに起つて反對して、これは民業の蹂躪、民業の壓迫だと云つて専門の學者などを驅り出して来て盛んに反對論を唱へる。我々から見るとこれは見す／＼泥棒した者を辯護する辯護士より、モツと下手な事をやつて居るものと云はねばならぬ。強いて附けた議論であるから一つも成つて居ない。其の御用辯護士の一人たる某博士曰く、物價は今日のやうに高いことが永續するものではない今に物價が下がることは極まつて居る、それを今簡易保険最高金額の二百五十圓を五百圓にすれば物價が下がった時又た之れを引下げなければならぬ、政府の政策として始終動搖することはいいけないと、此れは呆れ返つた愚論である。物價が安くなるのはどうして云ふか。必ず安くなる方法は斯う云ふやうにしてやつて行けば宜いと云ふ確かな保證があればそれは別問題であるが、そんなことは人間として出来る話ではない。農商務省が非常に骨を折つて物價引下げをやつてもそれは出来はしない。今より安くなるならうけれども戦争前の水平線に戻るやうなことは逆も考へられない、戻らない方が確かである。又た民業の蹂躪、民業の壓迫と云ふけれども所謂民業なるものは時によれば蹂躪して少しも差支ないものである。一體何の爲めの民業であるか、或る人々が肥える爲の民業ではない。國民各人をして其の人格を完成せしむる爲めには産業を營なむことをさせなければならぬ。

らない。成たけ自由に成たけ既得の権利は尊重せねばならぬけれども、それは國家と云ふ人格と衝突せざる限りに於て許すのであるから、國家の人格の完成の上には是非なければならぬことであつたならば、民業を蹂躪したつて宜し民業を壓迫したつて少しも差支ない。況んや今の簡易生命保険の問題の如きは決して蹂躪にも何もなりはしない。保險會社の既得の権利を侵害することに何もならぬと私は信じて居るけれども、そんな詳しいことを考へるまでもなく、イキナリ民業壓迫だと云つて反對する。さうすると當局者も民業壓迫と云はれるのは洵につらい、壓迫して居るのを壓迫と云はれればこれはどうも仕方がないけれども、壓迫したのでもなければ又しようとして居るのでも何でもない。全然違つた考へから遙かに高いところの動機から考へてやつた事であるけれども、さう云つて反對される。

所謂民業の蹂躪

此れから先き社會政策、社會事業を行ふ上に於ては必ず絶えず民業の蹂躪、民業の壓迫と云ふ問題を惹き起すに相違ない。それを虞れて居つたら殆ど何事も出来ない。住宅組合を拵へる或は住宅會社法と云ふものも近く出来るやうであるが、之をやれば或る度までは民業蹂躪である。

或は現に今既に實行されて居る職業紹介の如きは非常な民業蹂躪である。國際労働會議の精神は民間にある周旋業、職業紹介を商賣として居る者を全廢してしまつて、出来るだけ此れが成立たないやうにしようとするのである。これは蹂躪どころではない民業の絶滅撲滅である。我々は其の撲滅を期するのである。日本の新法たる職業紹介法制定の精神は實に然るのである、あれを全廢して悉く市町村の經營する職業紹介所で無料で公けなる職業紹介をするやうにしてしまふ。私はモツと進んで質屋の如きも皆民業は廢して市町村が經營するやうにしたいと思つて居る。出来るならば貸家も出来る市町村の經營にしたい。人に家を貸して頭をはねることは絶対に無いやうにしてしまひたいと考へて居る。これは中々今直ぐには行はれまい、然し思ひ切つてやれば或は出来るかも知れない。要するに方法の問題である、方法さへ附けば決してやつて悪い事ではない。それが若しいけなければ社會政策、社會事業は全然斷念しなければならぬ。

一切の社會化は非なり

然し其れならばと云つて何でも構はない、民業は總て皆敵と見て之を抑へてしまふと云ふのかと云ふと決してさうではない、民業はどこ迄も發動して呉れなければならぬ。民業を悉く無くし

てしまひ凡ての産業を國有にし社會化する事は、それはいけない。何故ならば度々申したやうに國家の人格を充實する爲めの事でも、財の生活に於ける行動の發動者は個人でなければならぬからである。會社を經營すると云つたつて其經營者は個人である、國家の行政と云つたつてやはり個人たる官吏の手に於てやるのである。何れも個人の力を頼らなければ出来ないものである。ところが國家の官吏の職務は人の利己心に懇へることは皆無ではないが殆ど無くて済む。官吏が國家に奉仕するのに俸給を全然やらぬと云ふのは出来ない話である。國家の爲めに特に盡した者には相當の褒賞をやる待遇を良くしてやる、これを全然廢してしまへば行政の活動は望まれない。これはどんな世の中になつたつて必ず必要な事である。單に生活を保證してお前達は食へて行けさへすれば宜いと云ふ譯のものでは決してない。日本では此の點は大變善いが其と共に他方大變いけない事は國家の公職、いな國家の公職ばかりではない例へば學校の教員或は甚だしきはお醫者さんの如きに至るまで醫は仁術なりと云ふ、一體醫者が病氣を癒して代を取るのことは怪からぬから踏み倒しても宜いと云ふやうなことを随分考へるものがある。診察料を取らないことが仁術ではない。診察料は當り前に取り醫者として盡くすべき最善を盡くす之れが仁術である。夜中に起しに來たから起きないとか、あの病人は藥價を拂ひさうでないからと云つて効かな

い薬を服ませるとか、手術を怠るとか云ふことはそれは仁術ではない。何處までも醫者として最善を盡くすのが仁術で決して只でやることではない。國家の官吏に向つても官吏は清廉を以つて旨としなければならぬ、食べて行けさへすれば宜い。餘計俸給をやる必要はない。學校の教員はどうやらこうやら生きて行けさへすれば宜いと云ふやうな考へが餘程日本には多い。これは大變間違つた又た悪い考へである。官吏なり教員なり當人が其の心持で居ることは結構なことである。俺は金錢の爲めにやるのではない俺はどんなに苦しい生活をしても自分の天職として信ずる所をやると云ふのは良いけれども、それは個人として自發的にやるべきことであつて他から強制すべきではない。況んや社會が人民に臨み國家が人民に臨むにはさう云ふ意味を以つてす可きではない。個人が唯だ報酬のみを要求するのは間違つて居るが、使ふ方から云へば出来るだけ其の生活を充實してやる。積澤をする無用な事をするのはいけないが、生活を充實して安心させてやつて、相當の事をしたならそれに對しては十分褒賞もやれば名譽も伴はしめてやるのでなければならぬ。自由職業でさへも左様である。況んや有らゆる産業は金を儲けることがどうしても動機となつて發動して居る。此の金を儲けると云ふ念を全然取つてしまへば産業は忽ち萎靡してしまふ。金を儲けたいと云ふ念は人の利己心である利己心決して悪いものではない。利己心が横道

に走るから悪いのである。利己心が正當なる軌道を走つて行く限り其れによつて國家の生活も充實し各個人の人格の完成が得られるのである。利己心とは限られたる財の生活に打ち克たうと欲する念である。經濟上から云へば利己心とは我々の人格の無限發達の要求を、附碍しよう／＼とし、恰けて少しでも注意を怠れば蔭日向をしようとして居る自然を、こつちへ引きつけて人間の用をさせよう／＼と云ふ念此れが利己心である。其の念が絶えず發動して居るのでなければ天然を遁してしまふ。其の利己心は皆個人が有つて居る、會社を作つても其の會社には利己心は無い。其の會社の人格は會社自身の意思があるだけである利己心は全然ない。利己心だけは生きた人間でなければ有つて居ない。即ち本當に自然に打ち克つと云ふことは生きて居る血あり涙ある人間でなければ出来ない。其の個人の性情を滅ぼしてしまつて財の生活に打ち克つと云ふのは逆も出来ない相談である。

之を要するに

個人其の儘の生活は人格の孤立を意味する。孤立者には他の人格の壓迫は無論ない。其の代り財の生活の壓迫即ち非人格性自然の壓迫を受ける。此れから免れる途は個人の生活を社會化し

て共同生活を營なむことによつてのみ得られる。社會化した共同生活は形は何であつても、澤山の人格が寄り合ふのであるから人格と人格との間の衝突が起る。然し其爲めに財の生活からの壓迫を免れる。國家は此の共同生活の一番高い形として出て来て、人格と人格とが互に接觸して一つの人格が他の人格を壓迫することないやうに勉める。どの人格も皆同じやうに自由に生きるやうにすることが其の本義である。個人の方から此の自由を唯一の要求とするのは之れを打ち壊す所以である。國家の方から共同體の方から云へば自分の存在の爲めに、人格と人格とが互に他を壓迫することの無いやうにしなければならぬものである。若し個人が個人としての自由のみを主張するならば其の極は社會を壊すことになる。社會を壊してしまへば他の人格の壓迫は受けない、其の代りに財の生活の更に大なる壓迫を受ける。個人自由の要求のみを認むるのは畢竟するに人類生活の破滅を要求するものである。個人の自由と云ふ點のみから出立すればどうしても共同生活を壊すことになる。壊せば孤立の人間は出来る他の人格の壓迫は免れるだらう、それも今日では中々出来ないことであるが絶海の孤島に一人行つてしまつてそこに居れば勝手な事が出来る。其の代り其の生活は非常に儉れなもので人類の文明はすつかり退歩してしまふ。終に人類は死滅してしまふ外はあるまい。自由と云ひ對等と云ふのは社會生活——今日では國家

生活の形に於ける共同生活を維持して行く限りに於てのみ云ふ話である。此れのみが唯一最高の要求でも何でも無い。それは國家の方から社會體の方から各員に對して見た時の取扱の話で個體の方から云ふ話ではない。個體は社會生活の充實によつて財の生活の束縛から解放されて個人生活の充實を期する外はない。此れを否認する要求は到底實現出来ない。若し出来るとしたならばそれは人類の文明の絶滅人類生活其のもの、絶滅を來す外はないのである。即ち我々個人人格は財の生活の壓迫から免れる爲めに共同生活を營むもので、而して共同生活を營む以上は其れより來る制限は之を辭することは出来ないものである。

第五章 人格闘争としての社會運動

所有の保護は國家の任務

國家發達の度合は國家を形づくる個人の發達の度合に應ずるもので、又た其れによつて測られるものである。國家を形づくる個體が個體として銘々十分に發達すれば國家も亦た十分に發達

し、其の發達が不十分なれば國家の發達も又不十分で、甚だしきは畸形的不具なる發達しか出來ない事になる。ところが其の國家の中にある各個人は財の生活に於て凡て外界の財を自分の所有に歸するものである。國家はそれを所有に歸せしめ、其の所有を保護するによつて個人生活の發達を可能ならしめる。國家存在の意義は決して所有の保護のみに盡きるものではない。乍去所有の保護は其の出立點であつて先づ、其れから掛からなければならぬ。所有の保護は權利の形によつて爲される。權利無く財産無ければ、少くとも今日までの状態に於ては、國家の中に於ける人格活動の一切の基礎は無くなつてしまふ。我々の人格は外界の物を所有すること、之れに對して勞働を附加することの二つによつて維持されて居る。其所有、其の勞働を他をして侵さしめないものは權利である。其權利は國家之れを保護する、保護せられた權利の全體は即ち財産である。

平面的差別と上下的差別

所有物には前に云つたやうに色々品質上の違ひがある。其の違ふによつて各人の職業が違つて来る。又所有物には數量上の違ひがある。澤山有つて居ると少く持つて居るとの違ひがある。所有物の品質の差違は社會の中に於ける各人の地位を定める。お前は百姓、お前は商人お

前は官吏お前は僧侶と云ふやうに夫々地位を定める。これは平面的の差別で上下的の差別ではない。種類が違ふと云ふだけでどの種類が他の種類の上と云ふことも下と云ふこともない。ところが所有物の多い寡いと云ふ數量上の差違は、人々の上下の關係を定める。餘計有つて居る者は少く有つて居る者より上に立つ、少く有つて居る者は多く有つて居る者の下に立つ。多少財産を有つて居つて尙ほ其の以外に勞働する者、或は財産は全然有たず、勞働だけを以つて生活して居る者は、其の勞働の種類によつて其の地位を定められる。大工とか左官とか車屋とか云ふ種類によつて、大工と云ふ地位、左官と云ふ地位、車屋と云ふ地位が定められる。勞働には財産のやうに數量の違ひはない、種類の違ひがあり斗りである。何となれば勞働は有つて居るものではない、勞働する時に出て来るものである。人間の働く力を出して行くことが勞働であつて之れを藏つて置くことは出來ない。取つて置くには其の勞働を物に體化しなければならぬ。勞働した結果が勞働の産物として残る。従つて其れは財産になつてしまふ。勞働其のものは財産でない、勞働の結果が財産である。勞働其のものは財産を作る道行である。取つて置かれない力、自分の筋肉を働かし自分の心身を勞して働くことが勞働である。それは時々刻々に發現するのでなければならぬ。だから此れには所有量の違ひはなく、唯だ種類の違ひのみがある。そこで其の種類

が舊に其の人の地位を定めるのみならず又上下の關係を定める。財産に於ては多い寡いが上下の關係を定めるが、労働に於ては多い寡いでなく、其の種類が同時に上下の關係を定めるのである。或る種類の労働は他の種類の労働より下に附く、普通の事務員は支配人の下に附く、支配人は取締役の下に附くと云ふやうに、仕事の性質が同時に上下の關係を定める。

他人決定労働と從屬關係

労働者は労働に要する材料を自分が持つて居れば宜いが、今日では労働者は原則として自分の労働する材料を自分で有つて居ない。紡績會社の職工は紡績の機械を自分で有つて居るものではない。他人が有つて居る機械、他人が提供して呉れる材料を以つて労働するので、労働者自身は何も持つて居ないのが通例である。大工や左官は労働の道具は自分で有つて居る、人から道具を借りてやるのではない。然るに今日の所謂雇傭労働者の大多數は、自分の労働する道具を自身で有つて居ないで他人から之れを與へられる。随つて労働の種類によつて上下の關係が定まる上に、更らに物を貸し與へて呉れる物の持主に對する從屬の關係が成立し、其の下に立つのみならず、其人に從屬するのが通例となつて居る。そこで労働に自己決定労働と他人決定労働の別が

起つて来る。労働は人間の營む事で意思の發動である。労働する意思、労働意思があつて其が發動することが労働である。労働も一つの行爲である。其が特に労働と名けられるのは人間の用に足るやうに外界自然の物を持つて來て之れに或る働きを加へる其の行爲を指して云ふので、やはり行爲に相違ない。随つて人格の意思から出て來るのである。ところが自分が労働する道具も材料も皆有つて居れば、其は唯だ單純なる上下關係の下に立つのみで從屬關係は起らない。例へば教師は校長よりは下である然し校長に從屬して居るものではない。課長は局長の下であるが決して從屬して居るものではない。唯だ上下關係の下に立つのである。單純なる上下關係のみでなく從屬關係と云ふ特別な關係の出來るのは、自分は労働の要具を有たず労働の材料も持つて居ないで他人から其の供給を仰ぐ者に就いてある。労働者に其の材料を與へ其の道具を與へる雇主・資本家は材料を與へ道具を與へるばかりでなく、其の與へた材料道具を以つて何を營む可きかの意思をも同時に與へる。紡績會社の職工は自分がこんな糸を拵へて見ようあんな糸を拵へて見ようと云つてやるものではない。紡績會社でチャンと定めた機械、材料を使つて第何番手の糸をどう云ふやうに引けと思ひまでも他人に定まれるのである。労働者はそこに入つて行つて與へられた道具與へられた機械與へられた材料を以つてさうして與へられた意思を實行するのみである。

る。彼は自己決定者でなく他人決定の労働に従ふ者である。他人の意思によつて決定せられた労働をするのみである。

労働問題とは他決労働問題の謂

今日の労働問題とは自決労働に就いての問題でなく、他決労働他人決定労働に就いての問題である。材料を他人から供給を仰ぎ他人に備はれることが労働の問題を惹き起すのみでなく、其の間として營む労働なる行為の意思が全然自分の意思でなく、他人の意思であることから起るのである。凡そ人格は有らゆる行為を自決する、自分が意思を立て、其の意思の執行として行為をするのが其本質である。意思を他人から貰ひ他決労働をすることは、既にそれだけで人格を非常に殺されるのである。此れが今日の労働問題を惹き起す所以である。其の争ひの形は賃金を上げて呉れとか労働時間を短くして呉れとか色々のことになつて現はれるが、いくら賃金を上げ時間を短くしても労働問題は決して其れだけで已むものではない。賃金さへ餘計やつて物價を安くして生活が樂になつたならば、労働問題は解決すると思ふのは極めて淺はかな考へである。英吉利の如きは日本に比べれば遙かに賃金は高く労働時間は短かいが、日本より英吉利の方が労働

労働争議が遙かに多い。日本でどんなに賃金を増しても英吉利ほどの賃金を支拂ふことは到底出来まい。國際労働會議の決議によつて八時間労働の實行を無理にしたところで、英吉利では既に六時間労働をやつて居る所さへあるけれども、労働争議は決して絶えては居らぬのである。労働争議は労働が他人決定労働である限りは已むものでない。それを已むものと思つて施設すれば大變な間違を生ずるにきまつて居る。此の點は日本では殆ど分つて居ない餘程分つた人でも分つて居ない、労働問題を喋々論ずる識者、論客にも分つて居ない。況んや當り前の政治家などに分る譯がない分つたら寧ろ不思議である。ところが是は決して日本のみではない、日本のみの問題ならば日本だけに就て考へて済むけれども左様ではない。労働問題は人間の問題である人類全體の問題である。

要は自決要素を多くすること

今日の我々の文明の程度に於ては他人決定労働を全然無くなしてしまふことは望み得られないことである。唯だ成べく他人決定の不必要なる場合に、他人決定をしないように、出来るだけ自己決定の要素を多くしようと思ふだけの事である。所謂「經營の参加」と云ふのは此の要求に應

ぜんとするものである。労働者をして其の従事する工場の経営に参加せしむるのは自決の要素を幾分か多くする所以である。先頃の神戸の労働争議の時に唱道された工場委員制度（鐵道では現業委員制度と云つて居る）の如きも亦た此要求に應ぜんとするものである。これは事業の經濟上の方面即ち企業に労働者を参加せしめるのではない。現業即ち當面の労働作業の決定に参加せしむるのである。労働者の頭に直接掛かつて居る事項に労働者をして出来るだけ参加せしむる、委員を出して斯うしたら宜からうあゝしたら宜からう、斯うしようあゝしようといふ決定に與からしめようと云ふのである。即ち云はゞ工場に於ける立憲政體である。昔は政治は唯だ上に立つ者のみがやつて人民には喙を容れさせなかつた、立憲政治に於ては少くとも肝要な事に就いては人民に喙を容れさせる。殊に豫算審議の權を與へることになつて居る。今日の工場委員制度はまだ豫算の審議權まで與へるのではない、唯だ現在仕事をする現業に就いて斯うもしあゝもしようと云ふ其の問題、即ち作業規定（適當な言葉を考へつかない）で斯う譯して置く、獨逸語の Arbeitsordnung）現に労働する上の色々な秩序、規定即ち「オールドスング」其れに労働者を参加せしめる、雇ひ主の方と労働者側と兩方から委員が出て相談をするのである。此れは決して完全なる自己決定ではないが、少くとも全然他人決定によるのではなく混合決定によるのである。其の點

が他人決定の場合より、餘程労働者の人格を尊重することになるのである。

自決は能率を増進す

労働者の人格を尊重するは労働者をして能率を高めしむる所以である。單なる道具單なる動物として労働者を働かせるのではなく、之れを人間として一つの人格者として出来ただけ其の人格を尊重する、人格的の要求を容れるには決定意思を働かしめなければならぬ。労働者を呼び捨にしないで「さん一附けにするとか、晝飯に暖かい飯を食はせてやるとか労働者の住居を拵へてやるとか云ふやうなことも、要するに労働者の人格を尊重することを形に現はすのである。さうでなくして労働者をどこ迄も動物扱ひにして居れば、いくら善い事をしても駄目である。そんな事をしなくとも労働者の人格を尊重すれば感應しない者もあらうけれども、少くとも日本くらゐ發達して居る國に於ては確にそれが能率の上に現はれて来る。人間は意思の動物である、意思を働かせなければどうしても、唯だ單なる道具、機械、動物のやうにしか働かないやうになり易い。之れに意思を加へてお前が善い事を工夫して呉れたから、こんなに改良が出来たこんなに無駄が省けるやうになつたと云はれれば、人間は刺戟されてよく働くやうになるものである。これは獨り

労働者のみではない官吏でも教員でも宗教家でも何でも左様である。各々其の人の行爲に就いては其の人の意思を出来るだけ其れに伴はしめる。これは今日の國家の根本的要求である。此れが政治上に現はれて國民に参政權を與へることになつて選舉權を行使せしめる、地方の行政にも参加せしめる自治體の行政にも参加せしめる。参加せしめた爲めに却つて悪い事も起る、市會議員が賄賂を取つて瓦斯を食つたり砂利を食つたりするやうなことも起るけれども、それは何事にも弊害は伴ふ。弊害があるから廢してしまふと云ふのは却つていけない、成べく参加せしめて意思を働かせる。尤も國民全體を皆議會に出すことは出来ないから代議士を選ぶ。工場委員制度もさうである、總ての労働者を参加せしめるのではない其の中から代表者を選んで参加せしめるのである。學校にしても校長のみが意思者であつて他の教員は唯だ校長の意思のみを奉じて、唯々諸々として之れを執行する機關になつてしまつては駄目である。各々意思があるからやはりブツ／＼不平を云ふ、校長はあゝ云ふけれどもあれはいけない斯うした方がよいと云ふ、果してさうして良いことも随分ある。一人の人が總ての事に万遍なく廻ることはどんな偉い人でも逆も出来るものではない。ところが此れが中々難かしいので意思決定に參與せしめるとなると、又各人で我儘をして秩序が立たない。秩序は無ければならぬ。秩序を保つには或る度までは各人の意思を

制限しなければならぬ。之は如何なる場合にもある、要するに其程度が肝要である。どこ迄も参加せしめるが最後の決定權はやはり校長なり主宰者なりが有たなければならぬ。どんな場合でも最後の決定權を妨げない限りは成べく参加せしめて、全體の經營は或べく評議の上で之れをやるのでなければ、人格の尊貴を維持する所以でない。

獨逸の大學

獨逸の學問が非常に進歩したのも、獨逸の大學は全然一つの憲法政治であつて、大學全體に關する事は決して總長が獨斷で決するやうなことはない。總長は多くは一年交代に選舉せられる學長も選舉せられるものである各教授が順番に之れに當る。全體の最高機關は教授會と云ふものがあつて何事でもやる文部省と雖も之れは掣肘しない。最後の決定權は無論文部大臣が有つけれども、最後の決定權に妨げなき限りは大學の自治を許してある、是れが獨逸の學問を非常に發達せしめた所以である。亞米利加の大學の如きはそれが無い、總長に大變偉い人があつて何でも總長次第になる。總長は手腕もあり立派な外交家である例へばウキルソン見たいな人がやつて居る。他の教員は教授會と云ふ制度もあるけれども獨逸のように立憲政治になつて居ない。自

由な國と云ふ亞米利加が却つて學問上の制度は餘程後れて居つて、官僚主義と云はれた獨逸は少くとも教育機關——大學教育だけは殆ど完全に近い立憲政治を行つて居る。それが獨逸の學問を非常に進めしめた所以である。これは獨逸大學教育のみならず凡ての教育家は皆さうあるべき筈である。又た凡ての行政の仕組もさうあるべき筈である。勿論チンヤワンヤ始終會議ばかりして居つては仕様がなけれども、何か肝要な事を決定するには成べく衆に問うてやれば皆日分が意思決定者であるから、少々位まづい事でも無理な事でも喜んでやる、反對に樂に出来ることでも唯だ上官の命令を受けてやるとならば、どうしても人間は不平を起すものである。不平を起すからこそ人間進歩がある。唯だ唯だ諸々として上長官の命のみを奉じてやつて居るやうな者はこれは機械である。機械くらゐ忠順に他人の意思を實行するものはない、どんなに人間が奴隷になつたつて機械のやうに完全に他人の意思を實行するものではない。人間を機械にするのは無駄な話である、機械的になるのなら機械を使つた方が宜い鐵で拵へた方が宜い。それを骨と肉を以つて作つた機械を以つて鐵の機械に代へようとするのは甚だ間違つたものである。

國家亦然り

國家は總ての方面に亘つて、國家を形づくつて居る凡の個人をして、出来るだけ意思を働かしむるやうにす可きものである。國家發達の程度によつて其れが行はれる程度には非常な違ひがある。殆ど個人の意思を働かしめないやうにして居る場合もある即ち專制國の如き是れである。然しどんな專制國でも人民の意思をまるで働かせないで立つた例は無い。形は專制ではあるけれども、やはり人民の意思が働いて居る。他面に如何なる立憲政體否共和政體でも全人民が總ての事に就いて絶えず意思を働かして居るのではない。多くの部分は最高の機關が意思を決定するのである。乍併理想の國家、最も完全に發達した國家に於ては、國家を形づくる全國民をして出来るだけ其の意思を發動せしめて、其の意思の發動が國家全體の發達に最も多く貢獻するやうに導いて行く可きものである。いくら意思を發達させてもそれが害をなしてはいけな、それは其の國家自からの自殺行爲である。

國家意思の自決と國民の參加。其一、憲法のこと

随つてどれだけ個人々々の意思を働かせただけ之れを制限するか、細かい事は臨機應變にやるけれども大體の原則は之れを定めて置かなければならぬ。他の言葉で云ふと國家意思の決定に

國民がどれだけ與かるか、どれだけ程度の程度に於てどう云ふ範圍に於て又たどんな場合に於て與かるかを、大體に於て必ず定めて置かねばならぬ、それは憲法によつて定める。必ずしも日本の憲法のやうに成文になつて居るものゝみが憲法ではない成文になつて居ない憲法もある。成文になつて居つても居らなくても國があれば必ず憲法がある（國憲、朝憲などと云ふ曖昧な語は此事を云ふものと思ふ）。今日の所謂立憲政體に於てのみ憲法があるのではない。所謂「立憲政體」と云ふのが抑々をかしい「コンスタチューショナル・ガヴァーンメント」Constitutional Governmentと云ふ西洋の言葉が一體誤解され易い。それを日本語に其の儘翻譯したからをかしいが、どんな國だつて憲法の無い國はない。神武天皇時分もチャンと憲法はあつた、決して明治大帝になつてから憲法が出来たのではない。成文憲法はあの時出来たが、日本國家あつてより今日に至るまで一日と雖も憲法の無かつた時はない。何れの國家でも左様である憲法はある。其の憲法は何かと云ふと國家意思の決定に國民がどの位参加するか、其程度、範圍、種類、性質、時期などを大體に定めたものが憲法である。此意味に於ては工場にも憲法がある、學校にも憲法がある官廳にも夫々の憲法があると云つて宜い譯である。けれどもそれは普通憲法とは云はない、規則とかナンとか云ふ名前を附けて居るが、要するに「コンスタチューション」である。Constitutionと云

ふ字は「組立て」と云ふことである。つまり如何に其國を如何に其工場を如何に其學校を組立てべきかと云ふ、根本の原則を名づけて「コンスタチューション」と云ふ。Constitutionとは「一緒」Associationは一成ると云ふ意味で、如何にこれが一緒に成立するかと云ふ大體の骨組を定めたものである。專制國は專制と云ふ一つの憲法を有つ、意思はすべて主權者が決定する。原則としては國民には意思決定の權限を認めないと云ふ、これも一つの定め方。一つのコンスタチューションである。其國民の参加を段々多くして行くことが先づ今までの憲法史の發達である。其の發達の跡を研究するものを「憲法史」Constitutional Historyと云ふ、國の組み立ての歴史である。

國家意思の自決と國民の参加。其二、行政の事

第二は國家の意思は如何に國民をしてこれに参加せしめても、それは國民の意思ではない國家の意思である。唯だ其意思の決定に國民を参加せしむるだけで、決定した意思は「國家の意思」Statutory Willである。日本なら日本の國の意思、英吉利なら英吉利の國の意思である、それは自決的のものである。自決的のものでなければならぬのである。國家の意思は自決的でなければならぬと云ふこと、國家の意思決定には成べく國民を参加せしむ可しと云ふことは一寸矛盾して

居るやうに見へる。人民が多勢たかつてワー／＼やつて定めた事は國家が自決したのではない、人民の輿論にあらざる愚論に餘儀なくされて決定した意思である。そんなものは他人決定の意思であつて自己決定の意思ではない、さう云ふ場合も随分ある。殊に革命などの場合にはそれがあつて、國家自から革命しようと思はないのに、人民がワー／＼と云つて終に革命をしてしまつた、後でア、飛でもない事をしたと云つてもモウ返らないやうな事はある。乍併個人の意思に就いてもさうである。自分は意思を有つて居るつもりであるけれども、言葉巧みに人に説き聞かされると、フラ／＼と迷つてツイ賄賂を取つてしまつた、あとで我に返つてあツしまつたと突つ返しても、モウ一遍取つたのだから裁判所では之を有罪と認める。嘘を吐くつもりでなくてもツイフラ／＼と事情に餘儀なくされて嘘を吐いてしまつた、と云ふやうな場合もやはり意思の發動である。全然止めてしまふのではないけれども、意思を正しく發動しないで他所へ發動せしめたのである。婦人が誘惑されるとか、節操を破られると云ふやうな事でも、破られた時は確に自分が破つたのである。自分に全く意思がなくして節操を破るやうな事は殆どあり得ない。悪い男子が誘惑したと云ふもやはり自分が誘惑されたものである、當人に全く罪が無いのではない。本當に意思を有つて居れば、そんな事は先以てある氣遣ひはない。それは自分の本當の意思が發動し

たのでなくして横へ走つたのであらう。國家にもさう云ふ事はある、乍併個人の意思は合議の上で定めるものでなく大體自分で定める。但しこれが一軒の家を成して居ると家の意思は夫婦が相談して定める親子が相談して定める。是は成べくやはり合議が良い合議で決定するが宜しいとなつて居る。然し純個人としての行動は相談で定めるものではない。どんな良い友達でも、總ての場合に忠告を與へると限りはしない。否、人の忠告を聴いて意思を決定するやうなそんな薄弱な意思の者は駄目である、最後の決定者は自分である。どんなに智慧のある人の云ふ事を聴いたつて、結局自分のすることは自分が決定した意思によるのでなければならぬ。國家、國家其ものは一體は何も意思を有つものではない。作られた人格だから、生きて居る誰人かの頭で決定される意思である。其だからこれには多勢が參加するが良いのである。若し國家が我々個人と同じに生きて居るものであり、心理的の働きをするものであるならば、他人が之れに口を入れることは意思の自決と矛盾する。其點に於ては國家意思の決定は全然違ふ、國家の意思は誰人かの心に宿る意思である。國家の主なる當路者、大統領とか總理大臣とか、やはり人である國家其ものではない。國家の元首であるか國家の大官であるか國家の當路者であるので「國家の」である。國家其ものではない。昔は主權者を國家其ものだと考へたこともあるが、今日はサウ考へる人は殆ど

ない。又た事實さうではない。誰人かの心に於て決定される意思であるから其れは個人意思である。其の個人の意思が直ぐに國家の意思を決定すると誤りのない場合もあるが、誤りのある場合もある。だから成べくは多數の苟も國民になつて居る者の意思をそれに参加せしめて萬全を期するのである。國家と云ふ人格は大體個人を包含して出来た人格であるから、其の意思も成たけ全人格を包含した意思でありたいのである。であるから國家意思の決定に人民が參與するのは決して國家意思の自決性を害するものではない。其の代りに決定した國家の意思は自決的に發動しなければならぬ。若し其を妨げれば、其こそ今日の労働者よりもモツとひどく他人決定的にしてしまふ事となるのである。決定した意思は自決的に自己の力を以つて發動するのでなければならぬ。國家が一たび定めた意思を自決的に發動せしむる行爲は即ち行政である。普通の解釋では行政とは人民を取扱ふ事、上から下に臨む事、人民を治めること斯う説いて居る。幸ひに日本の字は「行政」と云ふ大變に良い字を使つて居る。誰が考へたか知らないが此の位良い字はちよつと考へ附かない。政を行ふ國家が自から行ふのである。「政」と云ふ日本の言葉も大變適切な言葉である。西洋の Government と云ふ言葉よりズツと宜しい。西洋の「ガヴァーン」Govern と云ふのは人を抑へつけることである。「ガヴァーン」すると云ふのは支配する抑へつける意味であ

國家意思發動の機關

る。「まつりごと」は「言海」には「奉事の義、君命を受けて其職に仕へ奉る意を元とす、延べて「マツロフ」(服従)と云ふも是なり。祭るも神を齋ひ奉る意なり」とあつて英語の「アドミニスター」と略ぼ同じことである。抑へつけると云ふことは事實上やつたことはいくらもあるけれども、成たけさう云ふ事は考へたくない云ひたくないと云ふ傾向が餘程あつた。言葉の意味は政を行ふ國家自から行ふのであつて、人を抑へつけるとか人を治めるとか人をどうとかする」と云ふことは、其の手段として當然附いて来るが、其れは目的ではない。國家自から一つの人格者、自決的の人格者、誰れ人にも掣肘せられない人格者として行ふことを云ふのである。一たび決定した意思を自分の存在の爲めに自己人格の發展向上の爲めに發動するのである。

國家が其の意思を發動する即ち行政をする行爲は、國家自からがやるのでなく夫々の機關にやらせる、これが國家機關、行政機關である。唯だ行政のみの機關ではない國家機關であるけれども、其のする事は即ち行政であるから之れを行政機關と云ひ或は行政廳と云ふ。一體行政廳は行政廳ばかりではない國家廳である、石川縣なら石川縣と云ふのは決して石川縣の行政はか

りの廳ではなく、石川縣と云ふ所に於ける國家の仕事を引き受けてやるところである。けれども國家のやる事は行政であるから行政廳と云つて差支へはない。行政とは國家の意思の發動の全部を含むことになつて居るからである。そこで國家が人民に對してやることは、いつでも國家の憲法——其の憲法が變ることにはある、段々時勢によつて變りもするが——兎に角與へられた時には、其の時の憲法によつて其の時の有らゆる行政の機關によつてやるのである。

人格の充實と國民人格の充實

其の行政即ち國家の意思の發動は何を其の對象として居るか。國家自己の意思の發動ではあるが、國家自身の意思の發動は國家を形つくつて居る各人民各個々人々に向ふのであつて、各個々人々が其對象となる、對象は個人の生活である。其對象に對して何をするかと云ふと、其個人の各人格を充實し、各人格生活を充實することによつて、國家自からの人格を充實するのである。此の點に於ては國家意思の發動も個人意思の發動も同じことである、何れも自分の人格を充實するのである。個人は個人だけでは已むことなく共同生活を作つて居るから、他人と合同するけれども、若し我々の力が無限にあり外界の自然が無限にあるならば、他の人格に何も關係なく自分

の人格だけで進んで行き得る（但し事實上之れは出来ない）。ところが國家と云ふ人格は其れ自らの存在が澤山の人格、國民全部の人格を以つて成つて居るものであるから、自分の人格の充實は國民の人格の充實を外にして期することは出来ない。それを離れては眞の人格の充實はない。一軒の家一つの家族も國家のやうな一體を成して居る。然し家としての生活もあるが家長としての生活もあつて、必ずしも家族の人格を充實しなくとも家長の人格を充實し得る。細君を非常に虐待して子供には不味い物を食はせて碌々教育をしないでも、親父さんだけは大變偉い詩人になつたとか軍人になつたとか大發明をしたと云ふ例は随分ある。家庭を無茶苦茶にして置き妻や子供を薄命に泣かして置いても随分立派な學者であり藝術家であつた例もある。藝術家などは其方が良い位に考へて居る人さへある。家の家格はそれが爲めに滅びるけれども個人の人格は必ずしも他の人格の充實完成を條件としない。これは世だ嫌やなことであるが其の位個人人格は極めて自己中心のものである。ところが國家と云ふ人格は全然其の反對で、國民の人格の完成をしたければ自己の人格の完成も何もないのである。

行政の第一義

行政は元來は政を行ふことで國家自己の意思の發動であるけれども、其の對象は國民であつて、其對象に對して何を一番主にもやるかと云ふと、國民の生活を充實し國民の人格を進めるところとする。そこで西洋の言葉で「アドミニストレーション」或は「フェルヴァルトング」と云ふやうに「世話をやく」と云ふことが主になつて來た。行政と云へば人民に對して命令をしたり監督したり指導することだと普通解釋するやうになつた。之は事實左様である。さうして居ることが即ち自から國家自身の生活を充實することになるから其れを専らやる。一軒の家長は家族の人格の充實ばかりで、自分を抛つて置いたら立派な子供は出來るかも知れぬが親父は駄目になつてしまふ。國家はさうではない。國家は子供や家族を十分充實してやれば、即ち自分が充實することになる。此の點が大いに違ふのである。

利己的行政は國を滅ぼす

然るに時としては國家が其の意思の發動を全く自分の爲めにのみやり、少しも國民の人格の充實を眼中に置かないこともある。此くの如き場合に國家は形に於ては生きて居るが實に於て死んでしまつて居ることがある。古へから國が亡びるには大抵其の徑路を取つて居る。だから長い

時期に涉つてそんな事は出來ない。どんな壓制的暴君と雖もどうしても國民の人格の發展には力を用ひなければ國家は續いて行かない。古へから亡んだ國家も澤山ある否大抵國家は亡んで居る、歴史上にズツと亡びないで續いた國家はそれこそ日本を除いて他は餘り見つかからない。唯だ法理上に於て國家は無限の生活を有つものとして居るだけであつて事實は亡んで居る。又た其の代り新しいものも始終起つて居る。其の亡んだ場合は大抵國家が極めて利己的になつて、全然個人と同じになつてしまつたか——勿論そればかりではない、外敵の爲めに亡ぼされた場合もあるけれども多くは自己のみに行政を集中してしまつたからである。若し社會をすつかり滅ぼして國家にしてしまつて、何でもカンでも國家にしてしまふと云ふ西洋で云ふ國家主義なるものが實現せられるとなれば、それは即ち國家が死滅する時である。國家主義ぐらゐ國家に取つて恐ろしい敵はない、まだ社會主義の方が良い。何故ならば社會主義は實行出來ない、國家主義は實行しようと思へば出來る、それだけ恐ろしい敵である。近頃於て最もよく此の道理を説明して居るものは佛蘭西である。佛蘭西の國家は十八世紀から十九世紀に互る僅かな間に何遍も死んだり生きたりして居る。佛蘭西と云ふ地理的の國は始終あつた、佛蘭西人は居つた、けれども佛蘭西の國家は何遍も生きたり死んだりした。今ある佛蘭西の國家だつて又た何時死ぬかも知れぬ。我

我日本人から云へば殆ど想像にも附かない事である。

人格充實の爲めの第一の任務

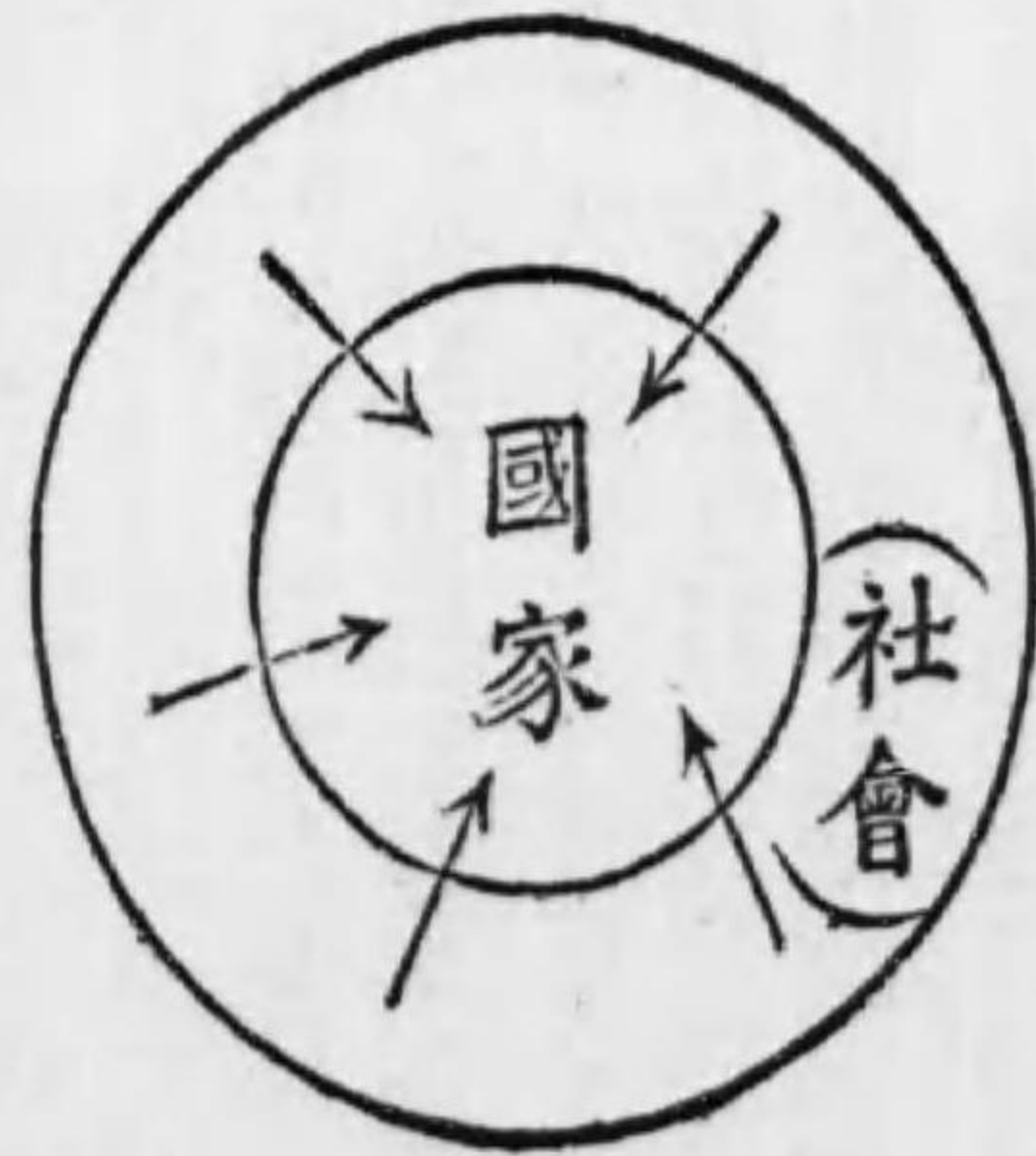
各人の人格を充實する爲めに國家の行政は色々な事をする、又しなければならぬ中に、何が一番先きに來る具體的の仕事かと云ふと、國民の經濟生活を充實することは是れである。所謂「衣食足つて禮節を知り倉庫實ちて榮辱を知る」である。個人の人格を完成し随つて國家の人格が完成するには個人の物質的生活を先づ安定しなければならぬ。安定したばかりではいけない物質生活が益々擴張して行くやうにより充實するやうにしなければいけない。そこで國家の仕事の一番先きに來る仕事は殖産興業と云ふ名前の下に行はれる場合もあるし、さう云ふ名前は執らなくとも兎に角國民の經濟生活の爲めに心配すること是れである。他の方面から云ふと國民をして成べく財の生活の壓迫から免れしめて、國家なる共同生活の中に居ることの長所を發揮せしめることは是である。人間は財の生活の壓迫から免れる爲めに共同生活は是非しなければならぬのであるが、其の生活の中でやはり財の生活は絶えず個人を壓迫して居るから、其れを成べく免れるやうに國家が心配してやる。さうして各個人をして其の人格生活を充實せしむるやうにして

やるのである。これはどんな壓制國どんな專制國でもやつて居る。支那では洪範の八政の第一の要目として食と貨、人民の食を足し人民の貨物を充實することを擧げて居るが、これは決して支那ばかりではない。支那はそれを大變早くから一つの政治學、政治哲學に形づくつて示しただけであるが、何處の國でもそれをやつて居る。

社會に於ける非人格性

ところが國家が其仕事を始めると直ぐに之を妨礙し、之れに對抗するもの、國家をして不本意なる事、國家の本質に合はない事をやらせるやうな大きな力が起つて來る。個人が自分は悪い事をするつもりでなく賄賂を取らうなどは思つて居ないけれども、意思がフラ／＼ツとして或る錯覺から賄賂を取つてしまふが如く、國家は自身の本質其の存在から云へば、國民の人格の充實完成が何より望ましい事であつて、其第一前提として經濟生活の充實、財の生活の壓迫から免れしめるやうにする爲めに、主力を注いでやつて行く實際又やつて居る。其のやつて居る中にそこに妨礙が起つて來て横道へ引つ張られることが起つて來る。其れは我々の共同生活に於ける非人格性の力是れである。社會が國家に對抗するやうに見えるのは實は社會が國家に對抗するの

ではない。國家の外に而して社會の中にさう云ふ對抗者があるのである。之れを判り易く圖に描いて見よう。



此の大きい方の圓で現はしたものが人間の共同生活即ち社會である。其の中の最も良いところを國家が占めて居る之を小さい方の圓で現はして置く。國家が非常な力を以つて發達して行く時には周圍から妨礙が起らない(上圖)。唯だ時あつてか此國家に對して妨礙が起る。其の妨礙は必ず國家から見れば外來のものである、外から來るものであつて内在的のものではない。何

故ならば國家其のものは自己人格の充實を國民人格の充實によつて實現するものであるから其の中に矛盾はありやうがない。矛盾は外から來る外來的の色々の槍が入つて來る即ち下圖の如くである。其の入つて來るものは飛でもない所から飛び込んでやつて來るのでなく、やはり人類の共同生活の中から起つて來る。社會主義と云ふ時の「社會」は——今日では其の意味では無論ないけれども——或る場合には其の國家以外にあつて國家へ飛込む力を稱して云つたことがある、國家に對立して國家に槍を向けて行くところのものを社會と見る、其の社會を本位とする主義と云ふ意味で「ソシアリズム」の Socialism と言つたこともある。其使ひ方は今日でも多少跡を遺して居る。即ち社會と國家とは衝突するものであるとか、兩者は到底兩立し得ないものであるとか云ふやうに考へるのは其の遺物である。國家に對して外から槍を入れて來る之を社會と名づける是れは誤りである。社會は國家も國家以外のものも凡て共同生活を包括した全體である。國家以外のものを社會と云ふのは誤りで、之れは「國家以外の共同生活」と名づく可きである。ソコで共同生活の中には一方に國家他方には之れに妨礙を與へ攻撃を加へる力との二つがあるのである。其妨礙を與ふるものは他のものではない、個人生活に存すると同じものが共同生活に於て繰返されて居るのである。即ち個人に於ては人格性と非人格性(或は自然性)とが互に相

衝突して居ることを前に説明した。共同生活に於ても同じで人格性に對して非人格性が妨礙を爲すのである。社會に於ける人格性は即ち國家である。其外から來る妨礙は非人格性、自然性である。人格が完成しよう完成しようとするのを抑へて、後と戻りをさせよう其の進歩を後らせようとする非人格性が社會にある。其れが時としては著しく國家の内に入つてしまつて、國家の要部は外來の力の爲めに占められることがある。佛蘭西から英吉利へノルマン人が攻め込んで來て英吉利の要部をノルマン人が取つてしまつた、其の爲めに英吉利の言葉の中にはノルマン人の言葉が大分ある英吉利の風俗習慣の中にもノルマン風が入つた。英吉利は亡びはしないけれども元の純粹の英吉利でなくノルマン化した英吉利になつてしまつた。或る特定の國家に外から入り來る力が非常に蔓こつて、其の國家の本來の面目を著しく或は全く蔽ふてしまふ場合もあるのである。

非國家的の力

其の外來の非人格性は何と名を附けるべきか、まだ定まつた名稱はない。社會主義はそれを「階級關係」 Klassenverhältnis と名づけて居る。階級と云ふ形になつて外來して來る場合には其

でも宜しい。又た之れを漠然と社會關係と云ひ、或は主として經濟上に起ることであるから經濟關係とも稱することがある。私は「非國家的」 Aussenstaatlich の力若くは「反國家的」 Gegenstaatlich の力と云へば宜いと思ふ。日本には「非國民」と云ふ言葉がある、何か國に對して忠實でないことをやればあれは非國民だと云ふ。其言葉が大變に適切だらうと思ふ。非國民とは國民ではないのではない、國民であるから非國民と云ふのである。英吉利人が日本の徴兵を免れる爲めに指を一本切つたつてこれは非國民的行爲とは云はない。日本の國民が指を切つたり眼の中に砂を抛り込んで近眼を装ふて日本の徴兵を免れようとするときは非國民的行爲となる。國民であるから非國民である、國民にして而して國民らしからざる者と云ふ意味である。非國家的の力も左様である、國家に起つて來る力であるが國家其のもの、存在を害し或は脅かし之れに反する力であるから、之れを非國家的の力と云ふのが適切と思ふ。

經濟上の利害關係に現はる

其れは大抵經濟上の利害關係の形を取る。前に申した民業の蹂躪壓迫と云ふやうな口實をよく看板にして出て來るものである。然し時あつてか政治上の力となつて出て來ることもあり政黨

の形に於て出て来ることもあり、或は労働運動の形に出て来ることもある。時によつて色々な形を取るが非國家的であることは共通である。國家の存在の要義は國家の内に起つて来る——國家の外から出て来て而して國家の内に頭を擡げて来る此の非國家的の力を排除して、全然之れを根絶することを要求する。其れが國家を純粹なる國家、理想の國家にする所以であるが、今日何れの國家と雖も其れは十分出来て居ない。多い少いの違ひこそあれ非國家的の力が中からポツ／＼と出て来て、國家の發達は其爲めに或は害せられ或は脅やかされて居る。社會政策は先づ此處に向ふ。此の非國家的の力を取去ることを圖る。根本的に取去ることは今日まだ中々容易に考へられない。或は考へるだけは出来るけれども實行し得るやうに考へられない。仕方がないから部分的にやつて居る。姑息ではあるが部分的にやる外はない、社會政策の狙ふ所はそこである。

所有が非國家的の力となる

非國家的の力はなぜ經濟生活の上に一番能く明かに分つて来るかと云ふと、前申す通り經濟生活には其活動の爲めに利己心が無ければならぬ。利己心とは各人が外界の自然を其の惰眠から打ち破つて人間の用に立つやうにさせようと云ふ意思である。其の意思が強いほど利己心が強いこ

とになる。ところが今日の文明社會に於て外界の自然を支配するは唯だ外界の自然を支配するのみでなく、外界の自然の支配を通じて他の人格を支配することになる。労働する外に食へて行く途がない者財産の無い者は、他人の財産を借りるからそれが爲めに人格を抑へられる。抑へる方の人から云へば他の人格を抑へ得るのは自分が物を有つて居るからである。或人が一つの地所を有つて居る之れを貸して呉れと云つて来る中々貸してやらない。さうすると地代を餘計拂つても宜いからどうか貸して呉れと云つて来る。地代を少し増したぐらゐでは貸さない中々鼻息が荒いから、借りた方では色々な事を云つて頭を下げて来て到頭借りる。さて借りて見ると地借である一方は地主様である。地代を拂つて借りて居るのだから本來は對等である譯だけれども、地所を借りて居るが爲めに其の人に對しては社會上一目置かなければならぬ。今日の工業制度に於て労働者を資本主が雇つて働かせる場合には、前にも述べた通り意思までも悉く資本主から與へる。資本家が自分と同じ人格を有する國民で、國家の眼から見れば全く同じ平等忠良なる臣民である労働者に對して、俺はお前の雇主であるぞと云ふ横柄な大きな面の出来るのは何であるか、其人が物を有つて居るからである。外界自然の物を支配して居り其の支配を通じて其の物が無ければ働けない人を支配することになる。人間は物の支配を受けることは段々免れて來た

けれども、物を通じて他の人間の支配を受けるやうになる、即ち支配階級、被支配階級の關係が起つて来る。

所有慾、支配慾、權力慾

個人人格の充實の爲には外界自然の物を支配し、外界自然の物を惰眠から覺まして人間の用の爲に働かしめるを要する。其爲めには外界自然の物を支配し之れを完全に自分の権内に置かねばならぬ。人間は永い間、外界の自然を支配する必要に迫られ、實に目ざましい工夫をしたと同時に、其爲めに一種の支配根性が人類に永く植ゑられた。自分以外の物を支配しよう外界の自然を支配しようとした念が、すべて自分以外の物を支配しようとする事になつて、支配心が大變強くなつた。之れを權力慾と云ふ。權力慾とは支配心の強い形である。一體物を有ちさへすれば宜いのであるから物慾、財慾だけで人格の満足は得られるのであるけれども、物慾を充たす爲めにはどうしても支配しなければならぬから支配慾がくつ附いて来る。支配慾はやがて權力慾になる。なぜ權力慾になるかと云ふと所有者は物の支配を通じて人を支配するやうになる。他の人を支配することは即ち權力關係である。同じ支配する中でも成たけ良いものを支配したい、

成たけ良いものを自分の權力の下に置きたいと云ふ念が強くなつて来る。何が一番人間の支配慾を充たすかと云へば、有りと有らゆる物の中一番尊い産物、神の造れる物の中で最も尊いものを支配するのが權力慾を一番多く充たす所以である。神が造つた一番尊い物は何であるか其れは自分と同じ人間である。自分と同じ人間を支配する是れ程支配慾を満足せしむることは無い。馬や犬や土地を澤山有つて居るより人間たる僕婢を澤山有つて居ることが、其の人の偉さを示す所以と考へられた時代がある。金持は必要もないのに人を餘計使ひたがる。高い給金を出して僕婢を雇つてそれに金モールなどを着せて馬車の前に並べて揚々と威張つて歩く。貴人だつて一人で歩いて宜いのだけれども何だか僕が附いて居ないと貴人らしく金持らしくない。そこで用も無いのにゾロ／＼人を引つ張つて歩く。朝鮮へ行つて見ると——此の頃はどうか知らぬ、私の行つたのは二十年ばかり前であるが——地方の微小なる官吏と雖も、苟も官吏であると、其の人は必ず從者の三人や五人は伴ねなければならぬ。私は當時の朝鮮政府の旅行免狀を貰つて方々の郡衙を訪ねた、供を連れなないで一人でトボ／＼鞆を提げて行つたが向ふで信用しないところに向ふの役人が答禮の爲めに私の宿屋へやつて来る時分には、四人昇ぎの駕籠に乗つてお供の二人三人も連れてやはり昔のやうに「下に居れ下に居れ」と云つてやつて来る。日本でも昔はさうであつた

小さな一万石位の大名家でも何人かのお供を連れて「下に居れ」と云つて通る。それで大變偉さうなつもりで居つた又た人民もさう云ふ人が来るとこれは偉い人だと思つた。それが今日は段々無くなつてしまつた。然し歩く時には従者は連れないうがやはり平生自分の家には澤山人を雇つて居ることが、其の人の権力慾を充たす所以であることは餘り變らないようである。

産業上の支配に對する反抗

一體産業を經營して行くに必ずしも人を支配しなければならぬ事ばかりではない。尤も人を支配しなければならぬこともある。例へば工場を經營するには労働者に命令を與へ労働者は其の命令に服従して呉れるのでなければ事業がうまく行かない場合もある。けれども其の必要以上に或は其の必要の全然ないところに無闇に人を支配したり、嚴重な作業規程などを拵へて現業の必要より遙かに多く労働者をウンと抑へて、お前達は雇はれ人だ俺は雇ひ主であるぞと所謂威嚴を示すことを大分やる。抑々労働問題、労働紛争の始めは之れに反抗して起つたのである。賃銀を上げて呉れとか時間を短かくして呉れとかは十七世紀から後に起つて來たことである。其れより二百年前の十四世紀から十五世紀にかけて歐羅巴では労働争議が段々起つて來た。其の時分の

係争の問題は何かと云ふと雇ひ主が威張つた顔をするからいけないと云ふような待遇の問題待遇の争議である。労働者が覺醒して來ると今までは唯々諸々としてやつて居つたけれども、一體そんな譯のものではない、成程自分は雇はれて賃銀を貰ふけれども雇ふ方の人も自分が働いてやらなければ事業が成立たない利益が上がない、必竟兩爲めぢやないかこつちばかり有難うございますと云ふ譯はないと云ふように、段々覺めて來て反抗するようになつた。

滑稽な支配慾

ところが社會には他の人を假令一分でも三分でも宜いから、自分の権力の下に置きたいと云ふ念は餘程深く泌み渡つて居る。最も滑稽な例を云へば靴一つ位持つて居る人が自分でそれを持つてヒヨツと汽車に乗れば宜いのに、赤帽が居ると「赤帽ツ」と呼んでそれを持たして五錢ばかりやつてチヨツと偉さうな顔をする。たつた一分間か二分間赤帽を使つて俺はえらいぞ俺は唯の貧民ぢやないぞと自己満足をする。本當に重たくて仕様がなくて頼むならばそれは當然であるけれども、小さな靴一つ位何でもない自分で持てる唯だ皆がやるからやはりやる。これは極く無意識に殆ど習慣的になつて居るがさう云ふ事は澤山ある。殊に日本の商店、銀行、會社などの事務の

擧がらないのは其點が餘程關係がある。チョツとした書類などを持って行くつまらない用事でも「子供ツ子供ツ」と給仕を呼んで居る、給仕はあつちに行つたりこつちに行つたり始終やつて居なければならぬ。そんな事はチエツク・システムか何かで飛んで行くやうにすれば宜いのにやはり一々「子供ツ子供ツ」と呼んで居る。要するに人を使つて見たい念は餘程強く人間の間に擴がつて居る。

反抗漸く加はる

一方又た之れに對する反抗も餘程強くなつて來て居る。所謂労働問題の中にはそれが大分入つて居る今でも大分入つて居る。同じ事でも少しやり力を變へさへすれば必ずしも專業の利益を削ぐ必要もなくして解ける事でもそれが爲めに解けない。例へば此の間の神戸の労働争議に労働者の代表者が川崎或は三菱の當局者に會ひたいと云つた、ところがお前達には何とか會と云ふ名義では會はないと拒絶した。それから東京まで出て來て、何某專務取締役に會ひたいと云つたらこれも何とか云つて會はない。又は足尾の労働者の代表者が東京へ出て來て主人に會ひたいと云つたら、これもあつちへ行つたりこつちへ行つたりして逃げて居つて會はない。それは人を支配

しようと思ふ考へが知らず識らず累して居るのである。會つたからとて労働者が噛みつく譯でも何でも無い話を聞いていけなければいけないと云へば宜い。或は直ぐ答をしなくともよく考へて置かうと云つても宜い。兎に角會つたつて宜い會へばそれは大變感じが違ふ。それを會ふと何だか威嚴を損するやうに考へて社長などは奥深く控へて居なくてはいけない。労働者や下級の者は追つ拂つてしまはなければいけないと云ふ念が餘程ある。それが日本の所謂労働争議の中にはまだ中々くつ付いて居る。まア會つて見たら宜い然る後に喧嘩になるならばこれはどうも仕方がない、喧嘩ならば會つても居られないけれども喧嘩になるかならないか其の前に會つて見たら宜い。さうすれば存外早く解決するかも知れぬ、それを會はないと撥ねつけるものだから労働者の方では段々不平が高まつて來て妙な感じを持つ、そこへ煽動者が入つて來るとワーツとやり出すと云ふやうなことになる。そればかりでは無論ないけれどもそんな事が随分ある。これは決して日本ばかりではない英吉利にだつてあるけれどもそれは餘程少い。英吉利人だつてさう虚心坦懐労働者を全然自分と平等に視て居りはしない、けれども看做さざるを得ないやうになつて居る少くとも形の上で左様するやうになつて居る。形の上でも宜い其の内には段々實が備はつて來る。

人格の尊貴を損ず

権力慾の發現は個人の人格の尊貴を毀つけるものである。人格が發展するにはお互に尊重し合はなければならぬ。尊重するとは之れを認識することである。人格を人格として認めなければならぬ。人を人と見て人を道具と見ないと云ふことが先づ第一の必要である。人を人と見たとて其の取扱ひはさう大して違はないかも知れない。やはり今まで通り厭やな仕事もして貰はなければならぬかも知れない。急に労働者の苦痛を減らして樂に仕事の出来るやうにとは今日は出来ない相談である無理な注文である。けれども譯なく出来るだけの事はせねばならぬ。譯なく出来る事とは何かと云ふと人を人として尊重することである。ところが其れが中々行はれて居ない。行はれて居ないから其が國家生活の上に社會生活の上に、人格と人格の要求とを否認しようとする色々な力となつて現はれて来る。これが社會に於ける鬭争の原因となる。

「社會的」てふ考の發見と其意義

其の鬭争の當事者は今日では階級である。而して階級と云ふ考へに就いて最狭義の「社會的」

と云ふことが發見されたのである。此の發見は何時頃なされたかと云ふと十九世紀の始め千八百三十四年頃である。何處の國に於て發見されたかそれは佛蘭西である。それ迄は今日云ふ社會政策とか社會事業とか云ふ意味の「社會」と云ふ特別な限られた意味、即ち本篇の一番始めに述べた特別な或る深い意味を有つた「社會的」と云ふ考へはなかつたのである。何故其事を特に茲に述べるかと云ふと世の中には随分無茶苦茶な事を云ふ人がある。社會問題などは昔からあつた歐羅巴では希臘、羅馬の時分から社會問題があつた、否日本の徳川時代に社會問題があつた——徳川時代はまだ宜いが——足利時代に社會問題があつた、王朝時代に社會問題があつたなどと言ふ人がある——三浦周行博士の「國史上の社會問題」と云ふ本は多少其嫌がある——が其れは間違つて居る。其の時分にあつたのは其の時代の社會上の問題である今日謂ふ意味の社會問題では斷じてない。此の社會問題と云ふ關係に於て云ふ特別な「社會的」(獨逸語で Das soziale)の眞義は何であるか。一面から云へばそれ迄は世の中がそんなにセチ辛くなつて居なかつたのである。又たそれ程世の中が進んで居なかつたのであるが、其の特別な社會的と云ふことが見出されたのは前に描いた下圖の發見である(一一二六頁参照)。大きい圓の全體が人間の共同生活其の眞中に——必ずしも眞中とは限らない、横の方に行つて居るかも知れぬが一番良いところであ

るから眞中に置く——國家が大部分を占めて居る。其残れる部分を社會と云つたことがあるが、それは實は社會ではない此の全體が社會である。そこで此の全體の社會から國家を引いた残れる部分残部が特別な意味を有つて居る社會的「ダス・ソチアーレ」となる。英語では社會全體に關することも「ソーシアル」Socialと云ひ、今の特別な意味の社會的と云ふ事も「ソーシアル」Socialと云ふが、獨逸語ではそれを區別して使つて居る。社會全體に關するときは獨逸語では「社會」と云ふことを「ゲゼルシアフト」Gesellschaftと云ふ。之に「リツヒ」lichを附けると形容詞になる。そこで社會全體に關する時には「ゲゼルシアフトリツヒ」Gesellschaftlichと云ふ。社會問題、社會政策と云ふ時の特に限られたる社會と云ふ場合には「ゲゼルシアフトリツヒ」と云ふ字を使はない。英語のsocialを獨逸化した「ソチアーレ」Sozialeと云ふ字を使ふ。これは嚴密に區別して居る學問上ばかりでなく普通にも區別して居る。此の方が良い英語でもさう云ふ區別が附くと宜いと思ふ。尤も全く工夫がないではない。或る社會學者の如きは獨逸語の「ゲゼルシアフトリツヒ」に當る時には「ソーシアル」と云ふ字を使はないで「ソシエタル」Societalと云ひ、社會學と云ふ時には「ソシオロジー」Sociologyと云はないで「ソシエトロジー」Sociologyと云ふ。そんな變な字まで工夫して使ふ人もあるけれどもそれは一般ではない。獨逸では一

般にチャンと區別して居る事實又た違ふのである。社會全體に關する事は大體國家的である唯だ其の残りがあつた。其の残りは元とはホンの残り物として取扱つて宜かつたけれども、此れが段々國家に肉薄してボン／＼槍を放つやうになつて、逆も閉却して置けなくなつたので特に之れを「社會的」と云ふのである。これで本篇の最初に申した、今日云ふ社會問題、社會政策に於ける「社會」と云ふ語が特別な意味を有つて居ることが分るだらうと思ふ。

社會運動と階級運動

それは何から起つて來たかといふと社會運動から起つて來た。「社會運動」Social movementとは社會に關して起つて來る總ての運動を云ふのではない。社會に起つて來る總ての運動と云へば世の中の事總ての事皆さうである何の運動でも皆社會に起つて來る、然しそれは社會運動とは云はない。社會問題と云ふは總ての問題を指して云ふのではない。此く社會問題とは特に或る意味を有つものであることは實は私が説明しなくとも認められて居る。社會事業の講習會を開くと云へば、特に社會事業に興味を有つ人は社會事業とは社會に於けることを何でもカンでもゴタ／＼やる譯でない事は大體承知で居られるに相違ない。此の特別な意味に於ける社會的と云ふ考へは

社会運動から起つて来た、其れは千八百三十四十年頃にフランスに於てである。社会運動は必竟するに階級運動である、社会的と云ふことは階級と云ふ形に於て出来た。其階級は何であるかと云ふと段々申したところの他の人格を支配する者と、他人によつて自分の人格を支配せられて居る者これが別々の階級として分れて来た、即ち支配階級と被支配階級である。支配階級は必ずしも資本主に限るのではない、被支配階級は必ずしも労働者に限るのではないけれども、支配階級の中堅となつて居るものは資本主である。資本主と云ふことは必ずしも金を持つて居ることではない、唯だ資本を有つて居る人即ち資本主ではない。一體資本主と云ふ言葉は不適當である。資本を有つて居り資本を有つて居るが爲めに多數の人を労働者として雇ふ、他人を雇傭して之れを自分の事業に使ふ人が資本主である。多數の人を雇つて之れを自分の事業の爲めに使はせようとするには其の人を人格的に支配せねばならぬ。善いも悪いもない事實として支配せねばならぬ。だから「人格支配階級」と云ふのが一番適切である。それから労働者だつて働いて居る者が皆所謂労働問題の當事者たる労働者ではない。労働者の中で前に申した自己決定労働者でない他人決定労働者、即ち他人に雇はれて何をすべきかどうすべきかを、一々命令を受けて唯それを實行するに止まる雇傭労働者だけが問題になる。何故かと云ふと他人の意思を受けることは即ち自分の

人格を抑へられる、否抑々人格の據つて立つ根本たる意思の發現に於て既に制限せられるから、大變な束縛を被むつて居る。だから労働階級と云ふより寧ろ「人格束縛階級」或は「人格被支配階級」と云つた方が宜いのである。言葉が悪いからそんな言葉は度々は使はないが意味を明かにする爲めにはさう云つた方が宜い。

ブルジョアとプロレタリア

千八百三十年四十年頃に於てフランスでは、此の人格支配階級のことを「ブルジョアジー」 Bourgeoisie と云つた。一體ブルジョアとは市民都市の民と云ふことであつて、何も特別な意味はない。それを主として社会主義者が特別の意味に使つた。一番最初に特別の意味に使つたのはルイ・ブランと云ふ社会主義者で、其を獨逸の社会主義者殊に今日の社会黨の學祖たるカール・マルクスがフランスに居る時分に學んで来て、盛んに獨逸に輸入して振り撒いて今では世界中に擴まり日本でも此の頃は頻りに流行り出して来た。ブルジョアの語根の「ブルグ」 Bourge は、石垣で圍まれた城と云ふことである。昔の西洋の都市は皆城壁を繞らして其の内に市街がある。日本は殿様だけ城壁の内に居つて人民は外に居る、敵が攻めて来れば一番先きに人民が扉になつて之れを

防ぐ人民の堀が潰れてから石垣が衛る事になる。西洋では人民を石垣の内に入れて置いて人民と殿様が共同に防ぐ。此人民を内に入れて城壁を以つて圍んだのが「ブルグ」都市で、さう云ふ特別な殿様の保護の下に、城壁によつて繞らされて安全なる生活を送つて居る人々をブルチオアと呼んだのである。ところが其れが一つの特権になつてしまつてそれが爲めに地方の農民を蔑んで、ナンだ貴様等は百姓だ土百姓だと云ふやうに威張るやうになつた。其れが轉じて労働者に對して資本主たる人々を呼ぶ名前になつてしまつたのである。ブルチオアに對してブルチオアの爲めに人格を支配せられて居る人々をプロレタリア Proletariat と云ふ。これはプロレスと云ふ語から傳來して居る。「プロレス」Proles は子供と云ふ事でつまり子供を産む外に能のない人と云ふことである。日本では此頃之れを無産者と譯すが實は無産者ではない多産者である。一貧乏人の子澤山で、子供を産むことによつて國家に奉仕する人々である。殊に戦争を度々やる時には兵隊を澤山産んで呉れることは最も必要で是非さう云ふ専門家がなくてはならぬ。そこでプロレタリアと云ふ言葉も初めは必ずしも輕蔑した意味ではなかつた。けれども段々子供を澤山産んではどうしても生活が苦しくなるから他人に對して貧しい者である、そこで貧しい者と云ふ意味に使はれるやうになつたが、千八百三十四十年頃の佛蘭西では何も財産がなく唯だ勞働をする

事によつてのみ生きて行く、人々それが爲めには他人に雇はれなければならない、即ちブルチオアに雇はれなければならない人々のことを、プロレタリアと云ふやうになつた。そこで資本家對労働者と云ふことをブルチオア對プロレタリアと云ふ、他人に雇はれる爲めに人格の壓迫を被むる者をプロレタリアと云ひ、自分が物を有つて居る爲めに其の有つて居ると云ふことを以つて他人を雇つて、自分の財産の所有を通じて他人の人格を支配して居る人々をブルチオアと云ふのである。唯だ金がある丈けではブルチオアではない金はあつても人を雇はない者はブルチオアではない。此のブルチオアとプロレタリアが二つの階級として對抗することを千八百三十年、四十年頃にかけて佛蘭西で見出した。此の事實は英吉利及獨逸にもあつたけれども佛蘭西のやうに其の對抗が當時未だ甚だしくなかつた。佛蘭西に於ては段々甚だしくなつて來た。

支配關係の擴張

今日となつては苟も人智の發達した文明國では何處へ行つても事業は益々大きくなる。資本を餘計投する事業であればある程他の人格を支配することがより多くならなければならぬ。無用に支配するばかりでなく必要上他の人格を多く支配しなければならぬ。規模の小さい工業であれ

ば、労働者は一體これは何の爲にどうなるかを始めから終りまでズツと見通すことが出来て、自分が之れを拵へて此れが出来たと云ふ事が分るけれども、今日の大きい工業になつては分業が非常に發達して仕事細かく分れて來る爲めに、各個人の労働者のすることは一體何をして居るのか少しも眼には見えない。大きな軍艦を一艘拵へる一人の職工がコツ／＼板を叩いて居る、自分の叩いた板が何處にどうなつたか分らない、労働と労働の結果がまるで絶縁してしまつて譯の分らないことになつてしまつた、だから方向が附かない。如何に意思を働かせたくとも働かせる餘地がない。労働者は極く局部の事をやつて居る、全體を見通す計劃には労働者は全然與かることは出来ない、與かると云つたつて與かれない、夫々専門の難かしい科學の知識を有つて居る技師長、工場長、或は支配人がそれを知つて居るのみで、各人は可なり相當の労働者に至るまでも全體から云へばホンの僅かな部分に當るのみであつて、自分の意思を仕事の計劃の上に働かせる餘地も何も無くなつてしまつた。各人は皆唯だホンの小さな部分に當るのであるから、皆が絶対に命令に服従して呉れるのでないと、一つ狂つた日には全體が無茶苦茶になつてしまふ。非常に緻密な非常に複雑な仕事をするのであるから作業規定が嚴密に行はれるのでなければならぬ。他の言葉で云へば徹底的に労働者の人格を支配するのでなければ仕事が出来ない。賃銀が少いとか

待遇が悪いとかは之れを具體的に現はしたに過ぎない。無論賃銀の少い無めに生活が脅かされることも重大な問題には相違ないけれども、抑々根本に於て此の解け難き矛盾があるが爲めに、問題が重要になるのである。

労働問題は労働者のみの問題に非ず

日本に於て労働争議と云ふも、工場に雇はれて居る労働者は日本國民全體から云へばホンの小部分である。然るに労働問題が日本に於て段々社會問題の中心となると云ふのは何故であるか。労働者のみの問題として労働問題が重大なのではない、此問題は國家の人格の充實に最も重大な關係を有するからである。其の事自身のみに興味があるのではない更に重大な意味を有つ。人類の共同生活を脅やかす力を一つの具體的の例として現はすから重大な意義を有つのである。

社會政策の意義と社會運動の考究

社會政策の取扱ふものは労働問題ばかりではない。否労働問題の取扱ひは社會政策から云へば唯だ一つの任務たるに過ぎない。社會政策は國家を脅やかす健全なる社會を脅やかす力が段

々殖えて来ることを認めて之れを今から取り除かうと云ふのである、其取り除きに色々な道がある。各個人の働きによつても團體の力によつても除ける其他色々な働きによつて除けるが、國家は其中最大の責任者として其實行に任ずるのである。要するに社會が其れ自からの爲めに其れ自からの健全なる發達の爲めにする事が社會政策である。故に社會政策に定義を下して云へば、社會政策とは社會が社會の爲めに社會の力を以つて行ふ政策である。社會が社會の爲めにする事は、今日は國家が國家の爲めにする事と云ふ形に於て現はれて居るから「政策」と云ふのである。國家は自分の存続の爲めに行政をやる、其の行政に於て今云つた特別の社會的問題の取扱ひに特に重きを置く。今まで考へに置かなかつた其の社會的と云ふことを考へる中心に置いて有らゆる行政をやる、それが社會政策である。今までの政策は所謂行政であつて、政を行ふ國家自からが國家としての存続の爲めにやる事であつた。それが爲めには人民を取扱つて色々なことをして居つた、けれども特に國家以外から来る力に着眼することなくやつて居つた。之れに反し特に階級に分れて對立するものがある、其の對立が人類の共同生活を脅やかすことを認めて其の根柢を取り除かうと云ふ意思——特別なる社會的と云ふことを解決する意思を以つて行政をする、其意思の發動として行政をやるといふこと之れが即ち社會政策である。社會運動は國家の

方からでなく、當事者——主として人格を壓迫せられ人格を束縛せられる當事者が、其の壓迫を取り其の束縛を除く爲めにする運動を云ふ。従つて社會運動と社會政策とは兩方なくはいけない。國家が社會政策を行つても當事者が少しも自覺しない發憤しないのでつ迄も惰眠を貪つて居つては何んにもならない。當人が目ざめて運動をするのでなければならぬ。労働者が目ざめて社會運動をするやうにならなければ國家の社會政策は甚だ力のないものである。此の頃になつて日本で社會局を拵へ社會課を置くことになつたのは此の如しと雖も洵に善い事である。乍去當事者の運動が有力に起るのでなければ國家や自治體が社會政策を行ふのは殆んど無意味となる。社會運動が起つて來て之れと對抗して、一方に社會運動と他方に社會政策と相呼應して、初めて社會問題の解決が付き得るのである。従つて一切の社會政策的研究は個々の施設や機關の運用の考察に向ふ前に先づ社會運動に向はねばならぬ。而して今日に於ける社會運動のチアムピオンたり代表者たり典型たるものは労働運動就中現實の労働争議である。社會運動の理論的根柢を粗ぼ尋討し終つた後に、直ちに來る可きものは労働争議の考察である。第二篇に於て其の意義と種類とに就て略述して此要求に應ずること、しよう。

第二篇 労働争議の意義及種類

階級闘争としての労働争議

今日の社会運動には種々あるが其第一に來る可きものは労働争議である。何となれば今日の労働争議は決して單に労働雇傭の條件に就て其當事者が相争ふ經濟的争議たるに止るものでなく、一の大なる紛争の先驅又た代表者として重大なる意義を有するものである。其の大なる紛争とは即ち階級闘争是れである。今日の労働争議は一の賣買懸引争議たるが如き輕易のものでなく、實に階級闘争の先驅として又た其の代表者として意味を有つものである。而して是れが今日の労働争議と昔の労働争議との間に存する根本的差違であるのである。されば今日に於て社会運動と云へば、先第一に階級闘争としての労働争議を考慮に置かなければならぬのである。

徒 弟 制 度

労働者が雇主に對して争ふ事が明かに一つの運動として認む可きは、西洋に於ては既に十四世紀の頃に在る。然し其れは今日の労働争議とは根本的に差違のあるものである。其頃は西洋に於ける工業の制度は日本に於けると同じく皆徒弟制度を取つて居た。徒弟制度とは今日の如き雇傭

關係に基く労働關係とは全く異なる所謂温情主義、主従關係に依る労働關係で、權利義務の對等關係ではない。働く人は賃金を得る爲にするのではない、雇ふ人も賃銀を與へればそれで宜しい、自分の義務は完了したと云ふ考へで雇ふのではない、兩者の關係は一種の教育關係である。「徒弟」と云ふことは英語で「アツブレントリース」獨逸語で「レアリンク」佛蘭西語で「アツプランチース」と云ふ。何れも「學ぶ人」と云ふ意の語である。今日の労働者は自分の生計を立てる爲めに働いて賃金を取るのであるが、十四世紀から十八世紀否十九世紀の初めにまで及ぶ労働者は、其大多數は決して左様でなく主として學ぶ人である。一定の業を學ぶ其爲めに英吉利に於ては七年大陸に於ては三年乃至四年、所謂年季（英語アツブレレンチスツツ獨逸語レーレ佛語アブランチサーチ）を勤める。雇ふ人は此れに業を仕込んでやる、業を仕込みつゝ無論働かして自分の用はさせるけれども仕込んでやる事が第一であつて、多くは雇主の所に寄留し雇主から衣食を給せられ家族の一員として取扱はれて居るものである。大陸に於ては三年なり四年なり英吉利に於ては一樣に七年の年季を終ると、獨立の「親方」（英語でマスター獨逸語でマイステル佛蘭西語でメートル）になる。最早誰人にも雇はれないで自分で責任者となり權利者となつて、一般の註文を引受けて其の業を營む。唯だ其の親方となる修養の手段として他人に雇はれるのである。であ

るから此れは主従關係、温情關係に基くものである、否師弟關係たると共に親子の關係である、一種の家族關係である。

温情主義は時代錯誤

今日所謂労働問題に對して日本固有の温情主義、主従關係を以つて臨んだら宜からうとか云つて居る人々は、日本あるを知つて世界あるを知らない否日本あるをも十分知らない人である。所謂主従關係所謂温情主義は決して日本獨特の長所ではない寧ろ日本の短所である。日本が其れだけ發達が遅れて居る證左である。西洋でも昔は皆左様であつたのである何處の國でも左様であつた。今日の文明の工業は一度は而かも約そ三百年ばかりの間は、此年季制度の徒弟關係を経て初めて成上つたものであつて、西洋に於ては此れが既に十分發達して、今日では徒弟制度は殆ど無くなつてしまつた絶無ではないが殆ど無くなつてしまつた。ところが日本ではまだ、其の殘物が可なり澤山ある、其れと同時に新しい文明式の労働關係も亦た起りつゝある。其の新しい労働關係を舊い徒弟制度を以つて律しようとして主従關係、温情關係と云ふやうなことを云ふ。此れは大變な間違ひで、三味線の撥でピアノを叩かんとするが如きものである。三味線の撥は三

味線を弾くに用ふべしピアノを曲くに用ゐるのは愚な話である。

今日の勞働争議

今日の勞働争議なるものは、此徒弟制度が大體に於て無くなつて、一切の勞働關係が所謂雇傭關係になつてから起つたことである。雇傭關係は一の契約關係である對等の關係である。雇ふ人も雇はれる人も法律の眼の前に於ては、全然平等なる義務を有し權利を持つ當事者である。其の勞働の關係は双方の隔意なき自由なる拘束せられざる意思の合致に依つて、初めて成立するものとして法律上取扱つて居るのである。若し此の原則が其の儘に完全に行はれるものならば、今日云のふところの勞働争議の或る部分否大部分は無くなつてしまふ可き筈である。今日の勞働争議の大部分は、法律の認めたる雇傭關係、契約關係、對等關係が事實上は行はれぬ名實相反するから來るのである。

勞働保護の三要點

其相反する點の重なるものに三つある。第一に最も肝要なるは賃銀、約束した賃銀が約束した

通りに拂渡されない、又は拂渡すにしても其時期なり方法なりに於いて契約の趣意に相合しない事がある。そこで社會政策の第一の仕事として賃銀の保護が必要となる。勞働者が其權利として契約上保證せられて居る賃銀が色々な仕組の爲めに削られて居る。例へば種々な名義の下に罰金を課する、遅刻した者は一日の賃銀の中から一割を引くとか、或は何か粗忽をした者は其の粗忽に對する賠償を賃銀の中から差引かれるとか云ふ事がある。此れには今日の契約の原則から云つても許されて居ない事が多い。此點は民法の問題になるのであるが、今まで日本の法律學者はさう云ふ事には一向注意して呉れなかつた。財産保護の爲めには非常に研究して十錢二十錢を争ふこと迄も、洵に複雑なる法理論が講ぜられて居る有難い次第である。ところが何も財産無く唯だ勞働するに依つて生活する人の受くる唯一の命の綱である賃銀に對して屢々侵害が行はれる。社會改良とか社會政策を行ふとか云ふ考は別として、純然たる法理の上から云つても甚だ間違つたことが行はれて居る。我邦では此事を法理上厳正に論じた人は殆ど無かつたが、最近に至つて「法學協會雜誌」(大正十年九月號)に東京帝國大學の末弘嚴太郎博士が「賃銀の保護」と云ふ論文を書いて居られる。是は洵に結構なことであるが、實は耻かしい事でそんな事はモウ二十年も前に法律學者が取扱つて居らねばならぬ筈である。其を取扱つて居らなかつたのは財産法律の研

究に忙しく、勞働法律の研究に非常に情けて居つたが爲と云はれても辯解の辭はないのである。
 第二は勞働力の保護である。勞働者の有つものは勞働力しか無い其他に何も無いと云ふのが原則である。其の勞働力が工場の様々の設備の爲めに害される、非常に長い時間働くとか、餘り不衛生な室の内に於て働くとか云ふことは、親から生み付けられ天來に有つて居る身體の力、精神の力を段々毀損して行く、勞働者の唯一の財源である勞働力が害せられる。之を保護するは今日の契約の原則の下に於ても必ずなされねばならぬ事である。

第三は勞働者の人格の保護である。勞働者の人格が雇傭關係を結ぶことに依つて害せられることが澤山ある。殊に幼年勞働者、婦人勞働者になると甚だしい侵害を被むつて居る事實がある。之れを保護することも決して社會政策とか新しい社會改良とか云ふ意味でなくとも、今までの法理の上から云つても是非せねばならぬ事である。

勞働契約の特質

何故に普通の契約關係であるに拘らず勞働者と雇ひ主との關係が、左様な格段な三つの保護を要するやうな有様になつて居るか云ふと、勞働契約は他の契約とは全然違つた點を有つて居る。

からである。等しく權利義務の關係であるが品物を賣るとか品物を貸すとか金を貸すとか云ふ場合に於ては、契約の當事者は借りる方も貸す方も、買ふ方も賣る方も、自分以外の物を契約の對象とする、自分の人格以外に在る物を契約の對象とするのである。例へば八百屋が大根を一本賣る八百屋は大根を賣る人でありお客は大根を買ふ人である。契約の對象は大根である。大根は八百屋の人格にくつ付いて居る物ではない又た買つた人の人格にくつ付いて居る物でもない。八百屋は賣るといふ契約に依つて之れを引渡しさへすれば宜い、引渡してしまへば最早彼の人格に何も影響を受くるものでない。買つた者が此れを煮て食はうと焼いて食はうと少しも八百屋の人格に影響を與へない。唯だ契約した代金さへ貰へば宜いのである。貸蒲團屋から損料蒲團を一夜に付て金何拾錢と云ふ約束で借りて来る。之れを相當に夜具として取扱つて用ゐて之れに對して約束しただけの損料賃さへ拂ひ渡せば一切それで完了して他に何も残らない。損料屋の蒲團を着て居る間私に別に損料屋から人格的拘束を受けて居る譯ではない。

住宅の貸主と借主

ところが同じ物でも少しく違ふものがある。近頃殊に問題になつて居るのは西洋でも日本でも

住居である。我々が貸家に入る、人の所有して居る家屋へ賃借人となつて入る。此れは元來云へば八百屋から大根を買つたり、損料蒲團屋から損料蒲團を借りたと同じ譯であるべきであるが、事實上はさうは行かない。何故ならば之を使用するに就ては自分が其家の内に入つて居る否自分の家族も其内に入つて居る。自分の人格の生存す可き所を借りるのであるが故に、多少人格の上影響を蒙むらない譯に行かない。又賃借人である間賃借人に對して——此點は段々變つては來たけれども——いくらか下に立つこと免れない。徳川時代の如きに於ては家主のことを大家と云ひ賃借人の事を店子と呼んで、大家は店子に對しての法律上、私權上一種の監督權を有つて居た。借金をするにも五人組の仲間と大家とが判を捺さなければ法律上有效でない大家が保證人になり又監督人になる。其他犯罪搜索などの場合に於ても大家は監督權を行使して居る、唯だ家を借りたと云ふ簡單な關係でなく非店を貸して呉れた店主の權力の下に立つ事となつて居た。現に今日でも民間の習慣としても——段々變化は起るであらうが——八百屋に對しては代金を取りに來いと云ふ、帳面で取つて居れば八百屋の方から晦日に勘定を取りに來いと云ふ。こちらから持つて行つて拂ふことは先づ原則でない。取る方の人から勘定を貰ひに來る。然るに家賃だけは家主の方から取りに來る事もあるが大抵は借家人の方から持つて行かなければならぬ。毎月二

十八日限り必ず納人の事等と、恰かも租税の上納でもあるかのように家賃通帳に書いてある。家主の方から取りに來るのはそれが延滞した場合、即ち怖い顔をして談判的態度を以つて來るときである。こちらも亦た家賃が一月でも遅れると對等の契約者であり乍ら多少人格を他の拘束の下に置かなければならぬ様にどうしてもなる。けれども是れは段々變つても來たし且つ昔の状態に於ても其拘束は堪へ難いと云ふほどではなかつた。

労働者人格の支配

然るに労働者が労働を賣ることは、例へば私が日給二圓五十錢を貰つて鐵工場の職工になるとすると、私は此二圓五十錢の賃金を貰ふが爲めに其鐵工場に行かなければならぬ。自分の家に居て仕事をする場合は雇傭労働ではない此れは請負労働である。それは又問題が違ふ。等しく労働と云つても今日の労働紛争、労働運動、労働問題の對象となる労働は、雇傭労働であつて請負労働ではない。随つて我邦の民法に於ても雇傭契約と請負契約とは全然別に規定してある。此は日本ばかりでない何處の國でも左様である。雇傭労働に於ては其労働力を有つて居る人、即ち一定の時間を限つて其の労働力を賣る労働者は、買ふ人即ち雇主の設けた細工場、仕事場、工場へ行

かなければならぬ。行つて居る間は其の雇主の定めた一切の作業規則に服従しなければならぬ。さうでなければ仕事は出来ない。自分唯一人でなく多勢の人と一緒に働くのであるから、多勢を取締る必要上色々な規則が必要である。朝は何時に就業して夜は何時に終る、晝の休みは何分間、午後の休みはあるとか無いとか食事をする場所は此處である便を達する場所は彼處である、就業中は面會人に面會してならぬとか色々な定めがある。其れ等一切の定めに服従するのでなければ仕事は出来ないのである。加之労働者が仕事をするに方つて如何なる事をするかは雇主の方で定める。無論大工として雇はれる者は左官をやれとは言ひ付けられることはない。乍併大工が如何なる事をするか、棚を拵へるか箱を拵へるか何を拵へるかは約束した時には定まらぬ、雇はれて其雇主の工場へ行つてそこで工場主なり、或は其代理者なり、工場長なり、監督人なりの命令に依つて初めて自分の爲すべき仕事が決まるのである。即ち労働の決定權如何なることを労働するかの決定權は全然雇主に在る。此の如くどう云ふやうに仕事をするかと云ふ一般の規定も雇主が定める、それから如何なる仕事をするかと云ふ「作業決定權」も全然雇主に在るのである。

綜合給付と特定給付

凡て働きでも或は品物でも或人から他の人に此れを契約に依つて給付する關係を二つに分けて「一般給付」或は「綜合給付」と「特定給付」とする。特定給付と云ふのはする仕事にチャンと定まつて居る、物ならば引渡す物が定まつて居る。此コツプを賣つて呉れいくらだ三十五錢だ、そこで三十五錢出して此コツプを買ふのは特定給付である。其反對にどのコツプと特定しない何でも宜いからこれ／＼のコツプ、三十五錢の價を有つて居るコツプを一つ渡して呉れと約束するは綜合給付或は一般給付である。物の給付の場合に方つては其給付すべき物を特定する權能は、買ふ人に在る場合もあれば賣る人に在る場合もある。八百屋の店に立つてそこにある茄子はいくらだ十で二十錢です、それを十呉れと云つて二十錢出して其茄子を取る、そつちのは嫌だこつちの方が良いと云つて取る、此は特定給付即ち給付すべき物を買主の方が特定するのである。八百屋が御用聞きに来る、八百屋サン今日は何かがある何々何々があります、茄子があるかあります、では十で二十錢の茄子を十持つて来て下さいと云つて歸る。此の場合にはどの茄子を持つて行こうか八百屋の勝手である、あすこの家は兎角勘定が悪い先月の拂ひがまだ貰つてない

から、餘り良いのを選ばなくとも宜い少々位きづのついたのを選つて持つて行けと云ふ。或はあすこの家は大變拂ひもよくて細君も中々愛嬌があるから成べく良いのを選んで持つて行かうと云ふ。此れは八百屋の勝手である。此の場合に於ては給付すべき物の特定權は賣主の方にあつて買主の方にない。物の給付に就てはどちらの場合もあり得るのである。

確定保険と豫定保険

保険と云ふ商賣には最もよく此區別が現はれて居る。生命保険には無いが海上保険それから陸上の運送保険に、確定保険、豫定保険の別のあるのが其れである。例へば私が今月何日に横濱を出帆する汽船に日本の品物の何々を積んで、價格壹万円に相當する物を亞米利加のシアトルまで送る、此航海中の危険を保險する爲めに東京海上保險會社へ行つて保險を附ける此を確定保険と云ふ。英語で Valued policy (確定保險證券) と云ひ獨語では Einzelversicherung と云ふ佛語には成語はないが Police a valeur declaree と云ふことになつて居るようである。何に保險を附けるかと云ふ品物が定まつて居り金額が定まつて居るから此は特定給付である。保險會社が附すべき仕事はチャンと特定して居る。即ち保險會社から保險と云ふ給付を買ふお客様の方で、給付すべ

き奉仕の種類を決定する。ところが實際の商賣に當つては中々さう行かない、何時何處の船へ積むか分らないが乍併今亞米利加へ日本の瀬戸物を約そ一万圓ばかり送る筈になつて居る。さう云ふ註文を受けて居る。然し皿小鉢がいくつ茶碗がいくつ土瓶がいくつ徳利がいくつと云ふ事は其時々依つて違ふ、兎に角一万圓ばかりの物を送る。何と云ふ船に積むか分らない其時の便船次第である。然も其が決定するまでは保險が附けられないでは困る、そこで保險會社へ行つて豫め約束をする之を豫定保險と云ふ。英語で Open Policy と云ひ獨逸語では Laufende Versicherung とも Generalversicherung とも云ひ、又は陸上運送(汽車積)には Pauschalversicherung と云ふのもある。又た場合によつては Abonnementsversicherung とも云ふ。佛蘭西では Police flottante 又は Police d'abonnement と云ひ、單に積込む可き品物文が確定して居ない場合には Police in quovis と云ひ、保險金額が確定して居ない場合には police provisoire と云ふ。凡そ今月の半ばから來月の半ばまでの間に於て神戸若くは横濱を出帆する船、又は神戸及び横濱で半分づつ積むかも知れぬ。神戸若くは横濱 神戸及び横濱積出しの陶磁器豫定價格一萬圓に對して海上保險を附けて呉れと云つて行く。保險會社は引受けます、保險料いくらと云ふことを定めて保險料さへ拂へば其の保險が有效になる。さうして愈々船へ積んだ時に、さて此間豫定保險に依つて約束した保險の

客體は何處産の瀬戸物何々何々であつて、斯う云ふ箱に入れて斯う云ふ商標を附けた物を郵船會社の何々丸へ積んだと斯う通知してやりさへすれば宜しい。此の場合には給付は綜合給付であつて特定給付でない。唯だ約そ一萬圓の價格の物に海上保険を附ける、此が危険に陥つた場合には保険料を支拂つてやると云ふ給付を保險會社は約束するので、どの特定の品物に此の契約が有效になるかと云ふことを特定するのは被保險者の方である。我々の生活は色々複雑多様であるけれども、大別すると總て斯く特定給付によるか綜合給付によるかに分れるのである。

綜合給付による人的働勞

ところで人に雇はれて働きをする者は先づ一番上の方から云ふと、官吏或は公吏此は極めて綜合的なる給付を爲すものである。判任官何級さうして俸給をいくら呉れると云ふことが先づ定まる、然し何課詰になるか何掛になるか何處へやられるかは雇はれる方の人には——夫は大體の話し合ひはあらう所謂内意なるものはあらう、出来ない事をやらせると云ふことは出来ないから、乍併官吏や公吏の仕事は誰でも大抵先づ出来る。何課へやるかは雇つた人の勝手次第である、否一旦或る課へ入れて置いてても直ぐ翌日は轉任を命ずるかも知れぬ轉課を命ずるかも知れぬ。又

た或る課或る掛附になつても、其の掛に於てどう云ふ仕事をするかはきまつて居ない。時々刻々日々に上長官が命じて此書類を調査しろとか何々の監督をしろとか、何處々々へ行つて検査をして來いとか、どう云ふ事務を處理しろとか一々其場合々々に起つて來て豫めきめることは出来ない。それをきめては仕事は出来ない。我々の家に使つて居る下女と云ふものもやはりさうである。下女として使ふと云ふことはきまつて居る、之をタイプライター掛に使ふとか或は書記掛に使ふとか、電話交換掛に使ふと云ふ場合には特定するけれども先づ下女に使ふ。之を下女に使ふときめると下女は何をするかは使ふ方の人でも分らない。今日は幾人お客様があつて長つ尻のお客様が直ぐ歸るお客様が分らない、長つ尻のお客様であれば隨つて餘計用事がある、平生は早く寢る家でもお客様が長く暮を圍んで居ればやはり起きて居らなければならぬ。サア何處を掃け何處を拭け使ひに行つて來い、坊ちゃんのお供をして學校へ行つて來い郵便を入れて來い、ナンダカンだと云ふ一々の仕事は皆一々の時でなければ分らない。其決定權は全然雇主の方にあつて雇はれる下女の方には無い。

働勞は綜合給付

今日問題となる勞働者の勞働と云ふものも大體に於てさう云ふ綜合給付をするものである。然し此れは下女の仕事とか公官吏其他所謂自由職業に於ける綜合給付とは大いに違ふ。と云ふのは其の仕事の種類は今日のやうに分業が發達すると自から定まつて来る。木工には金工の仕事は出ない、電線工夫に向つて鍛冶屋の仕事させることは出来ない、雇ふ時に既に大體の範圍は定まつて居る。然し乍ら一々の仕事は其の場合々々にきめる外はない。又た一旦きまつた事でも何時でも變更され得る。一般勞働條件は無論雇主が定めるのであるけれども、特定の勞働決定もやはり雇主がするのである。

給付特定權雇主に在り

此の如き勞働關係に於ては給付を特定する權能は買手の方にあつて賣手の方には無い。恰も我々が八百屋の店頭に立つて此茄子を十呉れあの南瓜を二つ呉れと云ふが如く、お客様の方で給付すべき物を定めるのであつて賣手の方で定めるのではない。さう云ふ仕事をするのは嫌だあゝ云ふ仕事をするのは御免だといふことは出来ない。サボタージュの場合は別であるが普通に働いて居る限りは毛嫌ひすることは出来ない。自分の出来ない事はしないけれども出来る範圍に於ては

命令された事をしなければならぬ。此の如き勞働を名けて「他人決定勞働」と云ふ。ところが同じ勞働者であつても請負勞働者は他人決定勞働でなく多くは自己決定勞働である。無論指物屋へ行つてトタン引を拵へて呉れと云ふ注文は出来ないけれども、指物屋へ行つて是れ／＼の物を指して呉れと云へば其を一日何時間働いて指さうが、自分の家の二階でやらうが居先でやらうが臺所でやらうが、或は戶外へ出てやらうが、作業條件の決定は全然請負勞働者の勝手である。燈火をつけて夜やらうが晝間だけやつて夜は休まうが日曜を休まうが休むまいが勝手である。——に請負勞働には時間拂と云ふことはない何れも出来高拂であるのである。——それから又其仕事をどう云ふやうにしようが、きめられただけ煙草盆を指して呉れと云へば煙草盆、針箱を指して呉れと云へば針箱を拵へさへすれば宜い。其針箱を作り上げる迄に至る道行はどうしようとも、自分が全然之れを決定するのであるから此れは純然たる自己決定勞働である。

勞働争議は他人決定勞働に起る

何故如此區別を明かにする必要があるかと云ふと、今日の勞働紛争は自己決定勞働に就ては起らない、又作業決定權が勞働者に在り作業條件を勞働者が定め得る者ならば、勞働紛争は多く

は起らないので、作業条件の制定と作業決定の權が雇ふ人の方にあり、従つて勞働が自己決定勞働でなく他人決定勞働である雇傭勞働に就て、主として起る者であるからである。故に勞働問題は詳しく云へば雇傭勞働問題である。一切の勞働の問題ではない、請負勞働の問題でもない。又「勞働」と云ふ言葉を何も形容詞を附けずに用ゐる時には、別に斷はらなくて此を雇傭勞働のことだと解釋する。即ち請負勞働のことは其中に入らないのである。勞働者の保護と云ふのも雇傭勞働者の保護の問題である。賃銀の保護、勞働力の保護、人格の保護も何故特に其が必要になつて來るか云ふと、勞働者は自分の勞働を賣ることに依つて雇主の定めた場所へ行き、雇主の定めた時間内に於て雇主の設けて呉れた設備を用ゐ、而して雇主の一切の指揮、命令の下に勞働しなければならぬからである。雇主が之を正當に取扱へば無論問題は起らないが、正當に取扱はず或は人格を毀損する場合もあり、完全な人格として取扱はない場合がある、或は取扱ふことの出來ない場合がある。勞働力を害する積りでなくとも自然害するやうな結果を惹き起す場合もあらう。賃銀に就ても約束した賃銀を決して天引きしようと思はなくとも、自然いくらか賃銀に手を着けるやうになる事もあり、又た此れ等の事を有意に意識的にやる場合もある。

請負勞働は然らず

無論請負勞働に就てもさう云ふ事が起らないとは限らない。けれども請負勞働に就て起る其れ等の場合は、一般の品物の引渡しを目的とする契約に就て起るのと其性質が同じである。例へば商賣屋の店に行つて品物を買ふ大抵は品物を賣る人の方で毎度有難うございますと云ふ。たつた一遍しか買ひに行かなくても毎度有難うございますと云ふ。一體から云ふと兩方から有難うと云はなければならぬ筈である。私が煙草屋へ行つて敷島を一つ買ふのは煙草が吸ひたいからである、そこで賣つて呉れないとなれば不便を感じるのである。十五錢で敷島を賣つて呉れたのは洵に有難い自分が煙草を吸ひたいと云ふ必要を充たして呉れたのであるから、賣つて呉れて洵に有難うございますと言つて宜い譯である。ところがお客様の方で有難うございますと言ふ場合も無いでもないけれども、多くは賣る方で毎度有難うございますと言ふ。お客様の方も有難うございますと言つて呉れないと、何だか不足のやうな顔をして有難うと言はれる權能あるかの如く多少威張つて居る。帽子をかぶつた儘外套を着た儘でツツ立つて、オイ嫂さんそこにある敷島を一つ呉れと云ふ、賣る方は有難うございますと云つて腰を下げて賣る。此は一體間違つた話である、

若し買ふ方がツツ立つて居るならば賣る方もツツ立つた儘でハイと云つて突き出せば宜い譯である。向ふで腰を下げるならば買ふ方も先づ帽子を取つて丁寧に挨拶をして、どうぞ煙草を一つ賣つて下さいと云つて宜い譯である。向ふが強ければさうする。即ち郵便局などで切手でも拂下げた貰ふ場合には帽子を取りもしまいが、兎に角こちらが腰を低くしないと吐り飛ばされる事が随分ある。對手がお役所であるとか云つて向ふが強いとこつちの方から頭を下げる。殊に此頃のやうに住宅難であると家を一軒借りようとするには、何度も家主の所に行つてベコ／＼頭を下げる。ければ貸して呉れない。此は決して賣手、買手できまるのではない向ふが勢ひが強いとこつちが凹んでしまふのである。さう云ふ所から人格の壓迫、勞働力の壓迫或は正當なる代價の引渡しの不履行と云ふやうなことがあるけれども、此は社會一般に起る事であつて、段々人間が進んで行けば自からさう云ふ事は無くなることであらうし、あつたところで左ほど大なる弊害として叫ぶべき程でないのが普通である。

雇傭労働の人格壓迫

ところが雇傭労働——他人決定労働に就てはそんな生優しいことを言つて居られない。頭を下

げるも下げるもウンと下げなければならぬ、即ち契約の一番肝腎な條項の拂ふべき賃銀に就て、働かせることは十分優かせ乍ら、やる方の賃銀はナンとかカンとか罰金だとか遅刻したとか云つて之を天引することがある。末弘博士の書いて居る論文を見ても日本の民法の今の解釋に従つても雇主は勞働者に其約束した賃銀を支拂はなければならぬ、勞働者に何か過失があつて賠償しなければならぬ金額があつても其と相殺することは許されないのである。此は辯護士を頼むと許すと云ふやうな解釋をするかも知れぬけれども許さないのが本當である。假に許したとしたところが、事實勞働者は其賃銀を貰つて一家の生計を立て、居るのであるから、其中の一圓なりとも押へられるのは取りも直さず其生活の一部分を押へられることである。彼れは自分の食べ物を減らすか子供の食べ物を減らすか、細君の着物を減らすか、何か眼に見えて減らさなければならぬ。雇主の方では其の金額を取らなくとも自分の人格の上にも何も制限を被むる譯ではない。同じ金額であつても其の及ぼす影響作用は大變に違ふ。

勞働供給の調節難

何故斯う云ふ事になるかと云ふと、勞働を給付する勞働者即ち雇傭労働者は他の給付者と違つ

た特性を有つて居るからである。即ち第一雇傭労働は他の品物のやうに需要の多寡に應じて供給を調節することの出来ないものである。品物であれば今世の中の景氣が悪い値が安いと云へば供給を差控へる事が出来る。例へば此頃米屋がやるやうに、どうも米の値が少し下つて来た、さうすると賣惜みと云ふことをやつて賣らない、有つても無いやうな顔をして仕舞つて置く。此は經濟學の言葉を以て云へば需要の如何に應じて供給を調節するのである。需要が減つたのに供給をドン／＼續けて行くと値が下がる、それでは結局損をするから供給を控へ倉の内に藏つて置く、藏つて置く内に農商務省で買つた米のやうに腐つて来る場合もあらう、然しあれは間拔な役人がやるから腐らかすので、商賣人がやれば大儲けからかさないやうに藏つて置く。腐らかしてもナンでもやはり調節には確かになる。其が大いに出来る場合と出来ない場合との違ひはあるけれども若干の程度までは必ず出来る。尤も此は労働者でも出来ないことはない、労働者でも生活に餘裕があり自分に蓄へた金があり財産があり、或は他の収入があれば、餘り賃錢が安くて馬鹿々々しいから今は仕事をしないで、暫く賃錢の騰るまで雇はれずに居よう云ふことも出来る。

労働者は多くは其日暮し

ところが第二に労働者の大多数は其日暮しの者である貧しい者である、労働以外に彼れは其の生活を支ふべき資源を有つて居らぬ必ず労働を賣らねばならぬ者である。随つて市場の景況が今需要が乏しいからと云つて労働の供給を差控へることは、先づ大多数の雇傭労働者に就ては出来ない。一日爲さざれば一日食はないで居なければならぬ。彼自身のみならず彼の家族も共に儉しい思ひをしなければならぬ、従つてモツと賃を取り得べき筈と思つてもどうしても雇手が無いれば安い賃錢でも甘んじて働かなければならぬ。それと云ふのは労働は取つて置くことの出来ぬもの、最も足の早い恰度夏向の魚のやうなもので其日の内に食つてしまはなければならぬものであるからである。今日一日働かないで置いて明日二日分働くことは出来ない、元より今日一日休めば明日は休まなかつた一日より身體が休息して居るだけ餘計働ける、今日餘り働けば明日は一日分の働きは満足に出来ないと云ふことはある。けれども一日まるで遊んでしまつたものを翌日二日分働くことは出来ない。働かなかつた一日は永久に喪はれてしまつた一日である、回復する事の出来ないものである。だから有つて居る労働力を一日々々に働かして行かなければならぬ。恰度夏向の魚を持つて居る魚屋のやうなもので、いくら安くても持つて居る魚は其場で賣つてしまはなければならぬ、賣れなければあとは捨て、しまふより外はない、そこで投げ賣をする

事になる。東京の場末等に安魚屋と云ふものがあつて、普通直段の半分三分の一位で夕方になると魚を山の様に並べて賣つて居るものがあるのは此捨賣品である。其と同じく労働者も市場の景況が甚だ悪く労働に對する需要が少い時には投げ賣をする、此頃のやうに世間が不景氣になつて來るとどうしても労働者は投げ賣をしなければならぬ。然らざれば所謂失業で業を失ふことになる。失業者となることを免れるには安く投げ賣をしなければならぬのである。であるから同じ對等の契約を結ぶにしてもどうしても労働者の方が弱い、賣り急ぐ足許を見られるのである。雇主は労働者が無くては仕事が出来ないから労働者は欲しいのであるが、労働の供給は澤山あるから或る労働者が雇はれて呉れないでも他にいくらも代る人がある。先年のやうに景氣が大變好く労働者が引張り風である時には代りが得られない事もあらうが、此頃のやうになればいくらでもある。お前が嫌ならいくらでも他に人はあると云ふことになる、だからいつも強い。労働者の方は始終足許を見られる、雇主の方は足許を見て居る、だから法律上は對等であるけれども實力上は決して對等ではない、非常にびつこなもの片方は大變強く片方は大變弱いものである。

労働の給付は人格と不可離

第三に労働は労働者の人格と引き離して之れを給付することの出来ないものである。労働者が労働するには自分の身體を以つて自分の心を以つて、萬物の靈長である魂を宿した身體を兎に角工場まで運んで行つて、そこで働かなければならぬのである。雇主は必ずしも其人格を壓迫したい譯ではない、出来るなら労働者を人間として尊敬したいかも知れぬ、乍去事實上どうも左様出來ない、裸體になつて働いて呉れなければ困ることもあらう。裸體になるのは人間として洵に好ましくない、殊に九州の炭山などでは女が裸體殆ど素つ裸で働く。唯だ僅かに或る部分を掩ふて居るだけで、坑内で車を引張つて居るものなどもあるとか云ふ。彼等は段々羞恥の念を失つて居るであらうが、普通の婦人ならば堪え難い人格の壓迫である。けれども左様しなければ働けない非常に熱くて狭い所を車を引張るのであるから、裸體になれとは命ぜられる譯ではあるまいが、事實裸體にならなければならぬやうな仕事を命ずるから、彼等は裸體になるのである。美術家がモデルとか云つて女を雇つて來て裸體にして、寫生することがある。裸體にならなければ出來ないやうな仕事をさせることは、普通の常識を以つて考へれば甚だしい人格の壓迫である。それはやる人があるから成立つのであるけれども、同じくは裸體にならないでモデル賃を貰ひたいに相違ない。誰も女の身として好んで裸體に、而も男の前で裸體になりたくはないに相違ない。所

が労働者には裸體になる事ばかりでなく、色々な場合に人間として迎も堪られない事、堪へられ
ても甚だ堪へにくいやうな事をしなければならぬ。仕事の性質として已むを得ない。高い所に登
つて煙突の掃除をする、電線工夫が電柱の上で電線をいぢる、随分危ない何時感電するか知れな
いけれども、何時感電するか分らない所に行かなければ電線工夫の仕事が出来ないのだから仕方
がない。雇主が左様するのでもナンでもない、仕事の性質が之れを要求するのである。此れが機
械であれば高い所へ上げようが危ない所へ上げようが感電する所へ上げようが、物には人格と云
ふものが無いから一向人格の壓迫にはならない、物格の壓迫にもならない、機械には感じは無い
が、生きて居る人間に取つては其れは人格の壓迫となるのである。

自己決定労働は壓迫を感じる勢し

であるから労働力を賣ること雇傭労働を賣る事は、等しく契約の關係、對等の關係ではあるが
其れに著しい特性が付いて居る。此の特性の付いて居ることは、自己決定労働であれば其れを壓
迫と感じないのが原則である。自分で好んで高い所へ上る、好んで感電しそうな所に行つて居る
分には辛いとも思はない。命令されてさうしなければ賃錢が一日分貰へない、之れをやらなけれ

ば自分並に家族が食つて行かれないからやると思つたら、當人になつたら随分堪へられないこと
に相違ない。大抵の人はそんな事を考へてやつては居まいが、一度度技に考へ至ると堪らなくな
る。同じ事でも自分が好んでやれば苦痛でもナンでもなく或は寧ろ樂みな事であつても、他人の
命を受けてやると云ふ事は其の廉で之れを苦痛たらしめる。例へば駆け出すと云ふことは、人間
に取つて或る程度までは必要であり樂しみである。マラソン競走などと云つて、冬の寒い日に袖
なしシャツを着てよく若い者が駆けて居る。けれどもお前に一回やるからマラソンの積りで駆け
て見ると云はれたら、同じ駆けることでも當人は餘程辛いだらうと思ふ。否チヤンと半被を着、
股引を穿き足袋まで穿いてお客を乗せて走る車屋は、決して悦こんで樂しんで駆けて居る譯で
はない、出来るならばそんな事をやりたくないに相違ない。肉體的にはどつちが苦しいかと云へ
ば、マラソンで駆ける方が苦しいだらうと思ふ、けれども此は自己決定であるから苦痛ではない。
それに反し他人決定で他人の爲めに命令されてやる事、而かもそれは其事自身が目的でなく、賃
錢を貰ひたい生計を維持する資料を貰ひたい爲めにやると云ふ事が、他に何も苦痛が伴はなくと
もそれが既に苦痛である、之れに加へて仕事の性質上必然的に、若くは必然的でないまでも附隨
的に人格の壓迫なり、或ひは労働力の壓迫なりが伴つて来る。そこで労働の苦痛が起り、随つて

不平が起り、其の不平を訴へる爲めに勞働争議が起つて来る。勞働争議の抑々因つて起る所以は勞働が他人決定勞働であるからである。

契約の名實相反す

此くの如く今日の勞働争議は勞働關係が契約關係であるから起るのである、此れが主從關係であるならば起らない。だからそれを主從關係にしると云つたつて、そこだけ主從關係にしてもあとはやはり契約關係であるから、それは出来ない相談である。問題は契約關係であることを廢すと云ふのではない。契約關係と云ふ原則はどこ迄も守つて行くが、其の契約關係から必然的若くは附隨的に起つて来る弊害缺點を、他の方法を以つて補つて行つて、契約關係を名實相合するものにする事が今日の社會政策の當面の仕事である。然るに勞働者が一人々々である間は、どうしても此の缺點を取除くことが出来ない。一人々々の勞働者は餘りに弱い者であつて、雇主と本當に對等なる契約の當事者とは、事實なつて居ないものである。唯だ法律の眼の前に於て對等と扱つて居るだけである。普通勞働契約はどうして出来るかと云ふと、私が一人の職工であつて例へば川崎の造船所へ雇はれる、三菱の造船所へ雇はれるとする。さて私は雇はれたいが、あな

たはどう云ふ條件で雇つて呉れるか一つ條項を提出して下さい、其中で私の氣に入つた簡條だけ採つて氣に入らない簡條はお断りする、其の代りに私の方にも要求があるから入れて下さいと云ふやうに、一々討議して條件を定めて契約を締結するものではない。雇傭契約の文面がチャンと出来て居る。而も雇傭契約と云はない、確か勞働者の方からのみ差入れる誓約書の形を採つて居る。此度御雇入に相成るに就ては勤勉忠實に一切の命令をよく守り、若し萬一罷り間違つた時には一身を以て責任を負ふのみならず、茲に保證人が判を捺して居るから、保證人も責任を負ひ可申候、何々の場合には斯う云ふ御處分を被むり、斯くくの場合には斯う云ふ御處罰を被むつても決して異議はないと云ふやうに、大抵勞働者の義務だけ書いてあつて、雇主の義務は書いてない。それはチャンと活版に刷つてある、其れを欲しないなれば雇はれる事は出来ないものである。決して完全なる自由の對等の意思を以つてする合議ではない。一方的の命令である。唯だそれを受けるとか受けないかは勝手である、嫌ならば雇はれないだけの話、其の代りに食べることが出来ない。賃金を貰つて食べて行かうと云ふには此の條件を承諾する外はない。一人々々として勝手な事を要求してもそれは逆も出来ない話である。それが甚だ都合だからと云つて、大きな會社で職工を雇ふ爲めに、一人々々に就て一々約束し相談して條項をきめると云ふことは、事實出来